
主義主張

折れた鉛筆

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主義主張

【Nコード】

N9442X

【作者名】

折れた鉛筆

【あらすじ】

情けは要らず。容赦もかけず。戦うために剣を取ったのなら是非も無し。戦場に於いては殺す事も殺される事も躊躇は無用。躊躇う者から死んでゆく。生き残りたくば非情になれ。剣にて殺した者は剣にて斃れ、戦いを拒否する者は豚のように死ぬ。

……戦争を。血と魂の慟哭を。血が湧き肉が踊る物語をアナタに贈りたい。

プロローグ1

『問1・あなたはゲーム、漫画、アニメは好きですか?』

いいえ。興味はありますが、手を出すだけの暇と時間がなく、見たことが無いので好き嫌いを判ずることはできません。

『問2・あなたは友達がいますか?』

いいえ。私の人間関係は大抵がギブ&テイクのドライなものです。友情とは、おそらく私の人生の中で最も縁遠いものでしょう。まあ? 向こうが私のことを友達と認めている分には勝手だと思いますが。

『問3・あなたは人間が好きですか?』

はい。大好きです。特に好きなのが努力家の人間です。天才も好き

ですが、努力を怠る類いの天才は嫌いです。

『問4・あなたは今、何をしていると興奮を覚えますか？』

道端で座り込んでいるワル気取りの馬鹿少年どもの背中を、後ろから蹴つり上げる事です。無論、蹴りつけた後は顔を見られる前に即座に逃げますが。

『問5・あなたは自分が素晴らしい人間だと誇れますか』

はい。私はそこら辺の去勢された犬のようなオスとは違う、闘うことを知っているという自負と誇りがあります。

『問6・べたなシチュエーションですが、もしも女の子が柄の悪い複数の男に絡まれていて、困っていたらどうしますか』

見て見ぬ振りをします。

ただ、その女の子が可愛かったら助けます。私は基本的に打算で動

くので。

『問7・あなたは自分がどういった人間か自覚していますか？』

自己中心的な男。だが他人を大切に思っている、と周囲に認識されるようにしている。

馬鹿が嫌い。向上心がないオスが嫌い。男女平等という大義名分を掲げておきながら、家庭で夫を顎でこき使い、稼いでくる給料をむしりとして家事や子育てを押し付けてなお男女平等を謳う厚顔無恥な女は殺したい。人間は全て平等とかほざくやつが嫌い。

金は悪徳とか美人は三日で飽きるなんて低レベルな嘘をつく日本の風習が嫌い。

女の顔色を伺う去勢されたオスが嫌い。野心のないオスが嫌い。

ギラギラした欲望を持つ男が好き。実力がある女が好き。大衆の意見に流されない男が好き。陰口ではなく直接文句を言いに来る強気な女が好き。

女らしい女、男らしい男が好き。美人が好き、ブスは死ね。

仕事一筋の男が好き、恋愛ごっこにうつつを抜かす男は嫌い。己を誇る男が好き、男を立てることの出来ない女は死ね。女に優しく出来ない男も死ね。男の傷を癒せない女は消えろ。

あと安陪、朝生、その他諸々の量産型政治家ども。お前らも死ね。

そんな差別主義な人間です。

そして、そんな自分のことを私は大好きです。

『問8．あなたは周囲にどんな風に見られていると思いますか？』

辣腕政治家。独裁者。民主主義を蔑ろにする総理大臣。英雄。ワン
トップ主義。

……まあ、腐った政府を改革し、政治家の天下りや無駄な政策の打ち止め、予算の無駄遣い、延々と貯まり続ける外国に対する借金の支払い拒否など、日本国民の生活水準を大幅に向上させたことで民衆には好かれていると言えます。ただ、政治家の大半には嫌われていますがね。

『問9．あなたは 殺人に、興味がありますか？』

あります。特に礼儀を弁えぬ頭の弱いやつを見ると男女の別なく殺してやりたくなります。

最近はその衝動を抑えるためにそれなりの努力を要するようになってきました。

人を殺す妄想をしているときや、睡眠時の夢で人を殺している姿を見たときなどは、たまに勃起してしまいます。

特に、私の遣ること為すことにいちいちテレビなどで意見する、訳知り顔の自称政治の専門家とか、拷問で苦しみ抜かせた末に殺したくなります。

なんですかあれ？ 私の前では媚びへつらつくせに、テレビとかでは強気って。……今度、事故に見せかけて殺してやろうか。

『問10・二次創作の小説によくあるテンプレで、あなたは神様のミスで殺されてしまいました。そしてミスで殺してしまったお詫びに何でも願いを叶えてくれると言われました。あなたは何を願いますか？』

テンプレ？ ……テンプレート、という意味ですか？

まあ、『二次創作の小説』という意味と内容がわからないですが、とりあえず神様がミスするわけなのでしょう。全知全能なんだし。

え？ ミスすると仮定して考える？

ふむ。……とりあえず生き返らせてもらいますね。中学生の頃から人生やり直して、後に私にとって目障りになる奴を殺して回ります。警察とかの捜査に引つかからない術も知ってますしね。

え？ 異世界にしか転生できない？ なんですかその理屈。

まあ、仮定 IF
もし

の話で考える分なら面白いので考えてみましょう。

そうですね、とりあえず人間の魂の变革を望みます。

たとえば、全ての男が競争心溢れる野心家であり、かつ努力家になるように。

たとえば、全ての女がジャンルは違えど魅力的で、己の美貌を磨く努力を怠らぬようにするとか。

それだけで、世界は今よりはマシになるでしょう？

怠惰な衆愚どもの意見を誘導するのって、かなり大変ですし。そうしたら、私が苦勞せずとも日本も安泰です。

あとはそうですね、馬鹿はみんな殺してくださいと願います。

まあ、私の願ひ事のせいで国家間の競争が激しくなりすぎて、戦争が起こりまくっても私の知ったことではありませんが。

日本が徴兵制を復活させて、私が徴兵されたら、とりあえず、死ぬまで敵を殺しまくってるでしょうね。

『問11・偽善者、聖人、犯罪者、一般人、英雄、軍人、政治家、哲学者、革命家。あなたはいつたい何が一番偉いと思いますか？』

……というか、質問が多すぎですよ。そろそろ終わらせてください。

問11に答えるとしたら、それはもう一般人が一番偉いですね。

なんたつて、偽善者も、聖人も、犯罪者も、英雄も軍人も政治家も哲学者も革命家も全部が全部、一般人の中から生まれるんですから。それに、一般人という大衆がいなければ、人を殺すことしか出来ない英雄やら軍人やら犯罪者、口しか動かせない偽善者や哲学者、人を導くことしか出来ない革命家や政治家の食料はいつたいどこから出てきてるんです？

考えればわかるでしょ。

貴族よりも、王よりも、農民のほうが尊いように。

地味で、苦しい仕事に耐え続けている農民……一般人のほうが偉いに決まっています。

もつとも？ 私は一般人という大衆に飲み込まれるのは御免蒙りますがね。

『問１２・二次元の美少女と、現実の美少女。どっちが好きですか？』

……アレですか。私がテレビゲームや漫画本などを詳しく見知っているものと仮定しての質問ですよ、それ。

知りませんから。二次元なんか知りませんから。興味はあるけどまだ知りませんから。

真剣に答えるなら、俄然現実の美少女に決まっていますよ。だって、二次元は触れることが出来ないじゃないですか。私は同じ三次元のセックスできる女が好きです。

『問１３・あなたは人気者になりたいですか？』

なりたくないです。

むしろ、私の感性や思想を否定したがるような人とは仲良くなりたくありません。

私は政治家です。人気取りが上手くないと生きていけないのです。ですから個人的な感情を押し殺して今日も人気取りを頑張ってますよ。

つーかアレだ、いい加減に質問終わらせろよ。次で終わりな？
私は暇な人間じゃないんだよ。

『問14・愛と仕事、権力と自由、義務と名誉、己と他者 何が大切ですか？』

愛と仕事では、仕事ですね。愛はいりません。二の次です。

権力と自由では、自由です。自分の時間のない人生は退屈ですし。

義務と名誉？ 義務に決まってんでしょ。義務も果たせない人間に社会で生きる資格はありません。名誉なんてものは義務を果たしている内に自然とくっついてくる副産物みたいなものです。

己と他者？ 阿呆ですかあなたは。己に決まってるでしょ。偽善者みたいに、自分よりも他者だなんて気持ちの悪いことは言いません。

この中で順位を定めるのなら……そうですね、1位が己です。義務と仕事と同列で2位。名誉が3位。4位が自由。5位が権力。愛と

他者が同列の6位、と言った具合です。

さて。質問の受付はこれから辺で終わらせてもらいます。
では

『……問15・貴方は天才ですか？』

ばーか。答えませんよ。問14が最後だって約束でしたから。
では、さようなら。

第一話「アオスブルフ・シュトライテン」

第一話

「アオスブルフ・シュトライテン」

ウ ウ ウ ウ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ ツ ツ ツ
!!!!!!

口腔より迸る、野獣が如き極大の咆哮。

銃火が乱れ交う戦場で、誰もが雄叫びを上げている。俺もまた負けてたまるかと腹の底から雄叫びを上げ続け、手にする小銃から吐き出される銃撃をただ只管に戦場へ撒き散らした。

敵の頭蓋は粉碎され脳漿を撒き散らす。

敵の胴体をスタスタに撃ち破つてピンクの内臓を四散させながら、吐き出されてくる銃弾の雨霰を掻い潜り、死に物狂いの行軍を続けて見敵すれば必殺する事を忘れない。

「づあっ?!」

被弾。左上腕部。戦闘行動に支障なし。

痛みを発する傷口が灼熱となって脳髄を焼く。

アドレナリンが大量に分泌されているのがわかる。

被弾した個所の痛覚を軽減し、周囲の状況を掴む感覚を鋭敏化してくれていた。

「大尉　　ッ？！」

「構うなッ！　前を見る！　死にたいのか新兵　　！！」

部下のひとりが俺の呻き声を聞いて悲痛な叫び声を上げるが、それを激しく叱咤して構わせない。

前を見る、後ろを見るな、血の温度を上げ続け、ただ只管に虐殺しろ！

此処は戦場。

一瞬の油断が死を招き、勇敢過ぎた者が斃れ、臆病すぎる者は味方に撃たれる。

死にたくないなら前を見る。敵を殺せ。

殺して殺して殺しまくって、敵を総て殺し尽くしたら俺たちの勝ちだ　　ッ！

「ノイエン　　ッ！　敵が敗走を始めたぞ、手筈通りに追撃だ、トラック回せエッ！！」

「あいよ大尉！　劣等どもを殺し尽くそうぜえ！」

部下に叫び、殺意と喜悦に塗れた声が俺の命令に威勢よく応えた。やって来た軍用トラックの荷台に乗りこみ、生き残っている指揮下の小隊１８名を引き連れ、中隊に矢継ぎ早に指示を放った。

俺たちは自走砲部隊と兵站部隊を維持し戦車部隊に支援される、トラックに載せられた装甲擲弾兵だ。敵前線に集中する侵攻部隊の迅速な移動を助け、孤立した敵の部隊を包囲殲滅する事を主な任務としている。

その任に従い、孤立した敵を発見するや俺たちはすぐさま何度目かの移動を開始する。

「勝ちましたね、大尉」

トラックの荷台に乗り込み、小銃を脇に置いて左上腕部の応急処置を手の空いている部下にして貰っていると、俺の下で歴戦を重ねている右腕　ノーウェン中尉が話しかけてきた。

その声は、血と硝煙、殺戮に酔いしれた声音だったが、その瞳だけは何処までも冷徹なままだ。

その声は生き残った隊の連中に聞こえるように微妙に大きく、その意図を察した俺は話を合わせることにした。

「ああ、勝った。ここから戦局を覆る事は、それこそ軍神にだって不可能だ」

俺の声が絶対の確信を宿している事を感じ取った部下たちが、これまで強張っていた表情を僅かに緩めた。

そうだ。俺たちは勝ったんだ！

その喜びを満面に広げ、歓喜の声を上げ始める者もいる始末だ。

ノーウェン中尉がここで何かを言おうとするのを、俺は手を上げて制した。

「勘違いするなよ馬鹿ども。あくまで、国同士の勝敗が決したという意味だ」

首をかしげる部下たちに、俺はこれ見よがしに嘆息して見せた。

それは、俺の左腕の応急処置を終えた部下　イングヒルト・ガッ

セナルに対してのメッセージだ。

気を緩めるには早すぎる。家に帰るまでが戦争だ。

そのメッセージを受信したイングヒルトは、生真面目にうなずいて、緊張の抜けた瞳に改めて闘争の炎を灯した。

「だがな、まだ戦場^{ウラ}には敵兵が生き残っているだろ？ まだ個人の闘いは終わっていない。敵兵は殺されまいと死に物狂いの抵抗を見せるだろう。それこそ、味方を生かすために対峙した敵を道連れにしようとする者もいる筈だ。俺たちは勝った！ だがまだ死なないと決まったわけではない。死にたくなければ敵を殺し尽くすまで気を抜くな！ 己が死ねば隣に立つ同胞が斃れるかもしれないと恐怖しろ！」

叱咤する俺の声に、部下たちは再び獰猛な殺意を胸に宿し、敵を殺す事の喜悦に代わって、仲間が死ぬかもしれないという恐怖が起った。

そう、恐怖だ。

その恐怖は、きっと敵を殺し尽くすまで消える事はないだろう。

大事な戦友 同じ釜の飯を喰らい、過酷な訓練に共に耐えた盟友が、敵に殺される。

血を分けた兄弟を失うようなものだ。

そんなことは耐えられないと、部下たちは壮絶な覚悟と闘争心、燃える殺意を滾らせた。

その面構えを見て、俺は満足げにうなずいた。

これなら大丈夫だ。ここに来るまでに何人も死んでしまったが、これ以上犠牲が出る事はないだろう。

少なくとも、この戦いでは。

「さすが大尉。大尉の言葉には不思議な力がありますねえ」

「この程度で随分と褒めてくれるな、ノーウェン」

声を潜めて話しかけてくる部下に、俺は苦笑を以って迎えた。

「いやね、大尉がまだ新兵だったころからおれはこの隊に居たんですが、大尉がこの中隊の指揮官になってから、随分とコイツらがイ目をするようになったんですよ。あんたは、兵を率いるのに相應おれたちしい、おれたちにとっての英雄だ」

英雄、ね。

その響きが、どこか別世界の言葉のように思えて、俺は僅かに苦笑を深めた。

ああ、そうだろう。長らく前線で生き続けてきたノーウェンがそう言うのなら、俺は確かに英雄（イカレ野郎）なのだろう。

だって、人を殺しておきながら、俺の内にはただ『敵を倒した』という原始の高揚しかないのだから。

「私も、中尉と同じ意見です、大尉」

「ガッセナル少尉？」

ガッセナルは今の遣り取りを聞いてたのだろう。その言葉はやけに熱っぽかった。

「この戦争で一番の戦果を上げたのは、きっと大尉ですよ！ 大尉がいたから作戦はこんなにも手際よく進んだ、そしてわたしのような未熟者も生き残る事が出来た！ 大尉は、本当に」

その熱っぽい眼差しが、俺にとっては嫌なモノに思えた。

だつてそれに宿る感情は？崇拝？だ。

？崇拝？は、遠い存在に向けるモノなのだから。共に戦った戦友に向ける目ではない。

不意に、ガッセナルの台詞を遮るようにトラックが止まるのを、荷台に居た全員が感じ取り、同時に俺は短く命令を下した。

「降りるぞ、お掃除の時間だ」

獵犬が放たれる。

残兵が息を潜めて隠れているのを見つけだし、その抵抗を搦り潰してその喉を噛み切るために。

殺して殺して殺し尽くして、血を分けた家族と同等の絆を持つ戦友たちを死なせないために。迅速に。そしてどこまでも容赦なく、苛烈な殺意に身を任せて敵兵を駆逐し始めたのだった

【……………】

ジーク・ハイル
勝利万歳ッ！
ジーク・ハイル
勝利万歳ッ！

勝利に湧く同胞たちを尻目に、私はソツと瞼を閉じ、この戦争の内

容を頭の中で反芻していた。

私の所属していた隊はそれなりに戦果を挙げた。私自身も、初陣にしては機敏に動いていたと思うし、初めて人を殺したのにもかかわらず罪悪感や気持ち悪さは微塵もない。

ただ、やるべきことをなしたという満足感と、己が生き残ることが出来たという実感が、とんでもなく巨大な達成感となって私の心を充足させた。

ただ、惜しむらくは私が所属する中隊、その中隊長が有能だったことだ。

もしも上官であるジークマイヤー大尉が無能だったら、私はドサクサ紛れに大尉もろとも中隊副官と自分以外の尉官の者を撃ち殺し、隊の実権を握って、この隊の功績を独り占めにしたいと思っていたのだから。

まあ、しょせん私は新兵だ。過ぎた野望は身を滅ぼすことを心得ておかねば、ただの愚か者に成り下がってしまうだろう。

私にも愛国心はある。忠勇なるドイツ軍人を手にかけて、優秀な人材を少なくしてしまうのは本意ではない。まったく、困ったものだ。

私はとりあえず担いでいた小銃を胸に抱いて、トラックの荷台の中で眠ろうと思った。

なにせ戦争直後の疲労がピークに達している状態である。私自身は疲労で倒れてしまうほどヤワな鍛え方をしていないつもりだが、私の知らぬところで私の体が限界を迎えているなんてことも有り得る。休める内に休んでおくのが賢明だろう。

メットを外して、代わりにタオルを顔の上におく。そうして外界の視覚情報を遮断して、騒ぎまくる戦友たちの声をBGMに、心地よい睡眠の中へ沈んでいく

勝利万歳ッ！ 勝利万歳ッ！ 勝利万歳ッ！

勝利万歳。

眠りの中でさえ繰り返されるその文句が、私の魂に刻まれる。

そうだ、勝利万歳。

初めは戸惑っていたけど、今の私にとってこの髑髏の帝国は最高の祖国になっていた。

なにせ勝利に対する渴望と、野望がすごい。

能ある者が上に行き、能無しが下でくすぶる。

まあ、中には能無しが上にいる場合もあるわけだが、それはただ家の力を使っただけのおぼっちゃんだ。私の眼中にはない。

僅か10分。

仮眠としては短い時間。

私は、随分と懐かしい夢を見た。

愚かしく、悩ましいまでに腐り果てた、平和で、平穏で、何の気概も持たぬ劣等が蔓延る国での思い出が 私の【最初の母国】の記

憶が

まるで。私とその存在を忘れる事を許されていないみたいに、呪いのようなしつこさで私の脳裏に記憶が再生される。

「アオスブルフ、ここにいたのか！」

「」

不意に、私を呼ぶ声がした瞬間に、私は忌まわしい記憶の中から一気に引き上げられた。

瞼を開ける。そして声のしたほうに目をやると、そこには ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤーという黒髪黒目の女がいた。

切れ長の双眸、スツと通った鼻梁と頬から顎の綺麗な流線と白皙の美貌。

オスならばむしろぶりつきとなるようなイイ体をした美女がそこにいた。

ヘルガローゼは普段の落ち着いた佇まいをかなぐり捨て、上機嫌に、頬を高揚で赤く染めながら私 アオスブルフ・フォン・シュトライテンに声をかけてきた。

「なんだヘルガローゼ。私はこれから眠ろうとしていたところなんだが」

嘘だ。すでに寝ていた。が、眠り始めてそんなに時間が経っていないことを、私の優れた体内時計は正確に把握していたため、如何にも不機嫌そうにそんな台詞を吐いたのだ。

だが、私と同期のユーゲント卒業生である親愛なる戦友殿は、そんな私の機嫌など気にした素振りもなく、私に起きるようせつついて来た。

「何を戯けたことを。これから戦勝を祝う集まりがある。お前もこい」

「いやだ。……と言ってもお前は私の言葉など聞かないのだろうな……」

「当然だ。来い」

ヘルガローゼは私の腕を掴んで強引に引つ張り起こす。仕方なしにトラックの荷台から降りて、私はヘルガローゼに連行される形で歩いて行つた。

ヘルガローゼにとって私という人間は、ある意味で恩のある恩人というカテゴリーに組み込まれているのかもしれない。だから色んなところで世話を焼きたがるのだろう。

私がヘルガローゼに初めて出会ったのは、ユーゲント時代の、なんと男子トイレの中だ。

言わずともわかるだろうが、ヘルガローゼは女だ。ではなぜ男子トイレの中に？ 別にトイレ掃除の当番でもなかったのに。

簡単だ。ヘルガローゼは、とある能無しの男ども5人に組み伏せられ、犯されそうになっていたのだ。いくらヘルガローゼが優れているとはいえ、同じく鍛えられている男複数を相手にするには、まだ未熟だった頃だ。流石に抗えなかったのだろう。

まあ、ヘルガローゼが美人なのはわかる。おそらく私の同期の中で

最も優れた器量の持ち主だっただろう。

だが私は価値の合わぬ男女の仲は決して認めない主義で、さらに言うなら美人さんを見捨てられるほど鬼畜でもなかった。

だから私は、とりあえず興奮して周りが見えていないオスどもに背後から近づき、ボツコボコにしてあげた。ついでに、軍人として再起できぬように徹底的に叩き潰してあげた。両手とか日常生活でも使えなくなるほどグチャグチャにした。

後に私の家とこのオスどもの家の間に不和が起こったらしいが、どうでもいい話ではある。

学校のほうには、私がヘルガローゼを助けたこと。男たちが私に暴行を働こうとしたので叩き潰したこと（嘘）を伝えたら、あとは不祥事を恐れる校長によって事態はもみ消された。

ヘルガローゼは、男に　　それも同期の仲間が強姦されかけたのがショックだったのか、それ以降のヘルガローゼは助けてあげた私以外の男には警戒と嫌悪感を見せるようになった。

……正直、私にも下心はあるわけだし、あの男たちと私とはあまり大差はないのかもしれない。

「おう、来たかシュトライテン！」

「ええ、来ちゃいまいたよノーウェン中尉」

連れてこられた軍用車に乗り込むと、運転席から無精ひげを生やした威ついオッサンが、私に親しげに声をかけてきた。

彼は、歴戦の古兵だ。私は彼の戦歴と人柄、そして能力に敬意を抱いているから、私が親しく出来る数少ない一人である。どうやら中尉が運転手を務めているらしい。

助手席には、なんと中隊指揮官のジークマイヤー大尉がいた。敬礼

しようとする私とヘルガローゼを片手をあげて制し、「今は軍務ではないから、堅苦しいのはなしだ」と言ってくれた。

彼もまた非常に優れた士官である。

銀髪に、青い双眸。十人並みの顔立ちだが、その佇まいだけで他を圧する何かがある。

私が素直に尊敬できる上官だ。私は彼以上に優れた上官を知らない。

そして私とヘルガローゼが乗り込んだ後部座席には、ひとりの少尉がいた。

私たちと同期の、イングヒルト・フォン・ガッセナルだ。

金髪翠眼、愛嬌のある顔立ちの、どこことなく子犬を連想させる、軍人をしているのが間違っているような印象の少女である。

彼女はジークマイヤー大尉の強烈な信者であり、彼さえいたら自分は死なないという妄想に浸っているちよつとかわいそうな子だ。他者に依存する心があるから、私とヘルガローゼに圧倒的に劣っているという事実早く自分で気づいたほうがいいだろう。

「で、これからどこ行くんですか、大尉」

「酒場だ。そこで主だった隊の連中と合流する。安心しろ、俺の奢りだ」

「ひゅー　さっすが大尉！　話がわかる！」

奢りだということを始めて知ったらしい中尉が歓声を上げる。
だが

「……私たちは未成年なんですが？」

「あ？　シュトライテン、おまえ今いくつよ？」

なぜか驚いたらしい中尉。
それに私は肩を竦めた。

「私たち3人は1918年生まれです」

「ああ？　ってえと、今は36年だから……18歳か？！　マジかよ、特にシュトライテン！　おまえ明らかに18歳って感じがしねえ！」

「私たちとアオスブルフと一緒にしないでください」

なぜか驚愕する中尉に、ヘルガローゼが冷めた声で言った。

「こいつが異常なだけですから」

「……あのな、ヘルガローゼ？　私のどこが異常なのか、詳しく教えてくれないか？」

「確かに、シュトライテンは新兵という感じがまったくしなかったな。むしろそこいらのヤツなんか、鎧袖一触に薙ぎ払いそうな能力がある」

「……大尉まで……」

まるで私が異端みたいな言い方を……

「それを言うなら大尉だって……」

「俺がここまでになるのにはそれなりに時間を掛けた。新兵だった時はお前ほどの能力はなかったよ。それとノーウェン、部下の年齢ぐらい把握している、馬鹿が」

「は、ははは……」

いい感じに話題がそれで、大尉は中尉と話し込み始めた。

それに対してホッとしていると、ヘルガローゼがガッセナルとひそひそ声で言葉を交わしていた。

「流石はユーゲント主席卒業者殿だ。大尉は随分とアオスブルフの

ヤツを高く評価している」

「いいなあ、あたしも大尉に評価されたい……」

「イングヒルトなら出来るさ。もっと自信を持て。自信のない者など魅力的には思われないぞ。大尉をお慕いしているのだろう？」

「ちよっ！？ ヘルガ？！ こんなところでそれを言わないでえ！
」

なんか、仲間外れされたみたいで居た堪れない。

なので私は窓際席なのをいいことに、過ぎ去る景色に眼をやった。

ガッセナルとヘルガローゼはいわゆる幼馴染関係にあるらしい、親友同士だ。

私と同じく二人は軍人貴族の出身で、もとは騎士階級の名門である。どういう経緯で仲がよくなったのかは知らないが、二人はとても深い絆があるらしい。

なにやら騒ぎ始める二人を尻目に、私は、気づけば再び眠りの世界へと落ちていったのだった。

第2話「異能」

第2話

「異能」

「：ヘルガローゼ：」

私、ヘルガローゼには気になる男がいる。

隠し立てしようにも出来ないだろうから、敢えて私から白状しよう。
その男とは、あのアオスブルフだ。

今、私が所属する中隊は隊長であるジークマイヤー大尉も含めて酒場で大騒ぎをしていて、みんながみんなとても楽しそうにしていた。

戦争に勝ったのだ。嬉しくないはずがない。

そして、ビール片手に大騒ぎしながら、ちゃっかり大尉の傍の席を確保しているイングヒルトを微笑ましく思いながら、私もまたはしゃいでいた。

後になってこの時ののはしゃぎようをイングヒルトにからかわれ、赤面する羽目になるが、とにかく私は嬉しかったのだ。生き残れたことが。無事にイングヒルトとアオスブルフが生き残ってくれたことが。

だから、私は苦手なはずの男連中に囲まれていても、この時ばかりは何の嫌悪感も沸かなかったし、戦友となった彼らと共に時を過ごすことに歓びを覚えることも出来た。

だが

アオスブルフは騒いでいなかった。

クールを気取って落ち着いているのではなく、どこか冷めた眼で私たちを観察しているのだ。騒ぐ中隊の主だった者たちから離れ、静かな席でひとり、酒を飲んでいる。

それに気づいた私はそつと騒がしい席を離れ、アオスブルフに声をかけようと

「あ……」

ふと、この酒場の看板娘らしい赤髪の女がアオスブルフに関心を抱いたのか、肉料理を片手にアオスブルフの席に近づいて声を掛けた。それに私は思わずといった態で声を上げてしまう。

「んあ？ どうしたんだい少尉さん」

「あ、いや……なんでもない」

私に声をかけてきた男 軍曹に無愛想に応えながら、何気ない仕草で空席に腰を下ろした。だが、何のつもりなのかは知らないが、その軍曹は私の席の前を塞いでアオスブルフの姿を見えなくした。アオスブルフと酒場の娘のやり取りが気になってしょうがない。

アオスブルフという男は、その傑出した能力に比例して女に対する手が早い。

特に自分から声をかけてきた女に対しては神業としか思えない速度でベッドインを果たすことさえある。それを知っている私は気が気でなかった。

長い青髪が隠しているが、実はアオスブルフはかなりの美男だ。すらりと伸びた187cmの長身。極限まで鍛え上げられ、まくられた袖から覗く腕は、一分の隙なく筋肉の鎧に覆われている。

鳶色の瞳は知性を感じさせて、メスであるというだけで惹かれてしまう魔性の魅力のアオスブルフは備えていた。そんな魅力に魅入られた一人であるヘルガローゼは、あの娘がアオスブルフが放つ魔性に吸い寄せられているのがすぐにわかったのだ。

「なあ、ちびちび一人で飲んでないで、おれたちと一緒に飲もうぜ、少尉さんよお」

「ああ……」

「そうだ、少尉さんあんた、今夜はおれと寝ないかい？　愉しませてや」

「っ！　悪いが、私は席を外させてもらおう」

酒場の娘が、アオスブルフに連れられて酒場を出た瞬間に、私は咄嗟に席を蹴立てるようにして駆け出していた。後ろから、「ぎゃははは！　ギョルク、残念だったな！　少尉さんはためにゃ興味がねえってさ！」「うっせえ！！」という声が響いていたが、私の耳には届かない。

酒場から勢いよく飛び出して左右を窺う。

いた！

一組の男女が路地裏の物陰に消えていくのを見咎めて、私は即座に駆け出した。

「アオスブルフ！」

「ヘルガローゼ？」

路地裏では、アオスブルフが酒場の娘に対して顔を近づけていくところ。女は頬を高潮させて目を閉じていた。

それに私が悲鳴じみた声を上げると、その女は驚いたように眼を開き、アオスブルフは怪訝そうにこちらを振り返ってきた。

「ねえ、彼女は？」

「私と同期の戦友だよ。気にする事はない」

女の間に、アオスブルフはきっぱりと言い切った。

それにヘルガローゼは言い知れぬ怒りの念を抱くが、事実であるだけに何も言い返せなかった。

「な、何をしている！？ 酒場を抜け出して何をしているかと思えば……なにをするつもりだった！！」

「何って……セックスだけど？」

あっけらかんと言い放たれ、むしろ困ったのは私のほうだった。

酒場の娘は赤かった頬をさらに赤く染め、アオスブルフは困惑したように私を見た。

「あー……なにか誤解しているようだが、別に私が彼女を口説いたわけでも、彼女が私を誘ったわけでもない。私たちは交際しているんだ。久しぶりに会ったから、ちょっと先走っただけ」

「え……」

その言葉に、私は驚愕する。
交際している？

アオスブルフと、あの娘が？

思わず声を漏らすと、女のほうは肯定するようにつなずいた。

「だから、ヘルガローゼが考えているような不純な関係ではない。
安心しろ」

「あ、ああ……」

あまりにも予想外の台詞に、私の頭は真っ白になった。

「ほら、酒場にもどれヘルガローゼ。私も久しぶりの昂ぶりを静め
たら、すぐに戻るから」

「わ、わかった、戻ってる……」

私は、驚きの抜けぬまま、呆然としてふらふらと踵を返す。

踵を返したあと、背後からアオスブルフと酒場の娘のイチヤつくよ
うな声が聞こえ始めて、私は逃げ出すように走り始めたのだった。

酒場には、戻らなかった。

【 :アオスブルフ: 】

「彼女……」

「ああ、私に好意を抱いているよ」

赤髪の女 アンナ・マリーア・シュヴェーゲリンのなにか含むような声に、私は即座に答えていた。

ヘルガローゼが駆けて行くのを見送り、深々と溜息を吐いての台詞だったからか、アンナは面白そうに笑った。

「フランメ……相変わらずモテモテねえ？」

フランメというのは、私の愛称のようなものだ。由来は、私の名がアオスブルフという【噴火】を意味する言葉で、それにちなんで、フランメは【炎】を意味する。

アンナのからかいに、しかし私は平然とうなずいた。

「当然だ、一流の男にはいい女が寄ってくるものだ」

「あら。そのいい女っていうのに、わたしはちゃんと入ってる？」

「まあな。しかし私としてはあまりお前とは関係は持ちたくないが」

「あら、どうしてえ？」

毒女のような、歪むような笑み。

それを浮かべるアンナの顔を一瞥し、私は吐き捨てた。

「お前が【魔術師】とかいうふざけた奴だからだ」

先程はヘルガローゼを『嘘』で追い払ったが、実際の私たちの関係はそんなに甘ったるいものではない。

正直、アンナを抱こうものなら性も根も尽き果てるだろうと確信しているから、抱きたいとは思わない。魔術師と性交するというのは、死んでもいいという覚悟が必要だ。

私はまだ死にたくないのだ。

私がアンナとそれらしい演技をしていたのは、もしも私がアンナと話しているのを見られた時のための予防線だ。

私とアンナが知己であるというのは、あまり知られたくない。特にヘルガローゼには。

「……そろそろその気色悪いポーズはよせ。顔を赤らめるな」

「なによ、そういう風に演技してろって言ったのあなたのほうじゃない。あ、そうか」

にやりといやらしい笑みを浮かべた魔女に、私はアンナが何を言うおとしていいのかを察して溜息をつく。

「もしかして、フランメ？ あの娘に惚れてるでしょ？」

「馬鹿な……」

失笑すらこぼしながら、私は迷いなく即答した。

「私がヘルガローゼに惚れている？ 逆はあっても、私から惚れるなんて事は有り得ないよ」

ニヤニヤと意地悪い笑みを口元に刷く魔女に私は言い切って、逸れていた話題を修正するべくアンナを糾した。

「ヘルガローゼの事はいい。それより、なんで古代遺産継承局……アーネンエルベ所属の人間であるお前が、酒場の看板娘なんて無理のある設定で潜り込んでいる。訳を言え、訳を」

「あらひどい。わたし、あなたのためにわざわざベルリンから出張ってきたのに」

私のため？ 甘ったるい声と態度で甘えてくるアンナを邪険に振り払い、私は再度失笑した。

……戯言を。モルモット程度にしか見ていないだろうに。

「で、いい加減に私の【異能】の秘密は解けたか？」

私とアンナの関係をつなぐ唯一の話に話題を転ずる。いい加減に本題に入りたかったのだ。

なにかの暗号か、それが頭がおかしくなったとしか思えない台詞に、しかしアンナはどことなく悔しそうに首を振った。

「いいえ、まだよ。仮説は立てられたけど、原理は不明。……まったく、ふざけてるわよ。なんで魔道のマの字も知らないようなあなたに、【発火念能力^{パイロキネシス}】なんてものが宿ってんの？」

「……それは私が知りたいよ」

私とアンナが出会ったのは、私が士官学校に通っている頃だ。たまさかベルリンの市街を歩いていると、この貴婦人然とした長身赤毛の美女、アンナに声をかけられたのだ。

『あなた、面白い異能を持つてるわね？』

と。

私がこれまで隠してきた秘密をあつさりと見破り、あまつさえ、

『それ、わたしに調べさせてくれないかしら。大丈夫よ安心して、危険なことなんて何もしないんだから。もしもあなたが望むなら、あなたのそれ、わたしが取り除いてあげるわよ？』

と誘惑してきたのだ。

正直、私はパイロキネシスとか言う異能の存在が、私が人間ではない別の何かであると錯覚させるようで、嫌悪感が抱いていなかった。

だから得体の知れない……しかし一目見ただけで私の異能の存在を見抜いた女に興味を抱き、知己の間柄になってしまったのだ。

正直に言うなら、後悔している。

今すぐにも縁を切りたい。

「で、その仮説だけど、聞く？」

「ああ」

「そ。あなたのそれは、おそらく精神力に直結しているの」

精神力？

いまいち理解できないが、ここは余計な横槍を入れて話を長引かせないために、私は黙って先を促した。

「精神が高揚している状態で放つと、多分平常のときのそれより威力は上がるわね。しかも異能を使つたからって精神が磨り減るとか、生命力が低下するとか、そういった代価もないみたい。ふざけてる。あくまで予測だけど、あなたの炎は魔的なモノを被い焼く効果もあって、わたしみたいな人間にとって天敵みたいなもんよ」

「……」

だからどうした、としか言いようがないのだが。

私は魔術とか、その道での戦いとかまったく興味ないから、そんなことを言われても返答に困るのだ。

「ねえ、あなたわたしに解剖されてみない？　きっと原理を見つけ出してやるんだから！」

「ふざける。そのまま標本にでもするつもりだろうが」

吐き捨てつつ、私は左手で胸ポケットから煙草を取り出しつつ、右手を持ち上げて念じた。

シュボツ！　と紅蓮の炎が右手首より先に灯って、異能が発揮される。

それを使って煙草の先に火をつけて、煙草を口にくわえた。

「そつえばさ、あなたって今まで一度でも火傷とかしたことある？」

「ない」

ちらり、と【炎】^{フランメ}に包まれた右手を一瞥し、言う。

「どういうわけだか、私には火の類が通用しない体質でね。小さい頃、試しに自分の家を燃やしたことがあるが、熱いと思った事は一度もないよ」

「なにそれ。家燃やしちゃったんだ。……それでも熱いとも思えないなんて、火の神の祝福でも受けてるのかしらね……。……ああもうおっ！　腹立つわねあなた！」

「知らんよ。なんで私がそんなのかなんて、私のほうが知りたい。知りたいから胡散臭い魔術師に頼んだのに、分らずじまいか」

そろそろ縁を切ってもいいだろう。アンナといったって事態の真相が分かるわけではないみたいだし。

その考えが表情に出ていたのか、アンナは不機嫌そうに唇を尖らせた。

「……無理矢理捕まえてやろうかしら」

「やるか？ 返り討ちにしてやる。私はお前のような奴にとっては天敵なのだろう？」

「……やんないわよ。何が悲しくてか弱い乙女のわたしが、生身で10点の怪物とやり合わなきゃならないのよ……」

10点？ それは高いのか低いのか……

「高いわよ。普通人がそこまで行くなんて、冗談にしか思えないわ。いい？ 時々いるのよ、武道も魔道も知らずに、環境だけで生まれる【人間獣】が。……言葉遊びするなら【外道】ってやつかしら。でもあなたは獣じゃない、人のまますの限界値まで行っている」「鍛え甲斐のないことを言うなよ……」

人の限界値とか……冗談きつい。

もしもそれが本当なら、これ以上私が鍛錬を積んでも成長しないということではないか。

「あつきたあ……。まさかなに？ まだ強くなるつもりなの？」「努力を諦めた人間に生きる価値はない。それともなんだ、お前はその努力をやめた人間か？ だったら心底軽蔑して嘲弄してやる。ついでに二度と私の前に現れる気がなくなるようにもしてやろう」

「お断りよ。わたしみたいな魔道に行く者はね、努力をやめた瞬間に落ちぶれる運命にあるんだから」

「それを聞いて安心した。お前は私の友たり得る者だよ」

「ありがと。あんまり嬉しくないけど。じゃあねフランメ、また会いましょ」

「縁があればな」

そう言つて、私とアンナは再会の約束をするでもなく、無造作に別れたのだった。

しかし……ヘルガローゼとの関係はもう期待できないな。下手な嘘なんか吐くんじゃなかったよ……。

第3話「ポーランド侵攻」

第3話

「ポーランド侵攻」

1939年。9月20日。

【 :????: 】

この日三度目の強襲を退けた時、ドイツ軍、第35自動車化狙撃兵連隊第2中隊第3中隊の陣地は、阿鼻叫喚の地獄と化していた。

敵戦車の侵入を防ぐため、敢えて幅を狭く取り、壁面を入念に補強した塹壕には、敵味方の兵士たちの遺体が堆く積まれている。

中隊指揮官のジェリド・メッサーラ中尉は絶望的な気分を味わっていた。

生き残っている兵士は50名で、正規人員の約4分の1。

敵との近接戦闘を連日のように繰り返しているのだから、当然の結果といえる。

（もう一度戦えば全滅する……）

昨夜から天候が急激に悪化、地表では吹雪が吹き荒んでいて視界は500メートルもない。

ジエリドは選択を迫られていた。

後方の予備陣地に引くか、全滅を覚悟して此处に留まるか。

中隊司令部との連絡は既に途絶しているため、現地指揮官の判断として撤退できないわけではない。

（だが……そんな事をすれば反革命罪で収容所送りにされる……畜生、みんな……！）

寒さと恐怖に奥歯を震わせながら学生時代の友人たちを思う。
みんな、自分と同じように徴兵され、今では行方知れずだ。

「中隊長、来ました！ 敵軍、数は5000以上っ！」
「……ッ……！」

吹雪に霞む視界の向こう、雪原を埋め尽くさんばかりに転がる無数の敵死体。

それを乗り越えるように、5000以上の歩兵と30近い戦車が迫る。

歩兵の大半はただの肉壁だ。銃を持たされず、ただ銃弾のみを渡された死兵。

銃を持たされた者は運がよく、持たされなかった者は行き先で墮ちている銃を拾わねばならない。

だが、その数は圧倒的で、いくら質で勝るドイツ軍といえど数の暴力には抗い難かった。

「射撃開始！ 戦車は後方部隊に任せておけばいい！」

号令と同時に、連続した射撃音が耳をつんざく。中隊火力の根幹をなすNSV重機関銃が

弾幕を張り、残弾僅かな迫撃砲が惜しげもなく放たれていく。

後方からも轟音が連続する。陣地に格納された戦車小隊が射撃を開始したのだった。

赤黒い体液をまき散らしながら、次々と弾けとんでいく敵歩兵。しかし敵は怯みながらも前進を続けている。逃げると、後ろから撃たれるとわかつているのだ。

NSV重機関銃の装填手と観測手だった兵士たちが、一斉に銃剣付きのカラシニコフを掴んだ。数秒と経たず、敵歩兵が塹壕に到達。

「来るなあッ！ この糞野郎どもめえ！！」

ジェリドは叫んだ。

損害が続出している事は理解しているが、現状では何の手も打てない。

彼自身の真上にも敵歩兵が押し掛かり、右腕が空を斬って迫る。だが、反射的に自分から倒れ込み、数センチの差でその一撃を躲す。

「喰らえ劣等おおッッ！！」

敵に銃弾を叩き込み敵歩兵の体を粉碎する。

だが、一瞬後、鈍い金属音と共に突如引き金が固まる。

「弾詰まりだと……！？ そんな、」

頑丈さが売りのカラシニコフが故障するとは

表情を凍らせた直後、腹部に強烈な衝撃を受け、ジェリドは地面に叩きつけられた。

「が はっ！」

意識が飛ぶほどの激痛。口から血が吐き出される。砕かれた肋骨が内臓に突き刺さったのかもしれない。

なにで殴られた？ そんな事さえも理解できなかった。

彼を助ける者は誰もいなかった。みんな敵歩兵との格闘戦に巻き込まれ、無残にも殴り殺されたり銃を奪われて蜂の巣にされたり、最期を迎えようとしている。

「そんな……そんな……」

ジェリドは死の恐怖に全身を震わせながら、迫りくる敵兵を見つめた。

どこからか、つんざくようなエンジン音が響き渡ったのは、その時だった。

（この音……オートバイ中隊……！）

絶望に染まっていた心に一筋の光がともる。

（奴らが支援してくれるなら……）

敵の血と自らの血でぬかるんだ塹壕の中を必死に這い、オートバイ中隊の機影を薄曇りの大地に探し求める。

数秒後、ジェリドは目撃した。

数百機の機動兵器　ドイツ軍のオートバイ中隊が、自分たちを気にする素振りもなく、自分たちを素通りしていくのを。

「そんなっ！　なんで！」

ジェリドは半狂乱で叫んだ。

「なんで助けてくれないんだよぉッ!? どうして、どうしてえええ!」

次の瞬間、ジェリドは背後から近づいてきた敵歩兵に、後頭部を強打され、永遠に意識を失った。

ジェリド・メツサーラ中尉は知らなかった。

あの編隊が、友軍を見捨てる事を厭わぬ部隊だった事を。

そしてそれゆえに、「選別」^{ソーテルング}中隊という忌むべき通り名を付けられている事を。

彼らは、SS師団ライヒ オートバイ兵中隊「^{トイフェル}悪魔」と呼ばれていた。

【 :ファルエル: 】

【いつものとおり】、耳には救援要請の声が次々と舞い込んできていた。

エンジンの音が鼓膜を震わせる中、SS師団ライヒ オートバイ中隊第1中隊の兵士、ファルエル・シュミット少尉は、硬い表情を変えることなくアクセルをまわし、オートバイの速度を上げた。灰色の空に白く覆われた大地。焼け爛れた森林と雪原に転がる敵の死骸。

後方を振り返れば、敵と死闘を繰り広げる友軍の陣地を見る事が出来るだろう。

『 トイフェル01より中隊各員。傾注！ 』

不意に、ヘッドフォンを通して腹の底まで響く冷徹な声が鼓膜に響いた。
中隊長を務める、アオスブルフ・フォン・シュトライテン大尉だった。

『 間もなく敵と接触する！ が、各員は陣形を維持せよ！ 』
『 16、了解 』

他の隊員たちの応答に重ね、感情を込めずに答えた。

SS師団ライヒ オートバイ中隊は20機のオートバイ兵で編成されている。

中隊の定数は40名だが、損耗の激しいオートバイ部隊が定数を満たしていることが珍しかった。

そのため中隊は前衛の8機を、指揮官を先頭に楔形の陣形に展開、残り12機を後衛に配置する陣形をとっていた。これがもっとも切り込みに適した陣形だったのだ。

（たった20人そこから敵大軍に突っ込んでいく……いつも通り無茶な任務だぜ）

ファルエルは重い息を吐いた。これから挑む戦いへの心理的重圧がかかる。

ここ数日、SS師団ライヒ オートバイ中隊は、川東岸から連日のように発起される軍団規模の敵勢の攻勢を食い止めるべく、敵軍の奥底まで突入して敵戦車を排除する任務 ファイント・ヤークト 敵軍呐喊に参加していた。

今、中隊は戦車に最短距離で肉迫するべく、西進している敵軍の左翼へと急進している。

吹雪は一段と強くなってきており、視界状況は最悪に近い。状況の厳しさに胃が締め付けられるような気分だった。

新たな救援要請の声。別方向から敵軍へ突入していたオートバイ中隊が、敵戦車の砲撃を受け、地上で身動きが取れなくなっているらしい。このままで全滅するのは確実だった。

『 馬鹿が。部隊間距離を詰め過ぎだ 』

侮蔑するようにアオスブルフの副官 ヘルガローゼ・リーゼスクレイヤー中尉が呟いた。

戦力の分散に繋がる、という理由で前衛と後衛の距離を取らない中隊も多いが、そんな事をすればオートバイの特性 機動力を損なうだけだ。それがわからない無能の下についている奴らが哀れである。

『 中隊長、救援要請が、
要請は却下する 』

ヘルガローゼの上伸にアオスブルフは感情の揺らぎを見せずに応じた。

「反転すれば任務遂行が困難になる。見捨てるしかあるまい。我々にはより多数の命を救う義務がある」

「02了解。総員、聞いてのとおりだ。中隊はこのまま前進を続ける」

ポーカーフェイスを装いながら、不愉快な気分を覚える。

中隊長の冷酷さが気に障ったわけではない。「より多数の命を救う義務」などという綺麗事を、建前のためとはいえアオスブルフが口にした事が原因だった。

「方位010に敵軍を確認。数は1500以上！」

ヘルガローゼの切迫した声に、注意を眼前へと向け直す。

全ての敵が西へと向かっている。大部分は歩兵だが、まばらに自動車やバイクの姿もあった。

戦車の姿こそ見えないが、情報が正しければ、あの敵集団の背後に群れているはずだ。

「時にヘルガローゼ、こんな小話を知っているか？」

アオスブルフは突然、天気の話をするような気軽さで尋ねた。

「どのようなものですか？」

「ベルリンのとあるラジオ放送にこんな質問が届いたそうだ。

「外国人の死骸は食べられますか？」と」

「それはまた……随分と猟奇的な……」

「今、本国では食糧の量に問題があるからな。中には「敵は食べていいんじゃないか」と考える変態が出てくるのもおかしくはない。答えはこうだ。「とてもまずくて食べられません。あ

あなたがイギリス人でもない限り」』

兵士たちの一部から失笑が漏れる。

イギリス軍のレーシヨンの不味さは、ドイツ将兵の間でも有名だった。

笑いを収めながらヘルガローゼが応える。

『これだけの数だ。あの島国に輸出したら、さぞ喜ばれるでしような』

ファルエルは表情を変えなかった。アオスブルフがの小話が、厳しい状況の中で戦闘に突入する兵士たちの緊張や恐怖をほぐすためのモノだとわかっていたからだ。

アオスブルフが口調を切り替え、号令を放つ。

『トイフェル01より中隊各員へ。まずは針路上の敵軍を引き剥がす！』

『『『了解！』』』

『今だ、行くぞっ！ 各員、射撃開始！ 目標、前方敵集団！』

』

アオスブルフの号令と同時に、前衛が射撃を開始する。

同時に彼方の敵歩兵が内臓物をまき散らしながら 自動車やバイクが粉碎されていく。

弾けとぶ肉片と金属が、純白の雪原に奇怪な色彩のオブジェを林立していった。

横からの強襲とあつて、面白いように敵を撃破していく。その様にファルエルは哄笑した。

直後、周囲の敵軍が一斉に変針、ファルエルたちに向かって突進し

てきた。雑な統率の下の雑然とした反応だった。

（来やがった……！）

『可能な限り連中を引き付ける　各員、右折しながら射撃継続！』

「喰らいやがれ、クソ野郎ども　　！！」

怒声とも、悲観とも取れる絶叫が響き、同時に中隊からは敵を侮蔑する声が上がっていた。

所詮は劣等。おれ達の敵じゃあ、ないんだよ！

しかしその高揚は長続きしなかった。

その空気を破碎するのに充分なヘルガローゼの大音声が響き渡る。

『中隊長！　後方から新たな敵影多数！　自動車化の集団が接近中！』

『　　！』

『　　数は……　2000以上！　距離は1200、1000……　60秒後に接触ッ！』

（畜生、数だけは有りやがる……！）

咄嗟に後方に振り向きながらファルエルは罵り声を上げそうになった。

『　　中隊各員、前衛は自動車に対して命令あり次第攻撃を開始！
後衛は前衛付近に後退、前衛を援護しろ！』

アオスブルフは素早く決断を下していた。

突発事態にも関わらず、全く動揺を見せていない。

だが、それに反発する声が上がった。後衛の一人からだ。

『何を考えているのですか、大尉！？ もうこの場にいる意味はないのではッ？』

『連中を潰せば、それだけ陽動の効果も上がる！ 相対的に弾薬と時間の消耗を抑えられる！』

『私たちにそんな余裕があるわけ』

『自動車を味方陣地に向かわせるわけにはいかない！ それに、我々を追ってきた場合、敵戦車掃討時に背後を襲われる可能性もあるッ！ ここで潰すぞ！』

（くそっ、やるしかないのか……！）

ファルエルは操縦桿を握り締めた。これほどの数の敵を、劣悪な視界で迎え撃つのは初めてだった。砲撃戦で食い止められるかは、やってみなければわからない。

『連中の足を止める！ 弾種18mm散弾（キャニスター）、斉射3回、撃てエッ！』

小銃から甲高い炸裂音が轟くと同時に、拡散された銃弾が間近に迫った自動車に吸い込まれていく。

散弾の弾片の嵐が、敵の先頭集団を包み込む。着弾と同時に多数の自動車が全体を切り刻まれ足を止めた。殆どの個体は行動不能となったのは明らかだった。

後続する敵軍も損傷した自動車を避けるべく、進路を強引に変更した。隊列が乱れ、集団全体の行き脚が大きく鈍る。

（これを狙っていたのか……！？）

『各員、7mmで射撃開始！ 連中が態勢を立て直す前に殲滅しろ！』

「っ！？ このおおおッッッ！！」

ファルエルは雄叫びを上げながら7mmによる射撃を開始した。炸裂音とともに無数の弾丸が砲口から吐き出されていき、自動車の破片と雪混じりの土砂が舞い上がり、待機を奇怪な色彩に染めた。

敵軍の接近は続いていた。その数は視界だけで1000を超えている。

中隊は応戦しているが、このままでは食い止められなくなるのは明らかだった。

まずい　そう、ファルエルが限界を感じ始めた時だ。

『　総員、傾注！』

断続的な砲声の中、ついにアオスブルフが声を張り上げた。

『　これにて陽動攻撃を打ち切る！　敵軍に向けて突撃開始！

遅れるなよ、私に続けえっ！』

『『『　了解！』』』

20人　いや、いつの間にか1人が減って19人になっていた隊員たちが応答する。

陽動で引き剥がしたとはいえ、目の前には未だ数万を超える敵の肉壁が残っている。

自分たちは、その隙間を潜り抜けて、戦車を潰さなくてはならない

【 …… 】

「 SS師団ライヒ オートバイ中隊、敵軍に向けて突入を開始した模様です」

オペレーターの報告と同時に小さな映画館ほどの室内に、くぐもった溜息がこぼれた。

「これで、四個中隊全てが突入した事になります」

再びの溜息の連鎖。誰もが、戦況をどう評価すればいいの迷っているかのようだ。

前線から30キロ以上後方に置かれた基地の戦闘指揮所に集う面々の視線は、壁面の巨大な戦況表示用プロジェクターに注がれている。

「突入成功率は？」

「70パーセントです」

その場の微妙な空気を代弁するかのように、ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン准尉が平坦な声で呟いた。
アップで纏めた金色の髪型の下に、凜とした顔があった。

「判っていた事だ、キルヒアイゼン」

「ちゅ、中尉？」

ベアトリスは慌てて背後を振りむいた。

エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ中尉 この基地に展開する戦車部隊、SS師団ライヒ 砲兵連隊第1大隊所属の小隊指揮官だ。

本来ならばベアトリスとエレオノーレも前線で指揮を執るはずだったが、エレオノーレは乗り込むはずのティーガー戦車の調整が遅れたため、ベアトリスはそんなエレオノーレの補佐官として、ここに残っているのだった。

そのふたりの顔には、戦いたくとも戦えないもどかしさが滲んでいる。

特に、初陣を飾るはずだったベアトリスは無念そうだった。

「我々は損害を覚悟して連中を送り出している。それに耐えるのも我々の仕事だ」

エレオノーレが傲然と言い放った。

「貴様は戦況をどう見る」

エレオノーレは周囲に聞こえる声で尋ねた。彼女はベアトリスとの会話で、戦況判断を伝えようとしているのだ。此処にいる士官のほとんどは基地要員であり、実戦に詳しいわけではない。

「敵軍呐喊の行方にかかっています」

ベアトリスは淀みなく答えた。

「現在、わたしたちの前線は危機的です。特に地上部隊の損害が深刻です」

プロジェクターには戦場である川西岸の、三つの要塞陣地の概略が表示されている。

「連日の戦闘により、三つの要塞陣地の損耗率は6割に達しています。残り4割の兵力も、最終防衛線である第二次予備陣地に転進しつつ戦いを継続している状態です。この状況を逆転するには、敵戦車を殲滅し、砲兵射撃と航空攻撃を行うしかありません」

「失敗した場合は？」

「各部隊を再編成し、再度、敵軍呐喊を行います」

実際にはそれがどれだけ無謀であるかは承知していた。

敵軍呐喊に参加したオートバイ中隊は、間違いなく戦力を消耗しており、兵士たちの疲労もピークに達しているとなれば、結果はおのずと知れる。

しかし戦車を撃滅出来なかった場合、選択肢はそれしかない。

数個の部隊の全滅で前線が死守できるなら、軍事的には十分に許容できる。

事実、そうした部隊の捨て身攻撃によって、前線の崩壊が免れたという事例は数知れないのだ。

「敵戦車に最も早く接触する中隊は？」

「SS師団ライヒ オートバイ中隊です。SS師団ライヒ オートバイ中隊は左翼の先鋒として敵軍に突入しています。おそらく、既に攻撃を開始していると思われます」

「……頼りになるな、彼らは」

「はい、伊達にSS師団最強と言われているません」

SS 師団ライヒ オートバイ中隊「悪魔」^{トイフェル}は、新鋭、アオスブルフ・フォン・シュトライテン大尉の指揮の下、実戦での精強ぶりを発揮し続けている。

その練度はSS 師団の中でも最高であり、それが最強と言われる所以となっていた。

だが、彼らを好意的に見る者は少ない。特に前線の兵士からは蛇蝎の如く嫌われている。

その理由は、当人たちでもどうしようもない原因によるものだ。

「今は、彼らの勇戦に期待するほかない、か……」

既に四個中隊は敵軍に突入している。ここで出来るのは、作戦の成功を祈る事だけだ。

ベアトリスはエレオノーレの横顔を見つめ、そしてとある予感を抱いた。

エレオノーレの視線はSS 師団ライヒ オートバイ中隊を示すアイコンに向けられたまま、外される事はなかった。

【 :ファルエル: 】

視線を全周に巡らせながら、ファルエルは大きく息を吐きだした。視界に映るのは布陣したオートバイと、それを取り囲む無数の敵群。敵歩兵が腐肉に集る蠅のように全方位から接近してくる。

まるでゾンビだ。ファルエルはそう毒づく。殺しても殺しても湧き出てくるその様は、本当にしつこくて嫌になる。これだから劣等は

（戦車は壁の向こうか……！）

ファルエルは奥歯を噛み締めた。

敵の群れに包囲されているため後退射撃は不可能　だからと言って、戦車の予想位置に突進する事も出来ない。

敵群れを盾としながら、中隊連携で一穴を穿ち、一拳に戦車の懷に侵入しなければならぬのだ。

（……こんなところで、死んでたまるか！）

避けがたい死への恐怖と湧きあがる闘争心　ファルエルは唇の端をきつく吊り上げた。

『総員、傾注！』

アオスブルフの張り上げるような声が達する。

『これより中隊は敵戦車掃討を開始する！　前衛は突撃路を開、後衛は背後を守りつつ支援砲撃、連中をぶつ殺す！　「悪魔」ども、突撃にイ、移れエエツツッ……！』

アオスブルフの号令のもと、SS師団ライヒ　オートバイ中隊第1中隊は、一気呵成に目標への突撃を開始した。

真っ先に動いたのはアオスブルフだった。
他の隊員に先駆けて雪原を突進していく。後方にはヘルガローゼが続く。

ファルエルはヘルガローゼの左後方に位置した。
視界には既に四台以上の戦車が、100人余りの歩兵を伴いながら楔状に突出しつつある。

アオスブルフは近くをすれ違った部下にパンツァーファウストを受け取った。

『 斬り込むぞ、ヘルガローゼ！ 援護しろ！ 』

アオスブルフはどのような状況であっても先陣を切る。

侮蔑家のファルエルとしても、その勇猛果敢さだけは認めざるを得なかった。

『 はああああっ！ 』

アオスブルフは戦車集団の数十メートル手前に接近、オートバイの車体を巧みに操り、銃撃を躲しながら瞬く間に戦車の真横を取った。
そして

『 私のケツを舐めてみるおおおッ！ 』

器用に片手だけでパンツァーファウストを操り、戦車のうち一台を撃破した。

一瞬、爆風に煽られて敵が怯む。その隙にアオスブルフに続かんと次々と隊員たちが戦車を撃破していく。
アオスブルフが腰の長剣を引き抜いた。

出るぞ、とファルエルは興奮に目を尖らせた。

アオスブルフとヘルガローゼは危なげなく愛車を操って、敵歩兵の陣形を斬り裂くように疾駆し、アオスブルフは長剣を左右の手に器用に持ち替えながら揮う。その度に敵歩兵の首や腕が舞い、ヘルガローゼの小銃が火を吹く度に敵兵は無様なダンスを踊った。

すれ違いざま、アオスブルフが刃を翻す。ヘルガローゼの銃撃が轟く。

敵兵の皮膚が裂け、一瞬で胴体が切断される。バイクの加速力を巧みに利用した斬撃に、一瞬遅れて張られた弾幕に踊らされる様に、ファルエルは戦慄に背筋を凍らせた。

（畜生、上手い……！）

支援砲撃を加えながら、ファルエルはふたりの機動に舌を巻いていた。

この攻撃が最も優れた能力を持つアオスブルフとヘルガローゼの2人にしかできない事を知っているのだ。

19名の連携により、敵戦車の群れは60秒も経たずに全滅した。新たに接近しようとする敵影もない。

『こちらトイフェル01！ 総員、傾注！』

アオスブルフの号令 当人はファルエルたちの背後で、ヘルガローゼたちと共に残存する敵兵への突進を開始しつつ、銃撃を叩き込んでいる。

『戦車の掃討を完了した、これで全ての戦車集団が全滅した事になる。よって、これより離脱を図る！ 続けえ！』

『『『 了解……！』』』

終わったのか　ファルエルは強烈な安堵を感じた。

（このまま無事に離脱できれば、俺は今日も生き残った事になる…！！）

戦車が全滅した以上、このまま敵軍の中を一気に突破して離脱することが最良のはずだった。そして、これが最後とばかりに周囲に群れる敵軍に注意を向けた　その時。

『　避けるおッ！』

「

ヘルガローゼの絶叫が響き渡った瞬間、ファルエルは突然自らに襲いかかった衝撃に思考を手放してしまった。

傍から見れば間抜け極まりない。

バイクのアクセルを吹かそうとしていたファルエルが、右の横合いから敵歩兵の体当たりを受け　呆気ないほど簡単に突き飛ばされたのだから。

『　ふぁ、ファルエルううツツ！？』

ヘルガローゼ　ファルエルの指導係だった女の絶叫が再び達すると、同時に宙に舞ったファルエルの体が地面に激しく叩きつけられ、意識が暗転した。

「

」

時間の感覚が消える。
やがて意識が溶け始めるのがわかった。

気がつけば、ファルエルは誰かの背中に担がれていた。
どうやら味方に助けられたらしい。

ファルエルの視界から敵が急速に遠ざかり始める。

彼方から迫る甲高い音響。それが、川西岸から放たれた多数のロケット弾の飛翔音である事に、ファルエルは着弾の瞬間まで気付かなかった。目の前の現実が思考を一時的に麻痺させていたのだ。

紅蓮の炎に包まれる地上を背にしながら、SS師団ライヒ オートバイ中隊「悪魔」は戦場を離脱した。

【 :アオスブルフ: 】

上空から見る川西岸は、地獄と見違えんばかりの光景と化していた。雪原を埋め尽くす敵味方の死骸。そこから流れ出した体液は雪原を赤黒く染めるばかりか、多数の湖に流れ込み文字通りの血の池を生み出していた。

「（随分と遅いお出ましだな……）」

私は航空戦力の雄姿を見上げながら、ささくれた気分で呟いた。

電撃作戦の要である航空戦力の投入のタイミングを、完全に逸している。どうやら本作戦のドイツ側の指揮官は阿呆らしい。無能の下に配された我が身を哀れむしかなかった。

ファルエルは変わり果てた姿となっていた。

四肢が折れ曲がり、あらぬ方向を向いている。特に悲惨なのは頭部だった。

そこにファルエルの面影は残っていない。鼻先から顔面そのモノが粉碎され、口からは血の泡を吹いている。

頭蓋が割れているらしく髪の毛まで血塗れだ。正視に耐えられるものではない。

（あんな倒れ方をすれば、こうもなるだろうさ……）

私はは冷めた思考でそう思った。凄惨な情景が目の前にあるにもかかわらず、何も感じない。感じる事が出来ない。

一瞬だけ息をのんだヘルガローゼが、意を決したように近づいてファルエルの様態を確かめる。数秒後、ゆっくりと振り返り首を横に振った。

「手の施しようがありません。もって30分、いや、20分程度……」

「……そうか。わかった」

私は頷くと、ファルエルの血塗れの耳元に顔を近づけ何かを呟いた後、ゆっくりと身を離す。

それから右手に持っていた指揮官用の拳銃、ワルサーPPKを構え銃口をファルエルの眉間に突き付ける。

「総員、傾注」

私の声に感情は籠っていないかった。

「ファルエル・シュミット少尉は重傷を負い、余命幾ばくもない。基地までは保たない。よって、ここで慈悲の一撃^{クード・グラス}を加える」

慈悲の一撃 トドメの一撃。

私はファルエルの苦しみを長引かせないために、この場で彼を射殺すると宣言しているのだった。

「ちょ、ちょっと、待ってください……」

震える声でファルエルの恋人がアオスブルフに尋ねる。

「ファルエルは生きてるんですよ?! き、基地にたどり着けば……」

「……彼を苦しませる事は、お前も望んではないだろう」

「で、でも! なんとかなるかもしれないじゃないですか!」

「……出来る事は何もない」

「しかし……!」

「安心しろ、私がやる」

「……」

「5秒やる、目をつぶれ」

5秒後、乾いた銃声と、湿った何かが飛び散る音が雪原に響き渡った。

「……ファルエル・シュミット少尉の？戦死？を確認しました。時刻は16時18分です」

「……よろしい」

そう言つて、アオスブルフはファルエルの前に膝をつき、目を瞑らせた。右手を自分の胸元に近づけ、十字を切り一瞬だけ瞑目する。

これで、私が手に掛けた部下の数は、ちょうど10人だ。

部下にも恨まれているだろうな。そんな風に思いながら、私は通夜のように暗い雰囲気の中隊を引き連れて、基地へと帰投していくのだった

時は1939年10月の6日。ポーランドはドイツに降伏した。

第二次世界大戦。その切欠とされる「ポーランド侵攻」。

髑髏の帝国は、世界を相手に戦端を開いたのだった。

閑話「白い吸血鬼と女装の殺人鬼」

閑話

「 白い吸血鬼と女装の殺人鬼 」

【 …… 】

「 ハッ、ハッ、ハッ、ハアッ……！」

ピー、ピー！

甲高い警笛の音が夜の街に響き渡る。

「 居たぞ、あそこだ！ 」

「 チイツ、こつちもか……！」

黒い制服に身を包んだ男が手にするライトが、襤褸キレのような薄汚れた服を纏う白髪の青年の姿を照らし出し、青年 ヴィルヘルム・エーレンブルグは忌々しそくに舌を鳴らす。

ヴィルヘルムは追われていた。 国家の暗部を司る、恐るべき国家の異端審問官 ゲシュタポ 秘密警察の実行部隊に。

その追跡は執拗であり周到。 ヴィルヘルムの巢とも言える路地裏、その複雑な迷路を正確に把握し、振り切ったと思えばすぐに次が現れる。

「クソがあ！」

自然、ヴィルヘルムの苛立ちは臨界を振り切っていた。

此処は俺の巢だ。夜の王である己が、なぜ公僕ごときにこうも追い立てられる？

なぜ、俺は逃げてばかりでいる？

「逃がすな、追え！ 国家反逆の危険分子だ、殺してかまわん！」

殺す。

この身に追いすぎる公僕どもがこちらを殺すつもりなら、こちらだつて殺し返してやろうではないか。

まるで犬畜生か何かのように追い立てられる屈辱が、ヴィルヘルムに決断させた。

これ以上は我慢がならない。そも、我慢する必要はない。

ヴィルヘルムは曲がりくねる路地裏を右折し、自身の姿を3人の追っ手の視界から一瞬だけ隠して、次の瞬間には高々と跳躍していた。バレエダンサーとしても通用しそうなしなやかな長身が、夜の空を舞う。

「しつけえっ！」

ヴィルヘルムを追って右折してきた公僕どもの頭上から、白い吸血鬼は罵声と共に襲い掛かる。

一瞬、ヴィルヘルムの姿を見失って啞然とした公僕たちは、頭上より降りかかってきた白い暴力に対処する時間を、ただ驚愕を露わにするだけで浪費してしまふ。

その愚鈍さ。ヴィルヘルムはむしろ憐れにすら思った。

このような荒事のために己を鍛え上げてきただろう軍人たちは、ヴィルヘルムという脅威に晒された時、その実力を発揮する前に命運を決してしまったのだから。

「　　っ！？」

「があっ？！」

「あぎやっ！！！」

頭上より振り落とす踵の一撃が1人の後頭部を激しく打撃し脳震盪させ、優雅に着地した後に背後より1人の首を薙ぎ払う拳の一撃で押し折り、慌てて背後を振り返った最後の1人の顔面に無造作に拳を叩き付けた。

みつともない悲鳴をあげ、転倒する男たち。

倒れ伏すそれらを見下ろして、ヴィルヘルムは嘲笑した。

「ハッ、国家反逆だあ？　なあに吹いてやがる、ナチ野郎がよおっ！！！」

すでに死んでしまった1人を除いて、ヴィルヘルムは蹴りを連続して2人の軍人にトドメを刺した。

いざ殺すつもりでやればこんなものだ。こんな連中では我が身を脅かす資格はない。

つまらなそうに鼻を鳴らし、ヴィルヘルムは独語した。

「はんっ、……　　たくわけわかんねえな。そりゃ俺も色々やったがよ。てめえらゲシュタポにしょっ引かれる覚えはねえぞ。国家反逆

つてなもしかしてあれかあ？ 近頃どこぞの高官様が、売春窟で殺されかけたあのなんだの。……名前はたしか、デイルレワンガーとか言ってたっけか？」

ゲシユタポの軍人が己を追い回していた理由を思い出し、ヴィルヘルムは侮蔑の意を込めて、眼下にうずくまる1人の男 2人を率いていたリーダー格の男を睨みつけた。

「ボケが。そりゃ俺じゃねエよ。掘ったり掘られたりが趣味の変態ジジイなんざお呼びじゃねえ。つまり人違いで随分追い掛け回してくれやがったじゃねえか。なあっ！」

「ぐあっ?!」

懷から密かに拳銃を抜き放っていた男の手を思い切り踏みにじって、悲鳴を上げる男にヴィルヘルムは失笑した。

「おお、なんだてめえ。まだ生きてんのか。すげえすげえ。さすが軍人さんは丈夫だねえ。んじゃこれはご褒美だ」

「ヒツ?!」

男が取り落とした拳銃を拾い上げ、それを男の額に突きつけてヴィルヘルムは邪悪に笑った。

怯える男の姿があまりに滑稽で仕方がない。殺し殺され合う場に身を置いているはずなのに、殺される覚悟がなかったのだろうか、この男は？

「噂じゃあ、てめえらの頭は血も涙もねえって言うじゃねえか。ならどうせ戻ったところでよお、結果的には同じだわなあ？ あばよ。えーと……大尉殿？」

「ひ、ひ……や、やめっ、殺さないで……!？」

男の階級章を見て、ヴィルヘルムは嘲笑うように語り掛けた。
男が無様に命乞いしているがまったく耳に入らないし意に介さない。
ひたすらに憐れで惨めで　そしてそれゆえに腸が捩れるような心地だった。

「こんな、こんな低能に、俺は一時とはいえ追い掛け回されていたのか？」

押さえきれぬ怒気を総身より放出しながら、しかしヴィルヘルムは優しげに語りかけた。

「仕事で下手打って首切られるより、殉死なら特進もあるんだろ？
それならガキと女房の今後は安泰だ」

残酷な宣告。男は変わらず、鼻血と涙と涎で顔を塗れさせ、必死になって命乞いをしていた。そのざまを見飽きていたヴィルヘルムは、もはやこの男に時間を費やす無駄を悟り、さつさと終わらせるべく早口に別れを告げて引き金を引いた。

「バイバイさよならお休みとつつあん」
「ぐはあっ?!」

乾いた銃声が薄汚い路地裏に響き渡る。

額を撃ち抜かれた男の脳漿がヴィルヘルムの頬に付着し、それを拭うこともせずにヴィルヘルムは気だるそうに呟いた。

「ふん……しつかしまあい迷惑だぜ。どこの阿呆がやりやがったのかは知らねえが、この先また間違われてもかなわねえ。こりゃい

度を超した恐怖に屈した叫び。

知らず、ヴィルヘルムは口端を歪に歪め、心底愉快そうに口を開いた。

「おいおい、噂をすれば、ってやつなのか？　こりや随分とまた、ご機嫌な馬鹿が近くにいますみてえだが。……………面白れえ、この俺につまらん火粉飛ばしやがったツケ、今すぐ払ってもらおうじゃねえか」

獲物を見つけた白い吸血鬼は、ペロリと唇の端を舐めた。

歌。

唄。

唱。

元は白かったただろう優美なドレスを赤く染め、華奢な体躯の殺人鬼

は、さながら天上の天使がごとき美声で歌を唄う。

転がる無数の死体を弄繰り回し、轍となったゴミ屑にナイフを振り下ろす。

何度も何度も振り下ろす。原形を留めなくなつて来た男の死体を、辱め蹂躪しそれでもなお飽きることなく振り下ろす。

白いドレスを染める赤は、轍が噴き出す液体だ。

楽しくて楽しくて仕方がない。

熱心に粘土を捏ね繰り回す無邪気な子供のように、小柄な殺人鬼は嗤いながら唄っていた。

「　　よお」

不意に、殺人鬼の横合いから無愛想な声が掛けられた。

「あー、その、なんだ。お楽しみのところ悪いんだけどよ。ちつとばかりてめえに聞きたいことがあんだが。　　つーわけで、とりあえずこつち向きな。てめえの親父は礼儀云々を教えてくれなかったのかい？」

「……親父？」

白い吸血鬼　　ヴィルヘルム・エーレンブルグだ。

立ち込める血臭の中を平然と歩き、ヴィルヘルムは軽い口調で問いを投げた。

それに、小柄なドレス姿の殺人鬼は、吸血鬼の1部の台詞に反応し小さく反駁した。

ニヤリと邪笑し、ヴィルヘルムは肯定した。

「おうよ。糞外道のイカレ淫売小娘でも、木の股から生まれたわけじゃあるめえが。ま、犬ところから生まれた可能性ならありそうだけだよ」

「あはは、ああ、犬ね。そういえば、山羊とか驢馬とかとやるのが好きな親父だったね」
「へえ、そりゃいい趣味で」

無邪気な告白に、ヴィルヘルムは聞き流すように相槌を打つ。

山羊に驢馬ねえ。ケダモノとヤツてなにが楽しいんだか。

「うん、だから多分、僕も人間じゃないんだよ。それから小娘でもないんだなお兄さん。僕は人間じゃなくて、オスでもメスでもないのさ。ほら！」

「ひゅ」

ばさつ、と殺人鬼はドレスの裾をたくし上げ、股間部をヴィルヘルムに向けて露出した。

そこには何もなかった。

男性を象徴する男性器が。女しか持ちえぬ性器がどこにもなく、ただ小さな穴が1つ開いているだけだった。

常人ならば目を逸らして嘔吐するだろう有様を、しかしヴィルヘルムは口笛を鳴らすだけであっさりと受け流した。

「ふん、なんだおまえ？ 面白れえ体してんな。挟られちまったのか？ その穴つぽこはよお」

「そつみたいだねえ。もう覚えてないけど。気に入ったのなら抱いてみるかい？ 安くしとくよ、お兄さんなら」

にこりと嗤い掛けてくる女装の殺人鬼。

女性のように艶のある長い銀髪と、深く濁りきった1つしかない碧眼。華奢な体躯とも相俟って、そこいらの少女よりも少女らしい殺人鬼の誘いに、

「ハッ！ そうだな、たまにはゲテモノ食うのも面白そうだが」

失笑するようにヴィルヘルムは顔をうつむけ。

次いで、無造作に手にしていた拳銃の銃口を、女装の殺人鬼に向けて吐き捨てた。

「目障りなんだよてめえ。俺と似たような髪の色しやがってパチモン野郎。おかげでいい迷惑だ。邪魔臭えから逝つとけガキ」

「うあつ!？」

バンッ！

躊躇なく、容赦なく発砲した。

短い悲鳴と共によろめいて倒れた殺人鬼。それを見届けて、ヴィルヘルムはつまらなさそうに踵を返しかけ

「……つたく、しょうもねえ。近頃アホばかり増えやがるぜ。こんな日はさっさと帰って　ぬあつ!？」

突如として飛来した銀閃が視界の隅をかすめ、獣の如き直感でそれを回避した。

身をねじったヴィルヘルムの腕を掠めたそれ　投げナイフはコンクリートの壁に突き刺さった。

なんという怪力。

素手で投擲したに過ぎない刃物が、コンクリートの壁を穿ったのである。直撃を食らえばタダではすまない。

戦慄するヴィルヘルムは、驚愕に目を見開いて立ち上がる女装の白い殺人鬼を見ていた。

「なあにするんだよ、いきなり」
「……ッ？」

ポツリとこぼれたソレは怨嗟の声。

「撃ったね？ 僕を撃ったね？ 殺そうとしたね？ つまり、殺されてもいいんだね……？」

呪うように。祟るように。嘲笑う白い殺人鬼は、独眼に赫怒の念を滾らせて、立ち竦む吸血鬼に向かって唾を飛ばす勢いで謳い上げた。

「僕は死なないし殺されない。男でも女でもないんだから子供も生まないし孕ませないし一代で終わるって事は、つまり完成してるってことなんだよ！！ だって、下等な生き物ほどウジャウジャとガキを生むじゃないか。それをしないってことはねえ！」

ブンッ！

一閃した腕にさらにもう一本、大型のナイフが現れた。

咄嗟に身構えるヴィルヘルムに、女装の殺人鬼はニタリと嗤いかけた。

「ねえ、わかるでしょ？ 僕は死なない。不死身なんだ！ 殺され

てたまるかあっ！！　　「イイイヤツハアアア！！」

「なっ、て、てめえは……！！？」

踊りかかる殺人鬼。吸血鬼は咄嗟に銃を揮って大型ナイフを受け止めたが、背丈で勝るヴィルヘルムを殺人鬼はパワーで圧倒した。

小さな体を利し、ヴィルヘルムの懷に飛び込んだのだ。そしてそのままヴィルヘルムの体を持ち上げて、怒声を上げながらヴィルヘルムを投げ放つ。

「だあぁっ！！」

「うおおおおお！！??」

ゴミ屑を巻き込みながら吹っ飛ぶヴィルヘルム。

そのざまを殺人鬼は迸る哄笑と共に見送った。

「アハハツハハハハハハハハハハ　　ツツツ！！」

「クソツタレがあ、なんだこのガキ、イカれてんにもほどがあるだろ！　撃ったんだぞ、当たったんぞ！！　なんで倒れねえんだよ、ありえねえだろ……！」

「アハハハ　　痛い、痛いよ血が出る！　銃で撃たれたのなんかに久しぶりだぁ！」

ぞぶり、と殺人鬼は左腕に着弾した弾丸を、右手で抉り取って投げ捨てた。

そして　数多の殺人経験を持つ畜生、ヴィルヘルムでさえ圧倒される狂気をあらわにし、殺人鬼は嗤いながら宣言した。

「ねえお兄さん。でも君は下手糞だねえ。度胸があるだけで射撃の腕はド素人だ。……これ以上そんなものに頼つてると、次でその首、捻じ切っちゃうよ？」

「ふっ、ふふふ…… 上等……！」

背筋が震え上がる。
恐怖に、ではない。

歓喜だ。

アツという間に臨界を振り切った怒りと屈辱に、ヴィルヘルムの赤い瞳は燃え上がり。
手にした銃に銃弾を装填する。

「いい脚持ってンじゃねえかバケモンが。撃ち殺してやるから掛かって来やがれ」

銃口を据え、ヴィルヘルムは宣言する。

ああ、タダでは殺さない。この屈辱はヤツを心臓をくり貫いてその頭を串刺してやらねば収まらない。

本気になったヴィルヘルムの鬼気が殺人鬼を照準し、その感覚に女装の少年は肩を震わせた。

「うふふ いいなあ、いいよお兄さん。ノれる感じた、名前が知りたい。これから先も、今夜の興奮をたまに思い出して浸りたいよ。……だからあ、ねえねえ！ いいでしょ、名前！ 教えて？ 教えて知りたいんだっ……！」

「……1人でトびやがってこの糞が。……ヴィルヘルム・エーレンブルグ。てめえは？」

「ウォルフガング・シュライバー。ふふっ、名づけの親なんかもう居ないけど。……ねえ！ それは多分お兄さんもさ」

「ああとつくに犯して殺して燃やしちまったよ」

「アハハハハ！　いいねえ！　それはサイッコオだあ！」

「おう、気が合ったみてえで反吐が出るぜ」

ペツと血の混じった唾を吐き捨てて、滲む笑気を2人の鬼は漏らし始めた。

「クスッ、ふふふ」

「ふは、アハハハハ」

「アハハハッハハハハハハハ」

ひとしきり嗤いあう。嗤いながら、相まみえた宿敵との邂逅を祝福した。

そして　その嗤いが収まった時、鬼たちは同時に、全身から鬼気と狂気と殺気を迸らせ、誇りと矜持にかけて断言した。

「　　引き裂いてやる！！」

時は1939年、ドイツ、ベルリン。

「生皮剥いで、僕のベッドに敷いてやるよお!!」

「てめえっ！ 教会の十字架にでも串刺してやらあっ!!」

「いくぞおおおオオ」

ツツツツ!!!!」

運命の大戦に雪崩れ込んでいく髑髏の帝国は、恐怖と狂気と狂騒と、そして混沌という名の炎に彩られた、修羅の巷と化していた。

閑話「水星からの招待状」

閑話

「水星からの招待状」

いわく、髑髏の貴公子。

いわく、金髪の野獣。

いわく、二十代で秘密警察の長官の座にまで昇りつめた、エリートの中のエリート。

『人体の黄金律』とまで讃えられる絶世の美貌を持つ男　ラインハルト・ハイドリヒ中将は、その辣腕ぶりと冷酷さから部下はおろか上官たちにすら恐れられる実力者であった。

国に忠誠を。

軍人として、帝国人として？当然？の枷を己に課し、今日という日まで生きてきた。
そこに迷いはなく、ゆえに己の責務を果たす過程でどれほどの血を

浴びることになるうとも構わない。そう思い、そう信じ、そう在ること己を守ってきたラインハルトは。しかし、ある出会いを経て以来、言いようのない煩悶を胸の内に抱いていた。

1939年、11月8日。

総統兼首相、アドルフ・ヒトラーの演説中に起こった謎の爆破テロ事件。

その事件を契機に、ラインハルトは？あの男？と出会ってしまったのだ。

髑髏を背負った貴公子殿は、つまらぬ遊びに退屈している子供のような。

「……………」

なにをつまらぬこと思っている、ラインハルト・ハイドリヒ。

ラインハルトは詐欺師の妄言を忘れ去ろうとかぶりを振った。食事を済ませ、残った仕事を片付けるべく己の執務室に戻ってきたラインハルトだったが、執務机に見慣れぬ封筒を見咎める。

（誰がこのようなものを……）

封筒の中にあつた手紙を取り出し、それに目を走らせた。

そこにあつたのは　どこか見覚えのある字と、聞き覚えのある取
つて回した台詞回しの羅列。思い出すのも不愉快な？あの男？から
の意思表示だった。

『　つまり、先のデイルレワンガー將軍に関する醜聞を揉み消そ
うという貴方の意図、及び立場は重々承知しておりますが、その上
でひとこと言わせていただきたい。あたら部下を死地に追いやるの
はいかななものか、と。貴方が私の予言、占いを信じておらぬは百
も承知のことなれど、親愛なる中将閣下が、このような些事にかか
ずらうのは見ておれぬと思つたゆえ、勝手ながらご忠言したく、こ
うして手紙などをしたためたしだい。』

大恩あるラインハルト・ハイドリヒ殿。私は貴方の栄光と未来
を信じております。よつて、そのご威光とお名前に万が一にも傷が
つかぬよう、くだんの殺人鬼とやら、なんとなればこの身を以つて
捕らえることも辞さぬ覚悟。どうかその旨、ひらにご容赦ください
ますようお願いしたく　』

「　愚か者が」

最後まで読む事もせずにラインハルトは踵を返し、執務室を後にし
た。

殺人鬼を捕らえるだと？　あの、吹けば飛びそうな軟弱な男が
か？

面白い。だが面白過ぎるせいか逆に笑えない。かつて感じたことの
ない苛立ちに突き動かされ、ラインハルトは足音高く外を指指した。
執務室のすぐ傍に直立していた衛兵がラインハルトに気づき、声を
かけて来た。

「あ　これは閣下。いかがなさいました、このような時刻に　」
「出る。車を用意しろ」

「は。ですがどちらへ？」

「ゲッペルス宰相に会う。……部下の手綱も握れんのか、あの男は……」

輕蔑の意を滲ませ吐き捨てるラインハルトに、衛兵は泡を食ったように慌ててラインハルトを引きとめた。

「お、お待ちください。宰相殿は今夜、總統閣下の共としてオペラ座へ」

「またぞろいつものニールングか。くだらん。いい加減に飽きるということを知らんらしいな。度し難い」

「閣下お待ちください、閣下」

制止の声を無視するラインハルトに、衛兵は諦めたように、素早くラインハルトの命令通り車を手配するよう無線機で待機中の運転手に命じた。

共もなく兵舎を後にし、ラインハルトは駆けつけてきたリムジンの後部座席に乗り込み、運転手に端的に命じた。

「出せ」

「は、どちらへ？」

「国立歌劇場……いや、くだんの反逆者を捕らえようと出た者らはどこだ？」

「それでありましたら、ベルリン大聖堂の近辺かと」

「ではそこへ行け」

「し、しかし閣下、それは」

「なんだ？」

「い、いえ、了解であります」

くだらない諫言を一瞥のみで封殺し、ラインハルトは急かすように命令を付け足す。

「急げよ」

「は」

走りだすリムジン。

「……………」

（馬鹿め。あの男、いったい何を考えている？）

懐から呼んでいる最中だった手紙を取り出して、ラインハルトは改めてそれに目を通し始めた。

『そも、先のポーランド侵攻により戦端が開かれて以来、帝都には複数の凶星が集いつつあります。これは東洋においてラゴ、ケイトと呼ばれ、蝕を起こし、日と月を飲み込む災厄の星。此度の件中でも強力な一星が深く関わっておりますれば、並みの者では歯が立ちますまい。』

閣下の星は王者のそれゆえ、下の者を使うことこそ本分でありましょう。ですが、人材を間違えてはいけません。

凶なる相手には然るべき部下を。覇軍の星を有する者らがこの件に関わらんとしておりますので、彼女らを使ってみるのがよろしいかと思えまする。』

（…………『彼女』？ 私の部下に女はおらぬ）

らしくもない。よもや書き間違えか？

常に薄ら笑いを口元に刷いている男の顔を思い出しながら、怪訝そうに眉を顰める。

果たして、あの男がこんな書き間違えをするだろうか？

『加えて蠍の大火星、及び孝道の第四星。これらとの縁もある模様。特に後者はこの先、貴方にとってなくてはならぬ影の星ゆえ、ゆめお見逃しなきように。』

親愛なる中将閣下。御身を苛む飢えと渴き。一刻も早くその正体に、貴方自身がお気づきになりますよう、お祈り申し上げておきます。そして願わくば、その目覚めが私にとっても福音となるように。

恐々謹言。カール・エルンスト・クラフト。

追伸、今貴方はこの手紙の冒頭のみを読んで、憤慨しつつ車中にあるのではないですか？ ご心配なく。貴方が此処にこられるまで、私は陰に隠れております。凶星との対峙など、恐ろしくてとてもとても』

「ッ、惚けた男だ。どこまでも私を黽つてくれる」

「な、なにかおっしゃいましたか、閣下？」

「いいや、なんでもない。不遜な詐欺師がなかなか笑わせてくれると思っただけだ。あの男、いつそ道化師にでもなればいいものを」

「はあ……」

「余所見をするな。早く目的の場所へ連れて行け」

「も、申し訳ありません！」

「ふん……」

不愉快そうに鼻を鳴らす。それだけで委縮する運転手の男に、ラインハルトはより一層不快な思いを抱いた。

（凶星に覇軍、大火に孝道の双子星だと？ いったい、私に何を見せようというのだ？ そんな者たちが本当にいるとでも？

……まあいい。道化の出し物が何であれ、無聊の慰めにはなるだろ

う。
私の飢えとやらが、もし仮に、あるのならな（

第4話「黎明（前）」

第4話

「黎明（前）」

【 :????: 】

「しかし中尉、本当にこんな勝手なこととしていいんですか？　そもそもこの件は秘密警察^{ゲシュタポ}の仕事なんだし、わたしたちにはなんの関係もないじゃないですか」

市街を練り歩きながらベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン准尉は、不満そうに唇を尖らせた。

それに、ベアトリスの傍らをツカツカと軍靴を威圧的に鳴らしながら歩く上官、エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ中尉は、その厳格そうな容貌に相応しいキツイ語調で、ベアトリスを叱責した。

「下らんことを言うなキルヒアイゼン。貴様の言い分は怠慢の正当化である上に的外れだ」

「はあ……それは確かに怠け癖があるのは認めますが、的外れというのはいい……」

はてな、と首をかしげるベアトリス。

「国防を司る軍の要職にある者が、こともあろうに穢れた売春窟で死に掛けるなど銃殺ものの無様だぞ。貴様もユーゲントで軍の何たるかを叩き込まれたはずだ。…同胞の不始末は？」

「……連帯責任です」

「であるなら、私たちには関係ない、などというのは寢言であり戯言だ。軍の末席を汚す者として対岸の火事にはできんだろう。我々が至らぬから、將軍殿の馬鹿を事前に諫められなかった、とも言える」

現在のベルリンは魔都である。

貧しい者は極限にまで餓え、平然と殺人鬼が蔓延っている。

そしてその最たるものが、デイルレワンガー將軍の醜聞である。エレオノーレの言ったとおり、その將軍が売春窟で女装の殺人鬼に殺されたかけたというのだ。

確かに、軍の要職を司る人間が起こしていい不祥事ではない。

まあ、それを言うなら起こしていい不祥事などないのだが。

そして、嘆かわしいことに軍の要職に就く者の大半が、デイルレワンガーと大差ない人間だ。

だからこそエレオノーレはそのような者が蔓延っているこの国の現状に義憤を抱き、自らその殺人鬼を捕らえるべく、クリスマスだというのに部下のベアトリスを伴い行動しているのだ。

「（でも、將軍とは部署が違いますし、お会いしたこともないのに諫めるも何も……）」

ぶつぶつと小声で不満を垂れるベアトリス。それを敏感に聞き拾ったエレオノーレが、

「なんだ。大きい声で言ってみろ」

恫喝するようなコワイ声でぎょろりと部下を睨みつけた。縮み上がるベアトリス。

「ああいいえなんでもないです今日も中尉ったらお綺麗で！このまま社交界に出れば殿方の熱い視線を一身に浴びること間違いないですよはい！」

「フン」

慌てふためくベアトリスの妄言に、エレオノーレはさも下らなそうに鼻を鳴らした。

不意にベアトリスが真顔になって言う。

「で、それはさておき、今回の事はおっしゃるように軍の恥部ですから、上は揉み消す方向で動いていると思うんですよ。なので、下手につつくのは危ないんじゃないんですかね。ゲシュタポ長官閣下殿は、噂じゃ鉄と氷で出来ているお方だって、わたし常々聞いてますし」

「私もそう聞いている」

「だったら」

「付け加えて、非常に聡明かつ実的なお方だともな。それならば問題あるまい。きっと我々の意を汲んでくださる」

「はあ」

やめましようよ、と言いかける部下に、しかしエレオノーレは聞く耳持たない。

それにベアトリスは呆れたようにカラ返事をした。

「……中尉のその漲る自信はホントにどこから来るんですかね。：

…ともかく、そこまでおっしゃるなら逃げずにお供しますけど、そろそろ教えてくれませんか？　いったいどこに行く気なんです？」

ベアトリスの素朴な疑問。

それに、エレオノーレはまるで思い出すのも嫌気がさすとも言いたげに、さも忌々しげに吐き捨てた。

「　　レーヴェンスボルンだ」

「うーん、レーヴェンスボルン、っていうと、あれですね、3年前のオリンピックのときに出来たって言う　　」

記憶の中の知識を引っ張り出しながら言うベアトリスに、エレオノーレはあからさまに侮蔑の言葉を吐き出した。

「　　早い話、牧場だな。優秀な男の子種を欲して、恥を知らぬ雌犬どもが群がるバビロン。言ってしまうえば立場の逆転した娼館に過ぎん」

呆れを通り越して感心してしまいたくなるような毒舌だ。

その辛辣な評価は、端的に事実を捕らえているため否定しづらいものなため、いつそ清々しくさえある。

「……あの、なんか凄い毒吐いてますけど、あれはあれでちゃんとした意味があると思いますよ？　戦争の弊害として、異民族の血が

混じりやすいっていうのがありますからね。わたしはあまり気にしませんけど、血統を重んじる思想は慣れ親しんだものじゃないですか。中尉の家も、わたしの家も『そういうもの』だし、子供の頃からさんざんばら言われてきたことでしょ？ 誇りある血と家名を汚すな、とかなんとかって」

日頃からその毒舌に晒されてきたベアトリスは、なんとなくレーヴ・エンズボルンの人たちを弁護してあげたくなり、らしくもないことを言ってしまうていた。

しかしその『らしくない』ベアトリスの言をエレオノーレは鼻で笑うことはせず、肯定的にうなずいて見せた。

「無論、貴種の血統を守り、維持することに否はない。私が気に入らんのはそれを買おうとする浅ましさだ。『誇り』とはなキルヒアイゼン。受け継ぎ育み伝えるもので、他所から貰ったり、まして売り買いするものでは断じてない。許せんのだよ、そういった厚顔無恥。国家を腐らすヤツバラがな」

辛辣に過ぎるエレオノーレの思想と哲学に、しかしベアトリスは共感できる場所があったのか、したり顔でうんうんとうなずいた。

「へえ。なるほど。確かに一理あります。大概の女性が政略結婚なんか御免蒙りたいと思っているのに、自分で玉の輿を選べるとなれば、涎を垂らして尻尾を振ると。確かに浅ましいですね。ダブルスタンダードです」

「わけの分からんエゴまがいの言葉を使うな」

「……失礼。でもまあ、そういうのを可愛いと思うのが殿方というものですから、結局うまいこと世は回るんですよ。……いやー、わたしと中尉は、これじゃあ結婚できませんねー」

「……フン」

出来ずともよいよ。

エレオノーレの心中がありありと伝わってくるのに、ベアトリスは悟られないように小さく苦笑した。

そう言えば、なぜエレオノーレは目的地をはっきりと出来るのだろう。

件の殺人鬼を探すのなら、もっと相応しい場所があるだろうに。

そのことが気になって、ベアトリスは率直に理由を尋ねることにした。

「で、なんでレーヴェンスボルンに行くんです？」

「ひとり、知り合いが居てな。蛇の道は蛇だ。淫売のことは淫売に聞くのがいい」

「へえ……」

知り合い、という部分で、エレオノーレが何とも言えぬ面持ちをしたのを目敏く発見し、ベアトリスは思わず意味深な声を上げた。当然、それを聞き逃すエレオノーレではない。

「なんだ？」

「あ、いえ、つまり中尉は、お友達が先に結婚するので悔し　ぎやふ、あ、くう……っ！」

ガチン！　見ているだけで痛くなりそうな拳骨が、瞬間的にベアトリスの台詞を叩き潰した。

下らないとも言いたげにエレオノーレは吐き捨てた。

「下種のかんぐりだ。友人などではない」

「そ、そうですね、中尉と友達になれる人なんてわたしぐらいし

か……」

「抜かせ馬鹿者。貴様など庭で放し飼いにしている犬に過ぎん。図に乗るな」

「わん！」

「……………はあ」

ベアトリスの能天気な笑みに、エレオノーレはなんとなく疲れた気分になって溜息を吐いた。

エレオノーレをこんな気分に来るのは、後にも先にもベアトリスただ1人だけである。

「さあ、ほら早く行きましょー！」

【 ……? ? ? ? …… 】

ドンドン、と乱暴なノックがされた直後に、

『 入るぞ 』

という簡潔にして明瞭な意思を示す声が聞こえてきて、青髪の女
リザ・ブレンナーは安楽椅子に座って編み物をしていた手を止めた。

そして、リザが「どうぞ」と言う前にドアががちゃりと開かれて、
そこからリザの古い友人が姿を現した。

もつとも、友人だと認識しているのはこちらだけで、真紅の長
髪と伶俐な美貌の彼女は、リザとの関係を『ただの腐れ縁だ』と切り
捨てるだろうが。

「久しぶりだなブレンナー。……少しやせたか」

「貴女こそ、一段と陰のある顔つきになったわね、エレオノーレ。
相変わらず疲れる生き方をしているみたいだけど。」

安楽椅子に座ったまま、リザは編み物を脇のテーブルに置いた。

「ドイツ女子青年同盟、創立時からの幹部候補生様が今更私に何の
用？ まさか同期のよしみで、婚約のお祝いに駆けつけてくれたわ
けでもないでしょう？」

「当然だ」

ばさり、と資料をリザの前に放るように投げ、エレオノーレは端的
に述べた。

「貴様に聞きたいことがある。この売春窟、正確な場所は分かるか」
「なぜ私に？」

その資料を横目に眇め見たリザは、この厳格な友人が何を求めてや
つて来たのかを瞬間的に悟りながらも、敢えて真意を隠した問を發

する。

エレオノーレはそんなリザの腹の中を見透かしたように目を細め、馬鹿にするように声量を高めた。

「貴様らには横の繋がりがあるだろう。未来の夫の行状を調べ上げ、共有し、捨てられぬように予防線を張り巡らせる。女というのはそういう狡からい計算の生き物だ」

「貴女だって女でしょうに」

言っても無駄と知りつつも、リザは含み笑うように指摘したが、エレオノーレは不愉快そうにするだけだった。

「それについて議論するつもりはない。知っているのか知らないのか、協力するのかもしれないのか」

「あの中尉？ いきなりそんな喧嘩腰じゃあ通る話も通らないっていうか……」

そんなエレオノーレの背後から、ひょっこりと小柄な少女が現れた。その、愛らしい少女を見てリザは微笑んだ。

「あら、かわいらしいお嬢さんね。貴女の部下なの？」
「いや、こいつは」

庭で放し飼いにしている犬に過ぎん。

そう言おうとしているのを敏感に察知したベアトリスが、慌てて遮るように応答した。

「はいっ！ わたしはベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン准尉であります！ このたびユーゲントを卒業し、ヴィッテンブルグ中尉のもとに配属されました！ 青春ど真ん中の、1

6歳です」

「とりあえず、コレの事は気にするな。ユーゲントの主席卒業者は少尉に任官するのが通例だが、この体たらくだからな。程度も知れよう」

「主席？　そう、優秀なのね、お嬢さん」

「はい！　父上と母上も喜んでくれてるんですよ！」

ニコニコと惜しみなく愛嬌を振りまく少女に、リザもまた柔らかく笑い返した。

が、エレオノーレはいい加減に本題を進めたいのか、ベアトリスをぎろりと睨みつけた。

「キルヒアイゼン」

「なんです？」

「黙れ」

「……了解（ヤヴォール）」

しゅん、と途端に萎む少女の明るさ。

そしてリザの対席にエレオノーレが腰を下ろし、話を進めようとする

「それでブレンナー、」

「クス」

「おい貴様、何を笑っている！」

笑みをこぼしたリザを、エレオノーレが目を剥いて怒鳴りつけた。並みの者なら萎縮してしまうだろう大喝に、しかし図太い神経を持っているのか、リザはびくともせずになお微笑みを口元に刷いていた。

それに、ベアトリスがほんの少し尊敬の色を顔に浮かべた。

「ふふ、いえ、ごめんなさい？ 貴女も何かと大変なようで、羨ましいわ。で、さっきの話だけど、確かに知っているとえば知ってるわね。なぜならここ、どちらかというとお客は女性のほうだから」

「ん？」

「わからないかしら。つまり」

「え？ えっ！？ じゃあこれって、要するに」

「ああ、なるほど、合点がいった。ますます以ってここは墮落婦女子の巢窟だな。まさかとは思うが貴様……」

「誤解しないで？ ここには過去の過ちを悔いている娘も多いのよ。わたしはただ、彼女たちの悩みを聞いてあげているだけ」

「懺悔すれば赦された気になる。屑の駆け込み寺というわけか。……ふん、お似合いだよブレンナー。貴様、男に捨てられれば尼僧にでもなればいい」

「ええ、考えておくわ。それでエレオノーレ？ 貴女はいつたいどうするの？」

席を立ち、エレオノーレを威圧的に見下ろすりずに、エレオノーレは剣呑な表情をぴくりとも動かさなかった。

「レーヴェンスボルンを告発して、ゲッター送りにでもする気かしら？」

「そうしてもいいが、より賢明な判断をしてやろう。貴様とて、はなからそれを条件に雌犬どもの罪を不問にふさせようという腹だろ。……まあ、痛めつけても口を割る玉ではないし、 magari なりにも政府高官の婚約者だ。腹立たしいが丁重に扱うしかあるまい」

「そう。ありがとう。だったら」

「案内しろ。今すぐにだ」

話は終わりだ、とても言いたげにエレオノーレが立ち上がり、行く

ぞと目でリザに告げる。
リザもまたそれを諒解した。

「ええ、わかったわ。聞いた話だと、今夜そこにはゲシユタボが向かったらしいし」

「……また面倒な。だが、考えようによっては渡りに船か」

「……あのー。中尉」

不意にエレオノーレの言いつけどおりに黙り込んでいたベアトリスが、恐る恐るといった態で口を開いた。

「なんだ？」

「その、彼女も連れて行くんですか？ 危ないですよ」

「ああ、貴様はコイツがどういう奴か知らんからな。引つ張って行かんと、平気で嘘を教えかねんのさ。ちょうどいい機会だ、キルヒアイゼン。貴様に人生の真理を教授してやる」

「なんででしょう？」

ふん、と鼻を鳴らし、エレオノーレはリザを一瞥した。

「女は信用するな、だ」

第5話「黎明（後）」

第5話

「黎明（後）」

「：アオスブルフ：」

「ヘルガローゼ……」

「……………」

はあ、と私は深く嘆息した。

約4年経ち、かつての部隊から異動してそれぞれ大尉と中尉に昇格し、お互い公私ともに必要なパートナーの関係になったのにも関わらず、ヘルガローゼは私と二人きりになった瞬間に、重い沈黙をまとうようになっていた。

アンナ……恨むぞ。

下手な嘘をついた私の責任だが、あの場に居合わせたアンナに恨み言をこぼしたくなる。

なんたつて、私からしてもあの場にアンナがいたこと事態が予想外だったのだ。頓珍漢な嘘を吐いてしまったのもそれが原因。だからアンナが悪い。

そんな風に情けない言い訳を言いたくなる。だが、男としての

矜持がそんな女々しいことを言わせてくれずに、私はずっとアレが嘘だった、と言い出せずにいた。

単に、あの女とはもう別れたとだけ言っただけであるが、それがさらにヘルガローゼとの関係に溝を開けるだけに終わった。簡単に女を棄てる男は信用できない、とのこと。まことにごもつともである。

『そもそも交際すらしていないから！』

私の心の叫びである。

「せつかくベルリンに戻ってきたんだ、どうだ、一緒に回らないか？」

「……………」

「……………いやまあ、無理には言わないが。……………じゃあ、せつかくのクリスマスだし、私はぶらぶらしているよ。ヘルガローゼはどうする？」

「……………」

「……………」

はあ。再度の溜息。

そして、私はいったいなぜ、ヘルガローゼのご機嫌伺いをしているのだろうと疑問に思う。

ヘルガローゼが美人だから？ ……それはある。というか美人に構いたがらない男はいないはずだ。

この3年間、ともに生き残ってきた戦友だから？ ……これが一番大きな理由かもしれない。

美人だからという理由では、私はおそらく関係の改善を諦めていた

はずだ。

「あ、ヘルガ！」

「！ イングヒルト！？」

ふと、たまさか4年前の同僚、イングヒルトと鉢合わせし、ふたりが驚きの声を上げた。

ふたりは親友同士だったのだ。軍という、いつ死別してもおかしくない世界で、生きて再会できた喜びは凄まじかった。

さきほどまでの暗い雰囲気はあつという間に払拭され、女二人はアオスブルフを尻目に会話に花を咲かせる。

いたたまれない気分になるが、まあ、ヘルガローゼが無表情の冷たい顔でなくなっただけマシだと思おう。

そう自分に言い聞かせ、私はイングヒルトに声を掛けた。

「久しぶりだな、ガッセナル」

「あ、お久しぶりです、大尉！」

ビシッと敬礼してくるイングヒルトに、私は苦笑しながら応えた。軽薄な印象のイングヒルトが、まさか同期の階級を気にするようになるとは。

とはいえ今はプライベートだ。そんな時まで軍内の規律を持つてこられても困るので、苦笑を引っ込めた後はジト目で睨みつけた。するとイングヒルトはちよつとだけ舌を出して、愛嬌を振りまく。

「……なんちゃって うん、久しぶりアオスブルフ君。凄いいねえ、

今、わたしたちの同期の中で大尉までなっちゃってるの、アオスブルフ君だけだよ」

イングヒルトはなんというか、そこにいるだけで場の雰囲気明るくなるオーラをまとうようになっていた。

階級は中尉。充分に彼女が有能であることが、その堂々とした様子からも窺えた。

私は一応の友人として、少しだけ再会を喜ぶ気持ちが出てきた。

「で、ジークマイヤー大尉はどうした？ いつも一緒にいたじゃないか」

「ぶつぶう、今はもう大尉じゃなくて少佐に昇進しちゃったよ。そしてわたしが少佐の副官になったのです！」

「ホントか？！」

ヘルガローゼが驚きの声を上げた。

それに、少しだけ得意げに笑ったイングヒルトは、ちょっとだけ沈んだ声を出した。

「うん……ノーウェン中尉、この前のポーランド侵攻で……」

「」

そこから先は言わずとも分かった。

死んだのだ。

「……そうか。だが彼なら悔いはなかっただろう。最後まで勇敢だったんだろう？」

「うん！ ノーウェン中尉って凄いだよ！ 少佐やわたしまで守られちゃったもん！」

「へえ！ ジークマイヤー大尉……いや、少佐を守ったのか。まあ、それもおかしくはないな。少佐の背中を守れたのは、ノーウェン中尉だけだったからなあ……。これからはお前が守るんだぞ？」

「合点承知！」

力強く笑い、イングヒルトは胸を叩いた。

彼女は成長している。

それを実感した。

古い友が成長しているというのは、喜ばしい反面、負けてたまるかという気持ちをも呼び起こす。

自然、私は笑みを浮かべていた。

「さて、二人には積もる話もあるだろうし、私はここで失礼させてもらうよ。ガッセナル、また生きて会おう！」

「当然！ ……って、あれ？」

怪訝そうにするイングヒルトとヘルガローゼを置いて、私はさっさと歩き始めた。

やはり、この国はいい。

誰もが必死だ。生きること、戦うことに。倦んではいても諦めていない。

生きることにとっても真摯で、生き物が平等ではなく、親しい人が死んでもへこたれない精神的タフネスもある。

改めてこの髑髏の帝国に住む人々の素晴らしさを実感しつつ、しか

しアオスブルフは集団には必ず醜い者がいることもまた心得ていた。

「ねえ、ヘルガ？　もしかしてまだ……」

「え、ええ……　どうしても、忘れられなくて……」

「ばっか！　アオスブルフ君ほどイイ男なんて、少佐ぐらいしかないんだよ！？　このままじゃ他の女に取られるって！」

「でも……」

「デモも銃殺もない！　早く追いかけて、ってアオスブルフ君いない！？」

「え、うそ……？！」

「彼の方向音痴ぶりって、普段の彼からは想像できないくらい滅茶苦茶だからなあ……」

【　：アオスブルフ：　】

ディルレワンガー將軍の醜聞。

それについては聞き及んでいたが、無能の人間について関心の薄い私は、さして興味がなかったから詳しく見知っているわけではないが、しかし現在帝都に蔓延る殺人鬼についてならある程度だけ関心を抱いていた。

なんせ、私がかねてから目障りだと思っていた軍上層の無能の一人を殺そうとしたというのだ。

会うことが出来たら是非とも感謝したい。そしてこう言いたい。

「もつと国に巢食う蛆虫を処分して回ってくれないかな……」

ふと、本音をポツリとこぼしながら歩いていると、私は目的の場所
実家に帰ろうとしているのに、そこからだいぶ道が逸れている
ことに気づいた。

まずい。

今日は私の誕生日である。実家にはすぐ帰ると伝えてあるから、誕生パーティーの用意でもしているはずだ。

にも関わらず、帰るのが遅れたら父上と母上はイイとして、お祖父様が口やかましく罵ってくるのを甘んじて受けねばなくなる。
正直、それはごめんなので早く帰りたいのだが……

「……クツ、己の方向音痴ぶりぐらい把握しているつもりだったが
……！」

いささか己を過大評価していたようだ。

これまで方向音痴の気は克服するために努力してきたし、そしてあ

る程度は減衰したと思っていたから、つい1人で歩いてても大丈夫だ
と思い込んでしまっていたが……。どうやら、最近私が道に迷わな
かったのは、部下やヘルガローゼが居たからだっただけらしい。

「……………」

不意に、私は見知っている女を見つけた。

女性らしい豊満な肢体と、貴婦人然とした格好、赤い長髪。人を食
った笑みを口元に刷いた、個人的にはいやらしく見える表情の歪み。
だがこの帝都に在るには自然とさえいえる魔性の女。

アンナ・マリーア・シュヴェーゲリンだ。

そして、その傍らには冴えない風貌の神父がいた。

長身瘦躯。くすんだ茶髪に、寝不足なのか両目の下になりに濃いク
マが出来ている。

神父とアンナ。

この組み合わせがとてつもなく滑稽に思えた私は、なんとなく笑い
がこみ上げてきて二人に対して声を掛けた。

「その御二方。こんな夜中に出歩いているとゲシュタポが噂の殺
人鬼に目を付けられかねませんよ？」

「あら？ 誰かと思ったたらフランメじゃない。珍しいわね、そ
ちからわたしに声をかけてくれるなんて」

たまさか噴水の近くを通りかかり、そこでこちらを振り向く妙齡の
美女。だが私はその女が見た目どりの中身をしているわけではな
いことを知っていた。

神父が、私に振り向いてきて礼儀正しく会釈をしてくるのに私も会釈を返して、

「声もかけなくなるさ。性悪の魔女と敬遠な神父と一緒に居ればな。こんばんわ、神父さん。私はアオスブルフ・フォン・シュトライテンです」

「これはご丁寧に。私はヴァレリアン・トリファです」

とりあえず、個人としての挨拶をした。

「ちょうどよかった。ゲシュタポが来たって、フランメが居れば捕まらないし、噂の殺人鬼が襲ってきてもフランメが守ってくれるんですよ？」

「さて。アンナはともかく神父さんには守りが必要だろうからな。……余計かもしれませんが、お供をさせてもらいますよ、神父さん？」

「これはありがたい。何かあった時に現役の軍卒の方が一緒に居れば心強いですから」

「ちよつとお！ わたしは！？」

「自分で何とかしろ、性悪」

【 : : 】

そうして、帝都にちらばる星々は、今宵運命の邂逅を果たす。

意識せずとも抗おうとも、それは定められたうねりに沿って導かれ、今宵、この時、この場所で、出会うことはひとつの必然。よって

カッカッカッ！ と【異常】を悟って駆ける足音が三つ。

「っはあ、中尉！ 中尉待ってください、走るの早いです、めっちゃくちゃです！」

「甘ったれるなキルヒアイゼン。貴様、民間人よりも足が遅いとはどういうことだ？」

「しょうがないでしょ、だってあの娘じゃ……」

「はあっ、はあっ、 歩幅が、歩幅が違うんですよおっ！ だって二人とも、背が高けえ……！」

ベアトリスと、エレオノーレと、リザ。

「ふうくん、ふふん、ふふうーん。　ねえねえ、ほら見てフランメ、神父様あ。こうしているとわたしって、ドボルザークの歌劇に出てくる妖精みたいじゃあない？」

「……とりあえず、妙齡の女性が噴水の中ではしゃぐような真似はおよしなさい。みつともないですよ？」

「忠言は無駄ですよ神父さん。あいつは馬鹿ですから」

アンナと、ヴァレリアンと、アオスブルフ。

そして

真実。今この時こそが、私にとって転換期となるだろう。なぜなら

「ここに居たか道化師。随分とまた手の込んだ上にふざけた呼び出しをかけてくれたな」

リムジンから降り立ち、黄金の獣が吐き捨てながら影絵の如き男へ声をかける。

男は亀裂のような歪みを口元に生じさせた。

彼と、彼の率いることになろうレギオン。その始まりは、今なのだから。

「やあ、ようこそおいでくださいました、ハイドリヒ中将閣下。席はすでに取っております。ともに観覧いたしましょう」
「なに……？」

そう、ではこれより

「」 うううおおおおあああッッ
「……」

猛々しい雄叫びが猛烈な勢いで迫る。

二対の白。

銃とナイフを振りかざし、倒壊する住居が吹き荒び、

「っ！」

黄金が息を呑み。

「え!?!」

「ちよつと……!」

「これは!」

女三人が驚愕し。

「なんともまた……」

「おかしいことになってるじゃない」

「……やれやれ」

神父と魔女と異端者が、それぞれ呆れ賞賛してしょうがないなと肩を竦めた。

今宵、グランギニョルを始めよう

第6話「髑髏の貴公子」（前書き）

思いのほか好評なようで、恐縮です。

本作品では基本的に原作キャラ、オリキャラ、オリ主の別なく展開によつては死んでしまいます。

まあ、死んでもいいようにオリ主候補は何人かいるんですがね。

さて、第6話「髑髏の貴公子」！ どうぞ！

第6話「髑髏の貴公子」

【 …???… 】

「中尉……これは、いったい……」

ゴォッ！ と燃え盛って崩れ落ちるベルリン大聖堂。

それを目の前にして、金髪の小柄な少女……ベアトリスが呆然と声を発した。

「さてな。だが見るキルヒアイゼン。貴様はあれが誰だかわかるか」

対してその上官たるエレオノーレは、微塵も動揺した様子はなく、淡々とした語調で遠方を指し示した。

示された場所には、軍服を着用した1人の男と、全体的に地味な印象を受ける影絵の如き人物がいた。

ベアトリスはエレオノーレの言葉に困惑した。

「え、誰って……」

「ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ中将。彼は、ゲシュタポ長官閣下よ」

「ちょ、ほ、本当ですか……！？」

リザが見知った人物を紹介するような固い口調で告げて、ベアトリスは慌てて問い質した。だがそれにはリザは応えず、代わりにエレオノーレがうなずく事で返答とした。

「ああ。そしてその隣に居るのはおそらく……」

「誰です？」

「……いや、それはいい」

珍しく躊躇ったように言いかけ、断言しかねたのかエレオノーレは首を左右に振った。

「ともかく、事情は知らんがここに中将閣下がおられる以上、やるべき事はひとつだ。狂った賊から閣下のお身柄を守らねばならん。

……見る限り、この場に居合わせた軍卒は貴様と私の2人のみ」

「……いいや、3人だ」

不意に割り込んできた声に、エレオノーレたちは背後を振り返った。

そこには青みを帯びた黒髪の、長身強軀の軍人がいた。

エレオノーレが思わぬ人物の登場に、珍しいことに目を見開いた。

「し、シュトライテン卿……！ 貴方がなぜここに……！？」

その男の名はアオスブルフ・フォン・シュトライテン。

ユーゲント時代のエレオノーレとリザの二人より一期上で、先輩に当たる主席卒業生だ。

そして……エレオノーレがその実力と心根を認め、尊敬していた唯一の男でもあった。

「あの、彼は？」

ベアトリスがエレオノーレの反応で興味を抱き、傍らのリザに小声で尋ねると、リザはほんの少し困ったように苦笑して、ベアトリスの疑問に答えた。

「彼はアオスブルフ・フォン・シュトライテン。貴女やエレオノーレと同じ、軍人貴族出身の人よ。私やエレオノーレの一期上の先輩で、エレオノーレを【女だから】っていう色眼鏡で見ずに、男と同じように一切の手加減なく接した唯一の人。エレオノーレも、彼の前なら多少は丸くなる。そんな人よ」

「ちゅ、中尉が丸く……！？」

エレオノーレの人となりをよく知るからこそその絶句。それを横目に睨みつけてくるエレオノーレに、ベアトリスは驚愕した。

もともと、彼のせいでエレオノーレがさらに軍人への道に傾倒してしまったのだから、素直には尊敬できないけど。

そんなリザの心中を他所に、アオスブルフはエレオノーレの問いに簡潔に答えて、暴走する二対の白に視線を転じた。

「私がここに居るのは単なる偶然だ。まあ、結局私を含めても3人しかいないのだし、ゲシュタポの仕事に介入した越権行為にも大義が立つだろうよ」

「……ですね、あの暴れてる二人、誰だか知りませんが危なすぎます」

視線の先には二対の白。

方や、小柄で少女とも少年とも取れる容姿をした、白銀の鬼。女物

のドレスで身を包み、尋常ではない速度と膂力を発揮して暴風のごとく暴れまわっている。すでに痛覚が消し飛んでいるのか、体のいたるところより出血しているのにもかかわらず機敏な踏み込みに強烈な獣気が込められていた。

方や、長身痩躯の白い青年。白い髪、白い肌、赤い瞳。典型的なアルビノだ。纏う衣類は襤褸当然なれど、やはりこちらも片割れに劣らぬ獣気と殺気を全身に漲らせ、一挙一動の全てが殺しに直結する致命の一撃を放っている。手にする銃こそは十全には使いこなせていないが、それを補って余りある身体能力と直感が、彼を夜の獣たるに相応しいバケモノにしていた。

アオスブルフの言葉に肯定の意を返したベアトリスに、エレオノーレは鼻を鳴らした。

「ふん、生意気にも一端に鼻が利くか。ならばついでに教えてやる。ああいった手合いには、銃よりも、こいつだ」

しやりん、と腰に提げていた騎士剣を抜き放ち、その身に戦意を充填し始めて、稀代の女傑の声が達する。

「叩き切り、突き刺して、痛みと恐怖を植えつける。銃とはなキルヒアイゼン。向けられても存外に怖くない物なのだよ」

「はい！ ツ」

ベアトリスもまたエレオノーレに倣って抜剣し、アオスブルフは無駄に力むベアトリスに笑いかけた。

「もしか准尉、実戦は初めてか？」

「はい、でも大丈夫です！」

「そう願いたいな。私も、ヴィッテンブルグも、そしてお前の家も元を正せば騎士階級だ。武門に生まれた以上、殺すことも殺されることも躊躇は無用。行くぞッ！」

「はい！ リザさん、貴女は隠れていてください。 オオオオオ
オッツッ！！」

矮躯から闘気を爆発するように放出し、ベアトリスが雄叫びを上げながら率先して切り込んで行った。ベアトリスが狙うは長身の男。死闘を繰り広げる二人の横合いから剣を薙ぎ払って介入した。

「 ああ？！」

常人ならば回避不能な奇襲に、しかし白い青年は応じる手を誤らなかつた。

ベアトリスが己の間合い入った瞬間に新たな敵手の存在を察知し、直後に己の身に迫った剣の刃を見た目に似合わぬ機敏なステップを刻んで回避する。

「このドクサレがあっ！」

口腔より迸る罵り声。

己と宿敵の決闘を邪魔する不埒者に白い青年 ヴィルヘルム・エーレンブルグは、ベアトリスが連続して斬りかかって来るのを、憤怒と共に銃身で刃を振り払いながら、一瞬にしてベアトリスを殺害対象に認定した。

「オオオオオオッツッ！！ フッ、ハアッ！」

構わず必殺の剣撃を放ち続けるベアトリス。

だが、たった数撃でベアトリスの素直すぎる攻撃を見切り始めたヴ

イルヘルムはあっさりと剣を銃身で受け止めて、力任せに一気に吹き飛ばして間合いを開けた。

「なんだてめえ、どこから湧いて出やがった」

吐き捨てるように誰何する、ヴィルヘルムの静かな声。

その声が孕む心情は心底不愉快そうで、呪わしく狂おしい激情を、なんの手加減もなしにベアトリスに叩き付けた。

ベアトリスは一瞬それに怯みそうになったが、その畏れを強靱な精神力で振り払い、剣の切っ先をヴィルヘルムに突きつけ気合を込めて一喝した。

「そこな凶賊、大人しく縛につきなさい！ わたしはベアトリス・ヴァルトルト・フォン・キルヒアイゼン！ 抵抗するなら、手足の1、2本は叩き落す！」

「カハッ！ ハハハッ、アアハハハハッツツ　　！！」

ベアトリスの宣言に、ヴィルヘルムは腹を抱えて大笑する。そして、赫と輝く赤い双眸が、堪えがたい憤怒を爆発させた。

「言うねえ、こりやおもしれえ。貴族の嬢ちゃんが勇ましいこった。んな細っけえ体でよお……俺とやれるとでも思ってたのかあ！？ 組み敷いて串刺してよがらせて、喚かせて叫ばせて屑みてえにばら撒いてやらあ！！」

「っ　　！　　なんて下種。おまえには救いがない……！！」

生まれて始めて投げかけられた、明確な殺意と侮蔑と下種な言葉。息を呑みながらも絶句したベアトリスは、軽蔑するようにヴィルヘルムを睨みつけた。

「おう。そんなもんは生まれてこのかた、ただの一片だって感じたことありやしねえよ。おら、来なよ嬢ちゃん。人の喧嘩にアホな横槍入れやがって。そういう真似すりゃ、どんな目に遭うか教えてやるよ」

銃と剣。

男と女。

大人と子供。

彼我の戦力差を正確に推し量った殺人鬼が、不敵に嘯く。

無論、そこまで舐められて黙っていられるほど、ベアトリスという少女は臆病でも敗北主義の雌犬でもなかった。

気高い魂を誇る騎士。16年という短い年月　しかし他の誰と比べても決して劣らぬ密度で鍛え上げられた練成の日々。たとえ目の前の青年に己の戦力が劣っていようと、自らが積み上げてきたもの全てを賭けて、ベアトリス・キルヒアイゼンは白い殺人鬼の打倒を誓った。

「言われなくても……教えてやるのは、こっちの方であつ!!」

ベアトリスは決死の特攻を仕掛けるべく、その口腔より極大の咆哮を迸らせた

女装の殺人鬼　ウォルフガング・シュライバーは、自身の仇敵こいひとを横合いから掻つ攫われ、不貞腐れた子供のように足元の小石を蹴りつけた。

「……あーあ。なんだよつまない。せつかく盛り上がりかけてたのに。これじゃあ消化不良もいいところじゃないか」

そのさまは、外見だけを見るなら非常に愛らしく無害そのもの。だが、この場に居合わせた誰もがそれを擬態なのだと見知っていた。ゆえに　騎士たる女傑がシュライバーの存在を認可するはずもなく。

「おい。……貴様」
「ん？」

抜き放たれ、月夜を照り返す騎士の刃を手に、エレオノーレはシュライバーに背後から声を掛けた。背後から斬りかかるのは主義に反するゆえに、正々堂々。真正面から叩き潰すために誰何の声を上げた。

「男か、女か。性はどちらだ何者だ」
「クス……どっちでもないよ。見るかい？」

平常運転でさえ非常に厳格な彼女の声は、戦場に立つとさらに威圧的な佇まいを発していた。そんなエレオノーレの、聞く者に畏怖と戦慄を植えつける声に、しかしシュライバーは怖じることなくドレスの裾をたくし上げ、自ら

の股間部を露出して見せた。

「ほら」

そこには、ぽつかりと不自然に空いた穴がひとつ。

それを見せられたエレオノーレは心底の侮蔑をシュライバーに射込み、しかし狂人たるシュライバーはそれに気づかない。

「だから、お姉さんがどつちでも愛してあげるよ？ どうする？」

「……なるほど。つまらん哲学を持っているようだな。汚らしい」

吐き捨て、これ以上の問答は無駄であると悟ったエレオノーレは、手にする騎士剣を虚空で一閃。これ以上なく明確に戦意と殺意を示して見せた。

「エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグだ。かかって来い淫売。帝都を腐らせる蛆虫が。斬り殺した後、燻蒸消毒してくれる」

「ふ、ふふふ、」

誇り高いヴィッテンブルグの名に賭けて、国を腐らす害虫は生かしておけぬ。

その意思を受けて、殺意や害意には敏感な獣のように、シュライバーは唸り声にも似た笑いをこぼす。

「殺すの？ 殺す。僕を殺す？ ……ふ、ふふふ……また、またそうやって！ 出来ないことを言うやつだなあ」

呆れて物が言えない。

この女はいつたい何を言った？ なんとさえずった？

未完成な下等生物の分際で、完成された生き物であるこの自分を、殺すだって？

「嫌いなんだよお、誰が誰を殺すんだ？　言ってみろオオオオオオッッッ！」

その放言、聞き捨てならぬ。

やれるものならやってみろ、だがその前に死ぬのはお前のほうだ！

無数の投げナイフが手の中で踊る。

致命の拳が握られる。

少女のような、少年のような、愛らしい佇まいをかなぐり捨てて、狂える獣は逆鱗に触れた愚か者を仕留めんと雄叫びを上げた。

対し、エレオノーレは凍える声で、狂犬の雄叫びに返答した。

「私が、お前をだ。　思い知れッ！」

「呆れたあ。とんでもない坊やたちねえ。あれ、二人とも半分人間やめちゃってるわよ」

アンナ・マリーア・シュヴェーゲリンは殺し合う二組の男女を見や
つて、完全に他人事のような気楽さでつぶやいた。
その傍らに立っていた神父、ヴァレリアン・トリファはアンナの言
葉を聞いて眉を寄せる。

「つまり、女性将校たちの分が悪いと？」

「そうねえ。彼女たちも非凡ではあるようだけど。たまにいるのよ、
ああいうのが。武道も魔道も知らないのに、環境だけで生み出され
る【人間獣】。ふふ。言葉遊びをすれば、【外道】って奴ね。……

……あら？ この台詞、どこかで言ったような気が……」

はてな？ と小首をかしげながら、アンナは気を取り直して死闘を
繰り広げる者たちの戦力の差を分析して、それを神父に解説してあ
げた。

「……見る限り、小さい坊やが9点。大きい坊やが7点。赤毛の軍
人さんはまともだけど、鍛え方が半端ないようだから、同じく7点。
金髪のお嬢さんは5点というところかしら。ジリ貧ね。でも他にや
りようがない。組み合わせを逆にしたら、金髪のお嬢さんは真っ先
に死んでしまうわ。そうなったら、最悪2対1の展開だし。赤毛の
軍人さんもそれはわかってるみたいだけど、自分たちが2人がかり
で攻めるのは主義に反する、ってことなのかしら。だったらいつそ
逃げちゃえばいいものを、それもできないのが騎士道精神。泣けて
くるわねえ。手詰まりじゃない」

「では、なぜシュトライテン卿は彼女たちに助勢しないのですか？」

ヴァレリアンは、どっちつかずの距離で戦闘を眺めているだけの男に怪訝そうな目を向けた。

ヴァレリアンの【視た】限り、あの男はこのような事態を座したまま見ているほど臆病でも大人しくもない。むしろ真っ先に突撃していくような男だ。

なのに苦戦している女性将校たちを助けるでもなく、ただ突っ立っているだけなのはなぜなのか？

ヴァレリアンの疑問を受けて、アンナもまた同感なのか呆れたように嘆息した。

「確かにねえ。フランメならどっちの坊やにも勝てちゃうのに」

「なんと……シュトライトン卿はそれほどの方なのですか？」

「ええ。フランメってハッキリ言って化物よ。武道を尋常じゃない密度で極め続けて、人間の限界値に到達しちゃってる。10点満点ね。しかも、厄介なことに変な能力まであるし……」

エレオノーレとアオスブルフ。共に人間としての極限に立っていないが、その戦力には絶対的な差が生じている。

その差は【性別】だ。

男と女とは、筋肉の量、体格を初めとした知力体力の基礎性能に壁があるのだ。

女は子供を生むための機能があるのに対し、男はそれが無い。ただ頭で、体で戦う機能しかないのだ。その時点で生き物としての規格が違う。

ゆえに、持って生まれた才能の量が同じでも、その限界値にはどうしても差が生まれてしまうのだ。

「能力、ですか？」

「（あ、いつけない）……ええ、多分、個人同士でやり合うなら、人類最強なんじゃない？ フランメって。なのに助けに入らないのは、フランメにも騎士道精神があるからなんじゃないの。多分だけど、フランメはどっちかが死んだら、相手がいなくなった坊やのほうを相手にするつもりなんじゃない？」

「それはまた……ずいぶんと融通の効かない方なのですね」

ヴァレリアンの率直な感想に、アンナはプツと噴きだして、一応の友人である彼のために否定してあげた。

「普段は融通が効くほうよ？ ただ、譲れない思想や哲学があるだけで」

「なににせよ……軍卒とはいえ女性の危機です。私で何かの役に立つなら、手助けをしたいところですが」

「やめたほうがいいわよ。だってあなた、-10点。ついでに言うとか、あっちで呆然としている青髪のお嬢さんは、平々凡々な1点ね。どうしようもないわよ」

「ならば……あちらの御仁はどうなのですか？」

「……え？」

不意に転じたヴァレリアンの目線に、アンナは呆けたような声を上げた。

「気づいていなかったのですか？ あれはおそらく、ゲシユタポ長官閣下殿に、宣伝宰相の隠し玉。彼らならどうなのでしょう」

「……。……っ」

アンナの洞察力を頼ってのヴァレリアンの言葉に、しかしアンナは言葉が出ない。

見えない……魂の質、その本質が。深く……どこまでも沈んでいく
巨大な……。

胸を押さえ、喘ぐように呼吸を乱すアンナ。

それに、神父は唐突なアンナの変貌に、驚愕して、震える声で声を
掛けた。

「……どうしました、シュヴェーゲリンさん？」

「うそ……うそよ……っ、……そんなこと……有り得る、はずが……」

「……………！？」

ぼそぼそと紡がれる呪詛にも似た怨嗟の声。

まるで、強者。生まれながらの絶対者。輝ける暴的なまでの黄金。
底なしに沈む深遠の魂。

恐駭する己の体を抱き締めて、魔女は狂乱するようにして絶叫した。

「……なんで……どうして……、なんで、なんで、なんで……！
信じられないふざけてる！ 認めないわ、なんであんなのが、

この世にいるのよおっ！」

【 : : 】

「 どうです？ なかなか興味深い催しでしょう？ 双方共に、ある意味ヒトの極限だ。やはりこの国の人材は面白い。ふらりと外に出ただけで、あのような者らに会ってしまふ。これが貴方にとって無聊の慰めとなれば幸いだが……。……感想をお聞きしてもよろしいか？ 」

「 …………… 」

自称占星術師 カール・エルンスト・クラフトは、常人には目にも留まらぬ速さと迅さで繰り広げられる激戦を離れから観戦しながら、傍らに立つゲシュタポ長官のラインハルト・ハイドリヒに訊ねた。

それに。ラインハルトは微塵も表情を崩さずに、己という人間を誤解している宣伝相の隠し玉を一瞥して率直に告げた。

「 道化師。……いや、卿が何者であろうとっておくが。私はな、それほど大した男ではない。昔から加減というモノが出来なかったゆえに、なんであれ真摯に取り組み、結果としていつの間にか今の地位に就いていただけだ。まるで止まることの無い車と同じだ。性能がどうであれ、休まず走り続けていれば世界の一周や二周は誰でも回れる。卿が私に何を感じているかは与り知らぬが、つまるところ

ろ、ラインハルト・ハイドリヒなどそんなものだ。娯楽が欲しければ他に面白い者はゴマンといょう。そちらに行け」

そうだ。そのとおりだ。

ラインハルトは己の半生を振り返って、改めてそう結論した。

己は手加減とは無縁の人生を生きてきた。

全力を尽くし、そしてそれゆえに中将などという、現在のラインハルトの年齢では考えられない地位に就いている。

ゆえに、ラインハルト・ハイドリヒという人間は、それほど面白い男では、無い。

断言するラインハルトに、しかしカール・クラフトは失笑をこぼした。

「これはまた。貴方に韜晦など似合わない。私が、まだこんなものでは無いと言っても気は変わらぬか」

「なに……？」

こんなものではない、とはどういう意味だ？

この、眼前で繰り広げられる死闘が、なお一層激しくなると言う意味か？

それとも……よもや私が、ラインハルト・ハイドリヒが、か？

「中将閣下。貴方は加減が出来ないとおっしゃった。止まることが出来ぬとも。しかし、では聞かせていただく。貴方は本気を出していたか？ 走るつもりで歩いてはいなかったか？」

「どういう意味だ」

「言葉通り、そのままに」

答えは後者。

カール・クラフトは言う。貴方はそんなものではないと。貴方は全力など人生でただの一度も出した事はないと。

鬨るような笑みを口元に刷く道化師は、ラインハルトが結論した人生のすべてを否定する。

「卵を割るが如き所業に、獅子は牙と爪を使ったか？ 地を這う虫との競争に、鷹は翼を使ったか？ 貴方のおっしゃる、加減が出来ず歩いた道とは、一体どこにある道だ？ 私には見えない。見たこともない。さきほど車を比喻に出したが、ではこう言わせていただく。大陸を飛び越え、海の方こうにある敵国を破壊できる新型爆弾。あるいは、宇宙へ飛び出すそれでもいい。その燃料と内燃機関を持ちながら、周りが公道だからという理由で一般車両に載せて走っている。つもりになっている。それが貴方だ。違うかな？」

「」

楔が、必死に人間たらんとしていた黄金の心の城壁を破壊する、呪いの言葉。

吐き出されるそれら全てに、この時、ヒトとしての防衛本能がラインハルトを喚起した。

「そろそろお認めになさるといい。貴方は本気など出してない。加減が出来ない性分ゆえに、そうしなければ秒と持たない人と世界に倦んでいるのだ」

「馬鹿な。卿の誇大妄想は一体どこまで広がっている？ 爆弾の燃料と内燃機関だと？ 私がそんなものを積んでいるのなら、とうにこの国は灰燼と帰している」

「ですから、なぜそうしないのかと問うている」

「っ……」

だが。そのようなチャチな防衛機能など、カール・クラフトからしてみれば紙切れ程度の壁に過ぎず。

言葉の刃は容易に、眠れる黄金の獣の壁を破壊していく。

咄嗟に返す言葉に詰まったラインハルトに、畳み掛けるように、謳うように邪星は嗤った。

「この国が好きですか？ 慈しんでおられますか？ 友人、妻、恋人、家族、部下に上官に市井の諸々。貴方がだいそんなものを尊き寄る辺にするなど有り得ない。なぜなら」

「カール・クラフト」

それ以上は聞き捨てならぬ。

最後の防壁が、軍人としての愛国心、忠誠がラインハルトを突き動かした。

「いい加減に口を噤め。初めて会った時に言ったはずだ。卿が国家に害をなすなら許さん、とな。もしこれ以上、くだらん戯言を抜かすなら」

髑髏を背負った貴公子殿は、つまらぬ遊びに退屈している子供のようだ。

牢屋越しに嘯いていた男の言葉を思い出しながら、胸の内から沸き起こる諸々すべてを押し殺し、恫喝するように占星術師を睨み据えた。

「その口、二度と開けぬようにしてくれるぞ」

「おやおや。これはこれは」

しかしその本気の恫喝に、カール・クラフトは少しも堪えた様子は無く、微笑すら浮かべながら言った。

「ですが閣下。最後にもうひとつだけ」

聞くな。これ以上この男の言葉に耳を傾けては駄目だ。

呪的な韻を踏む、男の言葉は、ついに、ラインハルト・ハイドリヒの心に致命の一楔を容赦なく打ち込んだのだった。

「この世の黄金率の一形態に、ピラミッドと言うものがありましょう。その頂点には、『誰も横におらぬ』と言うことを。

貴方はそういうお方です。ご自覚なさるがよろしいかと」

「下らんな。卿の言う事は何も分からん。餓えや渴き？ 私は自覚などしていない。……しかしなぜだろうな。不明だが……私は今ただ無性に……この者たちを

捻じ伏せたくて仕方がないんだ……ッ！」

歪みの一言。

檻を開かれ、餌を差し出された獅子が、ついにその誘惑に耐え切れず、迸る魂の胎動に声を震わせた。

「……では、ご随意に」

水星は、ひとつの生命の誕生を言祝ぐように笑ったのだった。

さて。 獣殿は動いたぞ。 君はどう動く？ 私のこと？ 既知？ に無い
異端者殿。

第7話「未知」

第7話

「未知」

「 :アオスブルフ : 」

燃え盛るベルリン大聖堂を背景に、二組の男女が踊っている。

ベアトリスの剣が翻り、敵を斬り伏せんと勇躍し 。
ヴィルヘルムの爪と銃とが小生意気な小娘を叩き潰さんと嘲弄し
。

エレオノーレの刃剣が閃光となって敵手を葬らんと勇戦し 。
シュライバーの投剣と拳とが、獲物を屠らんと咆哮した。

「キルヒアイゼンか。真っ先に死ぬのは」

俯瞰した第三者の視点で眺めながら、私は冷静に断言した。

なにぶん16歳の少女だ。

身体能力が最も劣り、殺しの経験がないためか、揮われる刃には僅かに迷いがある。

そんな剣ではあの白い青年を打倒するには及ばず、経験豊富な殺人鬼は青臭い小娘を打ち殺すのにそれほど手間を取らないだろう。

おそらく、今の白い青年は遊んでいるのだ。宿敵との潰しあいや邪魔された腹いせに、徹底的に鬭って弱らせ絶望させながら殺そうとしている。

エレオノーレは、自らより強大な敵に対しても、身につけた剣術と戦術眼、白い少年に劣らぬ殺意と気迫を以ってなんとか互角にまで持ち込んでいるが、ジリ貧だ。ベアトリスよりは長く保つだろうが、やはり白い少年には敵わない。

「……………というか、あの餓鬼は何者だ？ あんな小さな体でヴィッテンブルグを圧倒するとは……………」

体格に見合わぬ怪物ぶりを発揮する白い少年を見つめ、私は独白する。

おそらく、女性将校の中では随一の能力を持つだろうと思われるエレオノーレを相手に、脆弱な少女の如き細体で立ち合うあの少年に、私は少なからず驚嘆し興味を覚えていた。

「ともあれ、そろそろ準備でもしておくか……………」

じきにベアトリスが殺される。

よもや助勢しなかったからと恨むような女ではないだろうし、私が出張するのはその時だ。

だが、ベアトリスの才能は惜しい。あと4年も修練を積みばエレオノーレを超える剣の使い手に成れただろう。

しかしベアトリスは未熟ながらも騎士たる魂の持ち主だ。

ならばその決闘に無粋な横槍を入れることなど恥すべき所業である。もったいないが、見捨てるより他あるまい。

騎士道精神

一対一の正々堂々の戦い。別にそれに対するこだわりは強くないが、強い信念を持つ者の戦いに割り込む趣味はない。

しかし、それは別の話として

「私でもアレ相手に素手はきついな……」

白い青年に改めて目をやりながら、剣を持って来なかったことを軽く後悔しつつ、ちらりと己の右手を一瞥した。

あまり見られたくないが、四の五の言っていられるほど甘い敵でもあるまいよ。

いざ、戦闘に入れば容赦なく異能を使うことを決心する。

切れる手札を切らずに死ぬのは性分に反するゆえに、これまで秘匿してきた力を、この場で開陳することを私は決心

「

ツツツツッ！！！！！？？？？」

この時、アオスブルフ・シュトライテンが【ソレ】にいち

早く気づけたのは、これまでの弛まぬ修練と歴戦の兵士としての直感とを持ち合わせていたからだ。

この時、私は、運命と出会った。

$$\begin{array}{c} \text{---} \\ \vdots \\ \vdots \\ \text{---} \end{array}$$

「フツ！ ハツ！」
「アハッ！ アハハハ！」

裂帛の気合と共に振り下ろされる騎士剣を、玩具のような薄いナイフで受け流し、ウォルフガング・シュライバーは無数のナイフを一度に4本、片手で投げ放つ。

飛来する弾剣を、エレオノーレは慌てず冷静にかわして弾いて避けて打ち返す。

吹き乱れる暴風のように暴れ回るシュライバー！ 彼は、正真正銘の化物であつた。

この小さな体のいったいどこに、これほどの膂力があるのだ。エレ

オノーレは打ち合う一撃一撃で手が激しく痺れるのを忌々しく思いつつも、シュライバーの怪物性を認めざるをえない。

そして、エレオノーレの分析はすこぶる正確にシュライバーの本質を見抜いていた。だからこそ　そのシュライバーが唐突にエレオノーレ以外の何者かに怯え、飛びずさったのに驚きを禁じえなかったのだ。

カツ、カツ　軍靴が踵を鳴らす威圧の音。

まるで、満員の狭い個室の中に押し込められた圧迫感が、この空間に充満し、居合わせた者たちは残らず総身を粟立たせて戦慄に総毛立った。

その感覚を遅ればせながらも察知したエレオノーレは、咄嗟に背後を振り返って驚愕した。

「どけ」

「なっ　！」

短く、しかし拒否を許さぬ絶対の命令。

ラインハルト・ハイドリヒ中将。この場の最高階級者。

そして、エレオノーレやアオスブルフが誰よりも先んじて守らねばならない人物でもある。

そんな人物が突如として戦線に介入してきたのだ。エレオノーレは驚き、しかし軍卒としての意識が、ラインハルトが発する暴的なままでの存在感に声を震わせながらも忠言した。

「お、お下がりください中将閣下、危険です！」

この時アオスブルフは、その守るべき立場の人間を、これまでの人生で目にした何よりも【危険なモノ】だと認識していた。してしまっていた。
だからこそ、

「どけと言った」

無造作に、容赦なく薙ぎ振るわれたラインハルトの腕に瞬間的に反応し、エレオノーレを突き飛ばしてその暴力を受け止めることができたのだ。

「グ　ッ！」

己の右腕を盾に見立てて持ち上げ、受け止めた。衝撃を完全に殺しきる防御の構え。

にもかかわらず、アオスブルフは与えられた衝撃に耐え切れず、たたらを踏み、戦慄と共にシュライバーへ迫る黄金の背中を見送るこ
としか出来なかった。

（なんて、重さ……！）

ジグジグと、打撃を受けた腕が痛みと痺れを発している。

ただの一撃。一撃で、腕を持ち上げることさえ困難なほど、ラインハルトはアオスブルフに『敵わない』という確信を抱かせていたのだ。

体ではない。才能でもない。
魂の、規格が違う

アオスブルフという求め続ける者にとって、始めて目にした『頂点』。アオスブルフはその背中に、絶対的な畏怖と畏敬の念。そして生涯無縁であるうと思っていた、『憧れ』の気持ちを植えつけられたのだ。

そして　なお一層の恐怖を感じていたのは、ラインハルトの標的に設定された子犬。ウォルフガング・シュライバーだ。

獣のソレに酷似した本能と直感力を持つがゆえに、シュライバーは決して敵わぬ存在であるラインハルトに恐駆していたのだ。

やげて、完全に硬直していたシュライバーは、眼前にまで迫ったラインハルトに、呆然と声を漏らした。

「あ……」

「どうした狂犬？　なぜ吼えん」

滲む暴力への愉悦。無意識の内に己へ課していた『手加減』を完全に解除された黄金は、怯える狂犬につまらなそうに吐き捨てた。

「う、あ……あ、ひっ」

手が伸びる。

伸ばしながら、ラインハルトはシュライバーの左目が見えていないことに気づく。

「　その目、腫んでいるだろう。ならば要るまい」

「　うあ、うわああッッッ！　うわあああ、あ、がつ、」

我に返った　　というよりは強烈な恐怖に突き動かされたシュライバーが、ナイフでラインハルトに突きかかる。

だが突きかかった手をあっさり見切られた上にナイフを叩き落されるや、またたく間にシュライバーは首を強靱な握力で締め上げられて、言語を絶する恐怖に恐慌を来たし、声なき声で悲鳴を上げた。

上げようとした。

だが、シュライバーの喉を締め上げていたラインハルトはそんなことさえも許さずに、狂犬の膿んだ右目に指を突っ込み、決る。

「……ふん」

「うあっ!!??」

つまらなげに鼻を鳴らし、ラインハルトは持ち上げていたシュライバーを無造作に投げ捨て、シュライバーは塵溜めに突っ込んだ。

「そ、そんな……」

「なんですか、あれは……!」

「うそ……うそよ、こんなの……」

リザが。

ヴァレリアンが。

アンナが。

その様を残らず目撃した者たちが、絶句し、驚愕し、放心する。人間を超えた【人間獣】を、ああもあっさりと圧倒した暴力に、本能的な恐れを抱いたのだ。

知らず、黄金が忍び笑いをこぼす。

くく、クククク……！

「退け！ 下がるんだキルヒアイゼン ツ！」

ラインハルトの歩みが、今度はベアトリスとヴィルヘルムに向いているのを察知したエレオノーレが、焦燥のあまり声を荒げた。だが、ベアトリスがそれに気づく間もなく、ラインハルトは2人の間にたどり着き

「え？ あ、 きゃあつ！？」

羽虫を払うかのような容赦のない拳が、ベアトリスの体を薙いで払い飛ばした。

「な、なんだよテメエは……！」

ザツと眼前にまでやって来たラインハルトに、ヴィルヘルムは震える声で誰何した。

ヴィルヘルムに、先程までの暴虐の気は既がない。ただラインハルトと対峙しただけで根こそぎ氣力を吸われるようで、虚勢を張るのが精一杯だった。

「何者でもない。貴様はなんだ？」

「ああ……？ 俺は……」

お前は何者か？

そんな、あまりに基本的過ぎて、ほとんど考えたことさえない存在^{レイン}証明^{テイル}を問われ、ヴィルヘルムはただ反駁することさえ出来ないことを、この時初めて自覚した。

糾すかのようになおラインハルトは続けた。

「血を好むのか？ それとも忌むのか？ まずは、己の血を顧みよ」

「ガッ!？」

振り抜かれたラインハルトの拳が、ヴィルヘルムの認識を超えた速度で腸に突き刺さり、容易く白貌の殺人鬼を吹っ飛ばす。

「ぐ、お、あ、ぎいあおえっ!」

刻まれる恐怖。植えつけられる畏怖。激痛と恐慌と呆然。それらが緋い交ぜになって、ヴィルヘルムはジワジワと己を締め上げる諸々に、地をのた打ち回りながら自失する。

ふふ……、ふふふ、くくくく、アハハハハハ……ッ!

その様を。

獣は、堪え切れぬ嘲笑を口腔より迸らせ。

眼下でのた打ち回る畜生を蹴るように嗤いながら、胸の奥底から沸き起こる？未知？の悦びに震えていた。

「なんてこと……」

リザ・ブレンナーが啞然と呟く。

「どうやらカタがついたようですが……しかしコレは、助かったと言えるのでしょうか……」

神父が嘆くように嘆息し。

「あれが……ラインハルト・ハイドリヒ……」
「……」

魔女と異端者は、ただ立ち尽くした。

「その2人」

「は　ハッ！」

「な、なんでありませうか、中将閣下」

迸る哄笑が収まり、突然指名されたエレオノーレとベアトリスは声を詰まらせながらもなんとか返答した。

「あちらにいる神父と女2人を、ゲシュタポに連れて行け」

「えっ!？」

「し、しかし閣下、それは……!」

告げられたのは、おおよその件には無関係であると思われる神父とアンナ。そしてリザ。

くだされた指令に、ベアトリスが驚き、エレオノーレが反駁しようと声を上げるが、

「二度言わせるな。今すぐにだ」

断固とした語調に、言葉を飲み込むしかなかった。

自らは軍人。ならば、上官　それも7階級も上の　命令に抗えるはずがない。

「　　っ、かしこまりました。行くぞキルヒアイゼン!」

そのことを承知していたエレオノーレは、あらゆる反論を瞬時に飲み込み、立ち尽くす部下を叱咤するように声を張り上げる。だが、ベアトリスは未熟ゆえの無謀を犯し、倒れ付す白い殺人鬼たちを指し示した。

「あ、で、ですがその、あ、あの2人はどうするのです？ 国家反逆の」

「卿らの知るところではない。私が戻るまで神父たちを拘束している。それから中尉」

「ハッ！ エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ中尉であります！」

なおも言い募ろうとするベアトリスを遮るようにして、エレオノーレは完璧な敬礼と共に張り上げた声で名と階級を名乗った。

余計な口を叩くな馬鹿者！

無言の一瞥でベアトリスの口を強引に閉じさせ、エレオノーレはラインハルトに正対した。

「卿ら2人、異動願いを出しておけ。ゲシュタポに来い」

「っ！」

「そ、そんな……」

「わかったか？ では行け」

「ハッ！」

突然の異動命令に、しかし2人の女性将校たちは拒否できない。できる権限はなく、拒否する気概などラインハルトを前にしては保てるはずもなかった。

逃げ出すように神父たちのもとに駆けはじめたエレオノーレとベア

トリス。それを傍から見ていたカール・クラフトは忍び笑いをこぼしていた。

さて、おそらくは生まれて始めて振るったであろう、手加減の薄い暴力の味はいかがでしたかな？ 中将殿。たとえ貴方が否定しよう、私には見える、感じられる。その魂が、歓喜に打ち震えていることを。

おや？ 酔ってしまわれているのか。無理も無い。なにせ……そこにまだ、立っている男がいるのだから。

含み嗤う水星の目は、黄金の瞳の向かう先 2人の？ 既知？ になり異端者へと転じられた。

【 :アオスブルフ: 】

帝都を騒がせていた殺人鬼は倒された。
エレオノーレでも、ベアトリスでも、ましてや私でもなく。

本来なら守られる立場にあるべき男 ラインハルト・ハイドリヒ
の手によって。

軍人として恥ずべき気持ちは しかし無い。
むしろ殺人鬼に対して同情の念すらあった。

あんな理不尽極まる暴風に晒されたのでは、二本の脚で立っ
ていら

れるはずも無く。
強者としての矜持を持っていただろう2人は、力こそを寄る辺とし
た誇りを根本から叩き折られたはずだ。

いや かぶりを振って、同情の心を捨てる。

誇りを折られたのは犯罪者。死刑が適用されているのが目に見えて
いる凶悪犯だ。

騎士ではない、軍人ではない、同胞でもない。ならば、彼らのこと
なんぞで心を動かすなど愚の骨頂である。

中將がエレオノーレとベアトリスに命じる。

アンナと神父、そしてブレンナーをゲシュタポに連行し拘束してお
くようにと。

その真意は読めずとも、軍人なら従うほか無い。一度は反駁しよう
としたようだが、すぐにその気概は鎮まって、わめくアンナと、従
容として従う神父、ブレンナーを引き連れて、エレオノーレたちは
退場していった。

「……………」

そして 残ったのは私とラインハルト。 それともう1人。存

在感の薄い影絵の如き男。

宣伝相の隠し玉　名は確か、カール・クラフトといったか。

ともかく、私がこれ以上この場に残っておく必要は微塵となく、である以上、私は何か面倒に巻き込まれる前に、速やかに退場するべきだ。

そう判断した。　なにせ、中將の強烈な凝視が　否、カール・クラフトまでもが私を見ているのだから。

本能ではなく、理性が感じた。
理性ではなく、本能が命じた。

逃げる

喰われるぞ

焦燥にも似た思考に突き動かされ、私は中將にのみ敬礼し、逃げ出すようにして踵を返そうとして

「待て」

勘弁してくれ……

呼び止める、玲瓏な男の声。

それに、思わず天を仰ぎたくなりながらも、私は渋々と足を止めた。軍卒である以上、呼び止められたのなら勝手に立ち去ることはできないのだ。

この時ばかりは、軍人である我が身を嘆いた。

「何でありましょう、中将閣下」

「卿は何者だ？」

「ハッ！ 私はアオスブルフ・フォン・シュトライテン大尉であります！」

「そういう意味ではない。アオスブルフという男は【何者】だと、そう問うている」

傍から聞いていれば、頭のおかしい質問に聞こえる。

だが、実際にラインハルトに直面し、その言葉を耳にしている私には笑えない。笑えるはずがなかった。

私は何者か？

はからずも、中将が先の白い青年に投げかけた問でもある。

その問を受けて、しかし私は一瞬も迷わずに即答した。

「私はアオスブルフ・フォン・シュトライテンという一個の男です。それ以外の何者でもなく、ゆえに、私は私であるとしからお答えできません」

「そうか」

確固とした意思をこめての言葉に、ラインハルトは納得したようにうなずいた。

そして　　どういうわけか、ラインハルトの目がこれ以上なく獯猛に輝いているのを、私は見てしまった。

まさか、な。

勘違いであってほしいと、単なる思い違いであってほしいと、儚い願望に縋り付きながら私は身を強張らせ　　次の瞬間。無造作に薙

ぎ払われたラインハルトの右腕を、私は咄嗟に回避していた。

「中将閣下、何を　ッ!？」

こちらになんらかの落ち度があり、それをラインハルトが修正のために放った一撃なら、甘んじて受けねばならない。そして、それならは受ける覚悟はあった。

だが、ラインハルトの放った今の一撃は、修正ではなく、破壊の一撃。完全に私を殺すつもりで放った、掛け値なしの致死攻撃だ。

いきなりのそれに、私は胸の内ですごく舌打ちした。

もしかとは思ってたが、正気を失っているのか……!？

そんな馬鹿な。ラインハルトの目には、確かに理性がある。ならばなぜ、私を殺そうとした!? 殺意が漲る拳を振るった!？

「ほう……」

飛びずさって一撃を回避した私に、ラインハルトが感心したように唸った。

そして　なんと、ラインハルトが構えた。

軍隊式格闘術……ではなく、極めて自然体な戦闘態勢。いつそ惚れするほどの美しさを湛えた、戦闘者たる姿。

白い少年にも、白い青年にも構えなかったラインハルトが構えた姿が　ここまで美しいとは。

その姿に武人として尊敬の念を抱く。
が

「どういつつもりです、中将閣下！ 私に何か落ち度でもありませんか？！」

「いいや。単に暴れ足り無かったのな。少し私の運動に付き合ってくれないか、大尉」

運動？ 運動だと？

それほどまで殺意 否、暴力的なまでの圧迫感を放っておきながら、運動？

……笑わせる。

その言葉。侮辱と受け取った。

だが、だが、これはチャンスでもある。

ついさきほど私に感じさせてくれた『頂点』の力を味わえる貴重なチャンス。

ならば、『頂点』を目指すこの身がそれを逃す手はあるまい。

「 よろしいでしょう。上官の駄々をお諫めするのもまた部下の役目。不肖ながら、私がお相手つかまつりましょう」

ザッ、と脚を開いて持ち上げた両拳を軽く握る。息を整え、沸き起こる恐怖や緊張 すべての感情を封殺し、ただ冷徹な戦術眼のみを頭に残す。肩の力を抜き、瞳孔を広げて視界全体を捕捉する。

時間にして1秒未滿。たったそれだけの時間で、アオスブルフはひとつの戦闘単位へと身を変生し 準備は整った。

「中将閣下。 参ります」

「ああ、来るがいい、大尉」

瞬間でもいい、この渴きを、餓えを癒してくれ　！

それは、おそらく己でも自覚していない？未知？の存在への歓喜。
そしてそれゆえの希望だ。

『もしかすると　もしかするかもしれない』。
そんな、淡い期待。

そして　その期待を知ってか知らずか、アオスブルフという？既
知世界？のイレギュラーは裂帛の気合と共にラインハルトの間合い
へと踏み込んだ

【　：　　：　】

「フ　フッフ、ハハハハハ……！」

そして。

黄金と異端が舞い始めるや、抑えていた笑気が遂に限界を超えて水

星から漏れ出ていた。

顔面に亀裂が奔ったかのような、誰がどう見ても笑っているようにしか見えない、同時に誰がどう見ても笑っているようには見えない、異形の笑み。

悪魔的でさえある微笑を浮かべながら、水星　カール・エルンスト・クラフトは歓喜に打ち震える我が身を抱きながら問を発した。

「お前は何者だ？」

私は知らぬぞ。
知らないのだ。

つまり【未知】。

この狂おしいほどに呪わしいゲッターの中で、突如として現れた怪物人物。

求めてやまなかった宝物のひとつが、いきなり天から降ってきたような心地だ。

忌まわしい幾億の歳月を積み重ね、求め続けたモノが手を伸ばせば届く場所にある。それだけで、全てを薙ぎ払ってでも手に入れたくなる。

だが

「口惜しいかな。私がでしゃばると碌なことが起こらない」

その、呪いとも言うべき宿業に、無限の怨嗟を込めて嘯く。

「お前は何者だ？」

繰り返される疑問。

だが、カール・クラフトはその正体におおよその見当がついていた。

この私と、我が女神と同等の？魂？……性質的には我が女神と同じ【求道型の流出】か。

つまり【特異点】。

この【世界】の【流出者】である我が身に生じた、【既知世界】に囚われぬ魂。

だが　やはり疑問する。

「お前は　ふふふ、」

なんだ？　何者だ？

あのイレギュラーが何者かが分からない。

【流出】の域にある魂の持ち主ならば、マルグリット……我が最愛と同じく【特異点】にその魂を隔離されるはずなのだ。にもかかわらず、なぜ。なぜあの魂はこつも自然に【既知世界】に溶け込んでいる？

なぜ、【流出】という神の領域にあるはずのその魂が　　そうも脆弱なのだ？

そう、あのイレギュラーは弱い。

あまりに弱い。

潜在的には、あるいは総軍に匹敵するかもしれない。

だが足りないのだ。それでは 私に届かない。

「どちらにせよ、お前は面白い」

で、あるならば。

それだけで理由は充分。

「我が円卓に迎えよう。【炎の魂】を持つ勇者よ。そして 叶うならば我が友になってくれないか？」

届くはずの無い声を投げかけながら カール・クラフトは祝福するように、半死半生の態となっている男へと透明な笑みを向けたのだった。

【 :アオスブルフ: 】

数学。語学。経済。政治。歴史に地理に生物学。
それらの学問に15年。一秒の無駄もなく費やし、学び、貪り、糧

とした。

良好な人間関係の構築を平行しておこない、周囲の人間に対する印象構築に同じ時間をかけた。

女を抱いた。遊びではなく、己の経験として得るために。いずれ出会うかもしれない愛する者との行為の中、恥をかかない為に己という個人を高めようとした。

体を鍛えた。無駄なく。

志を持った。緩やかに死んでいく祖国を建て直そうと奮起して、政治家になった。

そして、民心を得て選挙に勝利し、独裁者の謗りを受けながらも改革を進めた。10年かかった。

待っていたのは、信じていた部下からの裏切り。暗殺だった。

祖国がどうなったのかなんて知らない。死んだから。

目が覚めた時、自分が子供になっていたのに驚いた。

そして、どういうわけか自分が外人　アーリア人になっていたのに混乱した。

だが、私はその混乱を脱した時、知ったのだ。周囲の人間がドイツ語を話しているのを。

髑髏の帝国。アドルフ・ヒトラーが夢見た千年帝国、ドイツ第三帝国に生を受けたのだと。

原因は不明。何も分からない。

だが、私は行動せずにはいらなかった。性分だったのだ。何もせずにいるというのは、私の魂の在り方に反する。

体を鍛えた。

頭脳は、既に前世で磨き上げた自負があったのだ。ゆえに、己の持ちえる才覚を全て肉体を鍛え上げ、研ぎ澄ますことにのみ費やしたのだ。

そして、年月を重ねて肉体が少年にまで成長すると士官学校に入学した。

政治家は、もうこりこりだった。

粉骨碎身で改革を推し進めた末に裏切られたのがトラウマになつていたのである。政治に関わるのはもう嫌だったのだ。

だから、政治家ではなく、今度は軍人を志したのだ。

主席卒業。

周囲の者、家の者たちは私を讃えたが、私にとっては当然の結果でしかなかった。

そして実戦。

殺し合い。

思いの他、冷徹な思考を保ったまま死地を潜り抜けた。

やがて、私はこの国の者たちの必死さを知った。知ったからこそ、この国が好きになった。

いずれ滅びる運命を知っていながら、それでも愛してしまったのだ。

この国を守りたい。

そう願ひ、私はさらに己を鍛え上げた。

さらに　さらに、さらに。積み上げて、鍛え上げ、いずれ興る連合軍に負けぬよう、勝てるように己の存在を。そして部下たちを厳しく容赦なく練磨し続けた。

そして至つたのだ。

至つたと思つていた。

【頂点】に。

ヒトの、頂点へ。

だが勝利にはまだ足りないと思つていたから、さらに己を磨き上げてきた。

ああ、白状しよう。

私は慢心していた。

傲慢にも、一対一ならば私に敵う者などいないのだと思い込み、勝手にこの世に絶望しかけていた。

なんて愚かな。なんて無様な。

そして 生まれて初めて私の心に畏怖と畏敬の念を刻み込んだ男の拳が、一切の容赦なく私の横っ面を捉えた時。

私はようやく、これまで己を縛っていた醜き鎖（慢心）から解放された。

私の顔は、おそらく腫れ上がって見るに耐えない醜男のソレに整形されてしまっているだろう。右腕は折れ、肋骨は内臓に刺さってこそいないが折れている。

重傷だ。これ以上続ければ、まず間違いなく軍人としての生命を絶たれることになるに違いない。

構うものか。

むしろ、ここまで追い込まれるまで慢心に囚われていた己の愚劣さには吐き気がする。

ああ、死んでもいい。こんな無様を晒してまで生きていたいとは思わない。

ただ……一矢報いることもせずに斃れるのだけは、絶対に、この意地と誇りと魂に賭けて、絶対にッ！絶対に御免だ　　ッッッ！！

「　目は醒めたか？　大尉」

黄金が問う。

傷ひとつ、打撲傷ひとつなく。

息すら乱していない黄金が、この二度の人生でただの一度も目にしたことのない【頂点】の人間が。目の前に。いる。

目の前にいて、そして、この身が全霊を尽くす瞬間を待ち望んでいる。

「ハッ、ハハハッ

」

自然、私の口から、血泡とともに笑声がこぼれた。

ああ、醒めたとも。醒めましたとも中将閣下。我が親愛にして偉大なお方よ。

故に

シュウ

総身より立ち上る気炎が、アオスブルフの体に纏わりついて発火す

る。

循環する血液が沸騰するマグマのように熱く燃え。『噴火』する闘気を全霊の気迫と共にラインハルト・ハイドリヒへと叩き付けた。

「もはや貴方を上官とは思わない。殺す【つもり】ではなく、確実に【殺す】気で、貴方に挑みましょう。それが礼儀だと、そう弁えておりますので」

「面白い」

笑う黄金。

悪魔的に、その本能を急速に開花させながら　水星が浮かべていたものと同種の笑みを口元に刷いた。

愛すべからざる光の君　メフィストフェレス。
覚醒するには早すぎる、黄金の目覚め。

「気に入った。実に気に入ったぞ大尉。卿を我が友に迎えよう」

讃える黄金。生まれて初めて目にするだろう異能の力を目撃しても、その声に怖れの念は微塵もない。
それでこそ、私を始めて【燃えさせた】男。この程度で怖れられては困る。屈服させ甲斐がない。超え甲斐がない。

ああ、超えてやるぞ中将閣下。
貴方を倒し、必ずや貴方に言わせてやる。

『負けました。貴方が一番です』 と。

黄金は炎を操る異端者に最大の賞賛の念を賜わし、その覇気に自らもまた【全力】を贈ることを決定した。

「 来い」

「ウウウウおおおおおおおおおおおお
ッッ！！！！」

最後の交錯。

交わる黄金と、朱色を纏う魔人。

迸る咆哮を拳に乗せ。

黄金の獣の拳が放たれる。

そして 両者の拳が振り抜かれた。

第7話「未知」（後書き）

黄金の拳は魔人の胴の真ん中を撃ち抜き。
魔人の炎拳は黄金の貌を掠めていった。

勝利は黄金。

敗北は魔人。

長い長い序曲はこれにて閉幕。

運命は始まり、開幕までの閑話が語られる。

次回、閑話「後悔」。お楽しみに！

閑話「後悔」（前書き）

なんかランキングに乗ってしまった。しかも一位。

作者感動！！

ゆえに怒涛の4話連続投稿なり。

閑話「後悔」

閑話
「後悔」

「：ヘルガローゼ：」

1940年、1月の4日。

アオスブルフが鍛え上げた「悪魔」中隊を引き継ぎ、ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤーは大尉に昇格。中隊長に就任した。

前中隊長のアオスブルフ・フォン・シュトライテンはゲシュタポへ異動した。何を思っただったのか。誰よりも彼が忠勇なドイツ軍人だということを知っていたヘルガローゼは疑問する。

「なぜ、あいつは私の前からいなくなった」

愛想をつかされたのだろう、と自問に対して自答する。

軍務の最中でしか言葉を交わさなかったこの数年間。その間も、アオスブルフは変わらず私に話しかけてくれた。その好意に甘えて、あぐらをかいていた。その結果が、コレ。

あいつのいない部隊。

私が補佐するはずだった、尊敬していた、同期の上官。

つまるところ。私は私の愚かさのツケを払うことになったのだ。

アオスブルフと、あの、赤毛の美女。

その2人の関係を知って、アオスブルフが別れたと言っていたのにも関わらず、その事実拘泥して距離を置いていた。それがいったい……どれほどあいつを傷つけていたのか。どれほど場の空気を悪くしていたのか。

「馬鹿な女だ……」

アオスブルフはゲシュタポで少佐に昇進したらしい。

らしい、というのはあいつが私に教えてくれたのではなく、イングヒルトの上官、ジークマイヤー少佐がたまたま知り得た情報を伝えてくれただけだ。

……昇進したということすら、あいつは私に教えようとはしなかった。完全に見放されたのだと、悟った。

今のアオスブルフは、ゲシュタポ長官の側近らしい。栄転だ。

本来なら忌むべき部署の仕事だが、前線では一番の嫌われ者だったあいつにとって、ゲシュタポでの勤務など変わりはあるまい。ただ出世したという事実のみを認識し、これからも国に対して忠義することだけがわかった。

「大尉殿！ 出撃命令が出ました！」

部下の一人が呼びかけてきた。

私はそれに小さくうなずき、私情を全て押し殺して声を張り上げる。

「よし、出撃だ！」「悪魔」ども、私に続けえーっ！」

「了解！」

あいつがいない部隊。

それだけで隠しようのない不安が、私だけでなく部下たちの間にも流れていた。

当然だろう。部下たちは、私ではなくアオスブルフの実力を信頼し、信用し、従ってきたのだから。たとえ嫌っていた上官とはいえ、呪っていた相手とはいえ、その実力だけは疑いようがなかったのだから。

ヘルガローゼだけで何が出来るのか。

そんな、言葉にはしていないが、明確な疑惑の目で私を見る部下たち。

最も危険で過酷な任務を、この女の指揮で切り抜けることが出来るのか。もしや、この戦場を最後に、自分たちは敵の只中で全滅する羽目になるのではないか。

「アオスブルフ、見ている」

負けない。

負けてなるものか。

あいつだって、初めはそんな目で部下たちに見られていた。

所詮は若輩。戦場を知らぬ若造に自分たちを率いる資格と力量

はあるのか？

そんな、露骨な侮り向けられていたのだ。

だが、アオスブルフはそれらを実力だけで薙ぎ払った。

なら、私にも同じことが出来ないはずがない。

アオスブルフと言う英雄の傍に居続けたこの身が、英雄と同じように出来ないわけがない。

だから　私はきつと死なないだろう。

きつと生き残って、私は

「謝らせて欲しい。生きて帰ることができたら、私を抱いてくれ

」

決意を胸に。

決然と前を向く。

そして　不屈の魂を持つ歴戦の兵は、機械仕掛けの愛馬を駆って戦場に突撃していった。

第八話「約束」

第8話

「約束」

よく誤解されるのだが、アオスブルフという男は決して傲慢ではない。

むしろ何事にも真摯に取り組み、そしてそれ故に微塵も驕らず、常に全力で生きているのだ。

その性格は会得した武術の特性にも及ぶ。

？一撃必殺？

そんな傲慢で都合の良いモノなど初めから眼中になく、徹底的に効率のみを求めた実戦的な殺人術だけを会得している。

見栄えなど求めない。武骨で良い。一撃で仕留めようなどと、そんな都合主義は己の人生にとってはジャンル違い。そんなものなど望まない。目指そうと思えない。

仮に、アオスブルフが一撃で敵を打倒できたとすれば、それは単に彼我の戦力差が激しすぎた場合だけであり、実力の近い者同士での戦いになれば、十中八九アオスブルフは時間をかけてじっくりと敵手を料理するだろう。

殺されずに殺す。

優秀な兵士の条件とは、数多くの敵を殺せることではない。単純に殺傷力の大小を問うならば、兵士は航空機から投下される爆弾一発にも劣る。

兵士見習い一人を一人前の軍人に育てるために要する費用を言えば、コストパフォーマンスはあまりにも悪すぎるということになってしまふのだ。だから本当の意味で優秀な兵士の条件とは、かけられた費用を償却せぬままに死なないこと　つまり確実に生きて還つて来るということである。

戦闘より生き残った兵士によって齎される諸々の情報は、次の戦闘の趨勢をも変える可能性がある。

敵の能力。性質。装備。戦術。志気。これらを知っているのと知らないのでは勝算が劇的に変わってくる。現代の戦争は情報戦の段階でほぼ勝敗が決まると言われる所以だ。

だからこそ、生存能力の高い兵士は、それだけで価値があると言える。

その価値観。兵士とは所詮はひとつの戦闘単位に過ぎないという認識が、私が身につける殺人技術を淡泊なものとしている。

だからこそ、私は己の戦力を冷徹に推し量り、そこには誇りも愛着もない。私が身につけた戦闘術など、戦闘行為を効率的に進めるための『道具』でしかないのだ。

だからこそ、その『道具』をより効果的に磨き上げる術を私は心得ていられた。

「スウー……。……。フ　ッ！」

調息し、五臓六腑に新鮮な酸素を送り込み、気力を充溢させる。ふつつつと沸騰する闘気を循環する血液に雑ぜ、気力と闘気が臨界

に達した瞬間、苛烈な剣気を総身より炸裂させた。

比喻でもなんでもなく、周囲に砂塵が舞う。

私を中心に物理的な風が吹いて、中庭の柱に砂利が飛ぶ。

呼吸を吐き出し、裂帛の気合を迸らせながら 両手に構えた騎士
剣を大上段から振り下ろした。

「ハアアツツツ!!」

両断。

否^{いや}。物言わぬ、抵抗出来ぬモノを斬っても意味はない。そんな
ものは実戦には通用し無い。

ならば

「ジャ ツ！」

先手必勝。左半身より入身し、後手に回った敵手が振り下ろしてく
る剣の腹に肘を叩きつけて軌道を逸らし、左肩から体当たりする。
身長187cm、体重80kgの質量がぶつかって堪らずたたらを
踏む敵手へ右手の剣を突き出し心臓を抉らんとした。

だが、敵手もまたツワモノ。咄嗟に左腕を盾に即死を免れるや地面
の砂利を蹴り上げてこちらの目を潰しにかかり、私が反射的に目を
閉じて異物の侵入を防いだ瞬間、敵手は逆襲に転じた。

首筋が灼熱の舌に舐められたかのような錯覚。

研ぎ澄まされた五感が敵手の一手を先読みし、咄嗟に体ごと首を傾
け頸動脈を裂かれるのを阻止し、剣を薙ぎ払って敵手を己の間合い
から引き離す。

目を開ける。

こちらの負傷は、首筋に掠り傷ひとつ。戦闘行動には何の支障もない。

敵手は左腕を損傷。傷の深さから、おそらくは使い物にならないだろう。今後のことを考えずに盾に使えば、左腕は壊死して切り離さなければなくなるのは間違いない。ソレとは別に、出血のことを考えれば、長期戦は不利。間違いなく短期戦を仕掛けてくる。では、こちらの戦術は長期戦だ。敵手が最も嫌がる戦術を採用し、長期戦の構えを選択するのがこちらにとっての最善手。

と、敵手は思い込み勝負を焦った。

不利に追いやられた者は、みな一様に焦りを覚える。これはどんな強者にも言えたことであり、命に関わる負傷をした者は迅速な決着を望んですぐにでも仕掛けてくるのだ。そうでないと、勝負に勝っても死んでしまう可能性が出てくるゆえに。

つまり　それは攻撃手段を単純化させるということでもある。

読みやすい。そこまでくればこちらの勝利は磐石だ。

敵手が攻撃を仕掛けんと体を一瞬だけ緊張させる。その瞬間を狙って私は踏み込んだ。

呼吸を読まれたことに驚愕し、しかしそれでも私の攻撃に対応しようと敵手は防御の構えに移行する。剣を大振りに横一闪。一步下がってこちらの斬撃を回避して敵手は嘲笑した。一闪を避けられた私の体は大きく横に崩れ、背中が見える。敵手はその背中目掛けて必勝を確信した剣を振り下ろした。

瞬間。

私はぐるりと体を捻転させて背中に迫る剣を回避し、かわしざまに捻転させた運動エネルギーを右脚に収束。渾身の右回し蹴りを敵手の右脇に叩きこむ。

肋骨を粉碎され、吐血し、致命的な隙を晒す敵手。それを見逃すことなどせずに、私は敵手の首筋を斬りつけ、頸動脈を切り裂いた。

……… 終幕。

残心し、敵手の最後の悪足掻きに備えるが、それはなかった。確実に死んだことを確認すると、私はゆっくりと息を吐き出して剣を腰に差してある鞘へ納めた。

「 お見事。 流石は少佐」

離れより投げかけられた賞賛の言葉に、乱れた着衣を整えながら振り返った。

声をかけてきたのは、私と同じラインハルト直属の部下であるエレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ大尉。真紅の長髪を頭の後ろで結い、漆黒の軍服で一分の隙もなく鎧われた長身は、さながら宮廷に在る騎士のようだ。

その怜悧な美貌に賞賛の念を載せて、直立した姿勢のまま私に対している。

もう少し楽に崩してもイイと言っても、彼女の厳格な性質は上官に対しては生真面目に接する癖をなくさない。堅苦しいと思う反面、むしろそれが好ましいとも思う。

「 …… まだまだだ。 こんなものでは、足りん」

そんなエレオノーレに、私は苦々しく吐き捨てた。

仮想敵は仮想敵。百万殺しても価値はなく、また成長に行き詰っている私にとってはお遊びに過ぎない。

私が相手にしていた虚像の敵をエレオノーレも視えていたのか、驚嘆したように唸った。

「？アレ？ほどの修練を積んで、なお足りぬと？」

「当然だ。私がハイドリヒ卿の域に辿り着くのはまだ先だな……」

はあ、と陰鬱な気分を溜息に乗せて丸ごと吐き出し、私は空を仰いだ。……忌々しいほど真つ青な空を。

「まさか……少佐は中将閣下を？」

「目指している。当然だろう。憧れのヒトだ」

なにやら驚愕しているような様子のエレオノーレの声音に、私は少し驚きながら返答した。

私にとって、素直に？尊敬？できる実物大の人間は、ラインハルトただ1人のみである。これまでは歴史上の人物の偉業に対してしか抱いていなかったソレを、生きている人間に向ける事が出来たのだ。これ喜び、超えるべき対象として見ないほうがどうかしている。

私が定義する『憧れ』とは。その尊敬する人物を超えるための渴望の呼び名でしかない。

自分でも難儀なものだと思いが、飽くなき上昇志向は私自身にもどうしようもないのだ。

私がエレオノーレの問いに驚いたのは、私はエレオノーレもまた己と同種の人間であると思っていたからだ。ゆえに、その声にラインハルトを？崇拝？ 超えることの出来ない絶対の壁と自らの中で設定している気配を読み取って、驚いたのである。

「 ヴイツテンブルグ。まさかお前、ハイドリヒ卿を超えようと思っていないな？」

「……それは、」

「いや、いい」

今の問がエレオノーレの急所を突いたものだったことを悟り、無理に答える必要はないと力ない反駁の声を遮った。

「どうも私とお前は違う人種だったらしい。勝手に期待して勝手に落胆するのは筋違いというものだ。お前にはお前の価値観があるんだろう」

そう言いつつ、やはり失望の念は隠せなかった。

私がエレオノーレを買っていたのは、その尋常ではない厳格さゆえだ。

他者に厳しく、そして己にはさらに厳しく。人一倍どころか二倍、三倍の鍛錬を積んで、己の才能や家門にあぐらをかかず、常に己を鍛え上げる向上心。そこに私は、私に通じるものを見出していた。だからこそ私はエレオノーレに失望したのだ。

おそらく、エレオノーレは絶対強者を求めていたのだろう。

自分が何をしてでも及ばぬ超人を。自らを？征服？する絶対者を。力づくで己を奪ってくれる最強の男を。

所詮、エレオノーレも女だった、ということだ。

エレオノーレは私の目に侮蔑の色があるのを敏感に察知したのか、顔を朱に染めて睨みつけてきた。

(……図星か)

その反応に、さらに一層、私はエレオノーレに失望した。その反応が図星を突かれた者特有の反応だと知っているからだ。

「で？ 用もなく私の鍛錬に口を挟んだわけではあるまい。何の用だ、ヴィッテンブルグ」

「……ハッ、ハイドリヒ中将閣下が呼びになっております。執務室に少佐をお連れするようにと」
「わかった」

一つづなずき、私はさっさと歩き出した。
一歩後ろに控えるように続いて歩き出すエレオノーレ。

「……なあ、ヴィッテンブルグ」
「なんでしょう、少佐」

余計なお世話かもしれないが。
そう思いつつも、私はエレオノーレに対して顔も向けずに問いかけた。

「ユーゲント時代の私とのやり取り、忘れたのか？」
「」

息を呑むエレオノーレ。私はやはり前を向いたまま、背後を振り向きもせずに、詩を誦んじるように唱えた。

「『貴方を超えてみせる。私が貴方を超えた時、私は貴方に言いいたことがある』　そう、お前は言ったな？　そして私はこう言った」

「『なら、私はお前の目標であり続けるために、常に上を目指し続けよう。お前が歩みを止めたのなら、一生私に追いつき追い越すことなど叶わない』……」

ポツリと、エレオノーレがこぼす。

よく覚えているじゃないか、と私は微笑した。

「今のお前はどうか？　現状の己に満足しているのか？　私は満足していない。『まだだ、まだ私はこんなものではない』。そんなふうに己を鍛え、育んでいる。私はまだ成長を諦めていないんだ」

誇るように。

己の在り方と魂だけを誇るように。

圧倒的自負を声音に載せて、私は断言した。

「まだだ、まだ上がある。なら登るしかあるまい。上があると知ってしまったのだから。」

「……お前は？　ハイドリヒ卿という『頂点』を知って、尊敬の念を、憧れを抱いたところまではいいい。だがそこで止まったのか？

なぜだ？　なぜ止まった？　私はまだ登っているぞ。『頂点』

を目指して。お前との約束を守って登り続けている。……私を超えるのではないのか？　私に言いたいことがあるんじゃないのか？　少なくとも、今のお前は私を超える事は絶対に出来ない。いいか、絶対にだ」

「私は……」

忘れかけていた？熱？が胸の内に蘇ったのか、その？熱？に喘ぎにも似た苦渋の声をエレオノーレは漏らした。

中庭からラインハルトの執務室は近い。

言いたい事は山ほどあったが、時間がないから後一つ。出来の悪い後輩に、私は小さく囁きかけた。

「満足していいのは、死ぬ時だけだと教えただろう」

「
」

沈黙したエレオノーレを一瞥し、私はハイドリヒ卿の執務室の入り口をノックした。

「アオスブルフ・フォン・シュトライテン少佐であります！」
『入れ』

玲瓏な、腹の底まで響く美声。魔力すら込められていそうな、圧倒的威厳に満ちた王の声。

その声を耳にしただけで、私に3年前の暴虐の夜を思い起こさせる。怖ろしさと誇らしさで背筋が震える。

ドアを開け、敬礼をした後に入室し、ラインハルトという史上最大の傑物には不釣り合いな質素な執務室を視界に納めた。

執務室の最奥。その中心に1人の男が座っていた。

ただそこに在るだけで尋常ではない存在感と魔的なまでの圧倒的なカリスマ。この髑髏の帝国に在って尚、その辣腕ぶりと冷酷さを畏れられている、髑髏の貴公子。黒太子。

2年前より伸ばし始めた、豪華な黄金の長髪。さながら獅子の

鬘のようなそれと同じ、金色の瞳。奇跡的なまでに整った「人体の黄金律」とまで讃えられるほどの美貌。そして……2年前のあの時、私によって付けられた、火傷の跡のような一文字の傷跡が左目の少し下を走っている。

「ご苦労だった。大尉は下がれ」
「ハッ！」

ラインハルトは軽く手を上げてエレオノーレをねぎらい、退出を促す。

機敏な仕草で敬礼し、エレオノーレは私とのやり取りを一切感じさぬ、平常そのものの調子で退出していった。

「ハイドリヒ卿。いったい何用です」

「いや、用があるのは私ではない。カールが卿に話があるそうだ」

ラインハルト・ハイドリヒはアオスブルフ・シュトライテンを『友』として遇してくれているが、私にとっては友である前に尊敬する上官である。

ゆえに最低限の礼節は弁え、しかし無用な挨拶は省き、単刀直入に用件を訊ねるとラインハルトはもう1人の『友』の名を挙げて、傍らを指し示した。

そちらを胡乱げに見やる。

するといつの間にか……いや、初めからそこに居たのであろう存在の薄い男が私に微笑みかけていた。

この私に微塵も気配を感じさせないほど『武』に通じたようには見えないが、得体の知れなさで言えばラインハルトにも匹敵する怪人物　カール・エルンスト・クラフトは、何とも言えない気色悪い笑みを口元に刷いていた。

「クラフトが？」

私の記憶では、2年前のラインハルトが毛嫌いしていたはずの人物であり、宣伝相の隠し玉と呼ばれていた、胡散臭い印象の男だ。そしてどういうわけか私の許可もなく私のことを『友』と呼ぶ、妙に馴れ馴れしい奴でもある。

だがまあ、その妙に芝居かった口調と仕草さえなかったら嫌いな人種ではない。別に好きでもないが。

「どういうことだクラフト。私を呼び出すとは何様のつもりだ。しかもハイドリヒ卿の名前を使うとは」

「いやいや、仮に私が呼び出しても応えてはくれないだろう？ 少佐殿は」

「当然だ。貴様の相手をしていられるほど私は暇ではない。さっさと宣伝相のもとに帰れ」

好きでも嫌いでもない人間は毒にも薬にもなりはしない。私の信じる持論の一つだ。

だからこそ邪険に扱ったのだが、クラフトは私の吐いた言葉をいちいち吟味するようにうなずきながら、心から楽しそうに囁いた。

「相変わらずの毒舌だ。しかし私はこの『普通ではない』面子での、あたかも『普通の友人』同士のように見える会話がなぜか楽しい。貴方はどうだ？ 楽しく思ってくれていたら嬉しいよ」

「……意味がわからんことを……」

気色悪いな本格的に。こちらの言葉を噛み締めるような態度。まるで変質者のようではないか。

不快げに私は眉をひそめつつ、クラフトの科白を糾した。

「そもそも私は貴様と友人になった覚えはないが？　せいぜい知人といったぐらいだぞ、貴様は。友人とはなクラフト。互いが互いを認め合い尊敬し、成長を促して、精神的安息を与えてやれる者のことだ。そういった意味で、貴様が私の糧になってくれているとは思えんぞ」

「なるほど。しかし私にとって貴方は『精神的安息を与えてくれる者』に該当するが？」

「感性を疑うな。私とのやり取りのどこに『安息』を感じる要素がある。率直に言おう。頭は大丈夫か？」

「貴方と話しているのが面白い。こうして貴方の一つ一つの仕草を目にするだけで心が癒される心地だ。貴方が生きているだけで、貴方がそこい居るだけで、私は貴方という全ての存在に感謝したい。たとえその気持ちが一方向通行でも。感謝していると言う気持ちだけは知ってもらいたい」

「私もだ。卿には感謝しているぞ、アオスブルフ」

「変態のクラフトはともかく、ハイドリヒ卿もですか？」

クラフトのアレな発言にちょっと引きつつ、なぜかクラフトと意見を同じくしたラインハルトに私は眉をしかめた。

……正直、クラフトの今の台詞は色々な意味でアウトな気がしないでもなかった。

「卿は『既知感』というものを知っているか？」

ラインハルトが忌々しいものを語るような語調で問いかけてくるのに、私は首をかしげた。

「既知感……デジャヴというのですか」

「そうだ。何もかもを知ってしまったという錯覚。あるいは実感。 どのような美酒を飲もうと。どのような美女を抱こうと。どのような音楽を聴こうと。既にそれらは知っている範疇。経験の中に存在する過ぎ去った残滓に過ぎない」

ラインハルトが嘯き、それを引き継ぐようにしてクラフトが両手を広げ、舞台俳優のように芝居かった口調で語った。

「人は未知を体験せずして生きられない。繰り返すということがいに苦痛であることか。なぜなら人の人生の意義とは、『未知』を知りそれを『既知』へと変えていく作業こそが本質であるべきなのだ」

「 だというのに『未知』を知らず、知っていることばかりの世界でどうして生きているなどと言えよう。どうして己が本当に存在していることを実感できるのか。生きてはいないのだから死ぬことも出来ない。始まりが用意されていない以上、終わりを迎えることすらも出来ない」

「地獄…… ああ、地獄だ。これほどの地獄は他に存在しないだろう」

ラインハルトとクラフトは、舞台を同じくする役者のような口ぶりで交互に謳い上げ、私に語った。

つまり、この二人は『生きている実感がない』と言っている。なにもかもが面白くないと言っている。

私には理解できないだろうが、知っていて欲しい。だから語っているといった風情だ。

「 まあ、ハイドリヒ卿とクラフトが妬ましいほど仲良しなのはわかった。だがそれで？ 結局クラフトは何が言いたい」

ああ、私には理解できないよ。だから理解できない別次元の視点を

語られてもつまらないし興味も持てない。そんなもの、私には一切縁のないモノだ。

だから私はうんざりしたように問いかけると、クラフトは私をハッキリと指差した。まるで私のほうが異常なのだとでも言いたげに。

「だが　なぜか貴方は私たちの『既知』に入っていない。新鮮なのだ。未知。貴方という存在に私たちは『既知感』を感じない」

「卿と話している。卿と対している。これだけで『生きている』と実感できる」

「この歓喜。きっと貴方にはわからないだろうが、それでも。それでも感謝を捧げよう。私たちは貴方という存在に感謝しているのだと」

「はっ……突然何を語りだすかと思えば。……ハイドリヒ卿もハイドリヒ卿です。なぜにこんなヤツバラを傍に置いているのです。私が言うのもあれですが、友は選ぶべきでしょう」

傍から見ればクラフトの言動は狂人のそれにしか思えない。それを言うならラインハルトもだが、ラインハルトはどこか悪ノリしているような稚気を感じられたから許容できた。

この3年間繰り返し返した心の底からの忠言に、しかしラインハルトは応えない。

まあ、はなから無駄な諫言だとは思っていたが。

「……ハイドリヒ卿。どうやらクラフトの用とやらは済んだようなので、これで失礼させていただきます」

クラフトの妄言の相手をするのは疲れる。ラインハルトが悪ノリしてきたのなら尚更だ。

ゆえにこそ、こんな下らないことを聞かせるためだけに呼び出したクラフトとラインハルトに、私は僅かながら怒りを覚えた。

敢えて言おう。私は無駄が嫌いだ。

それと、1人で勝手に喋り続ける男は、もつと嫌いだ。

……前言を撤回しよう。

私はカール・エルンスト・クラフトが嫌いだ。

クラフトという道化師が疎ましく、ついでに言えば前世で感じたことのある『ニート』っぽい雰囲気嫌悪を感じてもいた。

引きとめようとしなかったのを了承と受け取り、私はラインハルトにのみ敬礼を送って執務室から退出したのだった。

「ふ、怒らせてしまったな、カール」

ラインハルトは完璧な敬礼とともに退出していく友を見送り、しばらくの沈黙の中、先程のやり取りを頭の中で反芻しながら笑った。

「ええ。彼にとっては不愉快な一幕ではあったでしょう。しかし、もしも彼に言えば怒られてしまうのでしょうか、私は彼を怒らせるのが楽しくてしょうがない」

「まったく。悪趣味だぞ」

呆れたように言いつつ、ラインハルトとてアオスブルフの一挙一動に一々感動している身である。クラフトの台詞を責めることなど出来ようはずもない。

「ところでカール。なぜアオスブルフを【騎士団】に勧誘しない？」

笑いをおさめたラインハルトが、不意に純粋な疑問を表に現し、盟友に問いかけた。

「私とていつ勧誘するか迷っているのですよ、獣殿。どうにも私は英雄殿との関係を気に入ってしまっているようだ。それを変化させるのにほんの少し躊躇いを覚えてしまっている」

「ふ　だが、彼は我々の友だ。それに？未知？である彼を騎士団に加えれば、それだけで面白くなりそうだと思うのだがな」

「然り。されど果たして彼が騎士団に入団してくれるかどうか……」

？既知感？を感じぬ盟友とのやりとりに、黄金と水星は子供のような笑みを口元に刷きながら真剣に迷っていた。

アオスブルフ・フォン・シュトライテン。

アレは正真正銘の異物。

それを騎士団に勧誘するのはいい。だが彼が入団してくれたとして、どの座に彼を据えるべきだ？ 彼の性質を鑑みるに、相応しい座は

否、そもそも入団してくれるかどうか。

なぜなら彼は、超常現象の類いを忌避している傾向がある。己が異能を誇るのではなく嫌悪していることからそれが窺えた。

「勧誘は時期を見てからにしましょう。私としても彼には騎士団に入ってほしい。なんとすれば策を弄して彼の意志を曲げねばなりませんまい」

「友に対するその不義は、いずれ謝罪せねばな」

ラインハルトの言葉にクラフトもまたうなずいた。

「彼に相応しいのは天秤の七位か、あるいは獲得のルーンを持つ十位か。……彼に相応しい聖遺物は、私が用意しておきましょう」

「ほう、カールが？」

「臍肩になるでしょうが、騎士団の者が不満を言う事はありませんまい。なにせ、私は彼らに嫌われてしまっている」

「ふ、日頃のおこないが返ってきた結果だろうに」

ラインハルトは友の去って行った後ろ姿を思い出しながら、最後にポツリと嘯いた。

「次に会える時を楽しみにしておくよ、友よ」

第九話「黄昏」

「 第9話
黄昏」

「 今、何と言った……?」
「で、ですから」

秘密警察実行部隊少佐として任務を果たし、本部に帰還しようと護送車の助手席に乗り込もうとしていると、不意に慌てたようにやって来た部下が私に報せを届けた。

「だから、何と言ったと聞いている !!!」
「ひ……?!」

激昂する私に、部下は完全に委縮してしまっただが、今の私にはそれを気にかけるだけの余裕がなくて 私から余裕を奪い去った呪文の正体を知ろうと、躍起になって部下に迫った。

「言え! 早く!! 早く言えええええええ!!!!」
「ひいいいつ?!?! で、ですからあ、長官閣下が、 “暗殺” され」
「あ 」

襟を掴んでいた手を離し、よろよろと足をもつれさせて、倒れそうになる。

ただど部下の前でそんな無様を晒す事も出来なくて、アオスブルフはなんとか護送車の車体に手を当てて、倒れるのを防いだ。

暗殺？

死んだ、のか……？

あの、あのラインハルト・ハイドリヒが……

暗殺なんて、そんな、つまらない死に方を……？

「少佐、少佐！」

「あ、ああ、すまん。悪い、少し1人にしてくれ」

気が付けば、アオスブルフは秘密警察の本部に戻ってきており、勤務時間を終えて我が家に帰宅する段になっていた。

呆然自失していた私に声をかけてきた部下に、私はなんとか返事を返し、よろよろと己の執務室に戻って、椅子に腰を落とした。

「
頭が真っ白になっていた。

何も考える事が出来ない。

何かをする気にもならない。

「
ハイドリヒ卿が、死んだ？」

信じ、られない。

あの、圧倒的存在感と能力とを兼ね備えた、英雄が？

あの、アオスブルフがただ一人尊敬した、唯一無二の“友”が……

無くなった？ この世のどこからも消え失せたのか？

「……………」

まるで魂の抜けた人形のようなだった。

アオスブルフという男は、強烈に信奉していた、憧れ目指していた男があつさりと死んでしまった事に、ただ呆然とし

やがて、ゆらりと糸が切れた人形のように倒れ伏しかけ

「……………ふう」

糸の助けではなく、己の力だけで再起した。

息を吐く。かつて、両親を亡くした時以上の衝撃と悲しみを受けたが、それでもアオスブルフという男の心は折れなかった。

「ハイドリヒ卿……………さぞ無念だったろうな……………」

そう呟き、いや、と苦笑しながら訂正した。

「ふ、あの方に無念という思いは無縁か。……………しっかりしろアオスブルフ。お前は、ラインハルトに仕える者ではなく、国に仕える軍人だろうが」

言い聞かせる。己に。己の存在意義を確かめるように呟く。

「流石に、堪えた……………。……………おい、私は帰る。車を用意しろ」
「ハッ！」

頭を振って、アオスブルフはなんとか体に渴を入れて我が家に帰宅するべく部下に声をかけ、車を用意させるのだった。

数日後、虚無感を絶ち切り、精神が回復したアオスブルフのもとに辞令が届いた。

『アオスブルフ・フォン・シュトライテン秘密警察少佐を中佐に任命する。武装親衛隊第二師団、ダス・ライヒの大隊長として異動せよ。大隊副官はエレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ少佐である。奮起せよ同志中佐』

アオスブルフの前世の知識は、近い内に引き起こされる戦争
『プロホロフカの戦い』についても網羅していた。

『プロホロフカの戦い』 それは、1943年7月に起こった戦争である。

歴史上もっとも大きな戦車戦の一つに数えられ、そして。この戦争を契機に東部戦線での主導権を失い、アオスブルフの愛する国ドイツは守勢に回ることになる。

それ以降は劣勢を挽回することはなく、ゆるやかに45年の滅びまで歩んでゆく事となる。

「流石に、今回ばかりは死ぬかもしれんな……」

ふん、とつまらなさそうに鼻を鳴らして、アオスブルフは口の中で独語する。

「（プロホロフカでの戦争は、ソビエト赤軍、ドイツ両軍に大きな損害が出たという。我が祖国は幾つかの局地的勝利を得る事が出来たが、損害が大き過ぎる。……しかも、困ったことに私が指揮するのは戦車部隊。……指揮した経験はあまりないのだがな）」

これまでアオスブルフが激戦を潜り抜けてこられたのは、己自身の練度と悪運、そして得意な戦術パターンを戦場に適用できていたか

らだ。

アオスブルフの必勝戦術は、機動攪乱、敵軍呐喊にある。

戦車のような鈍重な部隊には適正が薄い。いや、そこいらの連中には劣らぬ指揮官ぶりは見せられるが、一流の戦車部隊の指揮官の中では下位に位置するだろう。

正直、私は副官のエレオノーレに指揮を丸投げしたい気分だ。

戦車部隊の扱いに長けたエレオノーレなら、安心できるというもの。なのに、なぜ私がエレオノーレに指揮を託そうだなんて考えられないのか。それは

「中佐……」

執務机に着いて部隊編成を確認し、脳内で次の戦争のシミュレートをしていると、傍らに控えていた赤毛長身の美女　エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ少佐が声をかけてきた。

「なんだ、ヴィッテンブルグ」

「申し上げにくいのですが、隊の訓練をしなくてもよろしいのですか」

「せんでいい。今、部下たちに無用な訓練を課して疲れさせてみる、戦争に影響が出るだろうが。……そんなことがわからんお前ではあるまいに」

「……………申し訳ありません」

エレオノーレの顔から覇気が消えていた。だから　私はこの副官に頼ろうとは思えないのだ。

普段の彼女なら口にするはずもない愚問である。切れ者のエレオノーレのらしくない。

私は、深々と嘆息した。

「……陰気臭いなヴィッテンブルグ。今のお前に傍に居られると鬱陶しくてかなわん。シャンとしろ、シャンと！」

「ハッ」

一喝する。だが表面上はいつもの厳格な顔つきだが、エレオノーレの目に覇気が宿らない。

原因は、わかる。分かり過ぎるほど分かる。

「ヴィッテンブルグ……ハイドリヒ卿が亡くなれたことがシヨックなのは分かるが、切り替える。そうできなければ死ぬぞ」

「……ハッ。申し訳ありません」

「……。……暇を遣る、今日はもう帰れ」

「そ、それは……！」

「命令だ。帰れ」

「……………ヤヴォール了解」

消沈したまま私の執務室を後にするエレオノーレを見送るでもなく、私はこれからの事を思っただけ、深く深く嘆息した。

「……………遺書でも書いておくかな」

戦死した時のことを考えて。

第10話「儂きかな千年帝国」（前書き）

わーい、エレ姐さんが大人気！

それはともかく、みなさまにお訊きたい事が。

読者のに、アオスブルフとヘルガローゼってどう思います？

感想にアオスブルフとヘルガローゼに関するものがなくて、好感を持たれているのかいないのかわからず、ちょっと困惑気味です。教えてくれたら嬉しいなあ、と作者は感想をお願いしたいです。

第10話「儂きかな千年帝国」

第10話

「儂きかな千年帝国」

各戦車は誘導手のもと、小隊ごとに疾走し、砂埃を上げていた。

「……准尉、進路右45度に修正。急げよ」

アオスブルフは照準機に目を当てながらインコムを通して部下に命じた。

その直後にアオスブルフの乗る戦車は右に旋回を始める。その数秒後に、ソビエト赤軍の戦車部隊の主砲が一斉に火を噴いた。

だが、旋回中のアオスブルフの戦車には命中せず、手前の地面に着弾して煙を立てたのみだ。

撃ち返すアオスブルフの戦車。見事命中。

一両撃破、よくやったと部下を労いながら、いたって平静を保ったままアオスブルフは1人ごちた。

「照準機が僅かにズレているな。仕方ない、ズレているのならそうと心得て撃つまでの事だ」

再びの一斉砲撃。まるで敵手の動きを読んでいるかのようにアオスブルフは指示を的確に下し、移動すると車体を掠めるようにして砲弾が飛んでいった。

インコム越しに後方の車長　大尉が声を上げた。

「中佐、このまま撃ち合ってたらジリ貧だ。どうする！」

「わかっている。焦れるな馬鹿者。目の前の敵に向けて砲撃だ！
その後包囲010に向けて進路を取れ。距離を埋めるぞ！」

「了解！^{ヤウオール}　愛してるぞ兄弟！！」

後方4番車長の大尉が叫び、それにアオスブルフは失笑する。

俺も愛してるよ。馬鹿野郎が。

ここは死線だ。誰も彼もが死んでいく。みんながみんな死んでいく。死骸を晒さず。砲弾と爆発に吞まれて燃やされていた。

同時にアオスブルフと大尉の戦車が砲撃し、その直後に一気に距離を詰めるべく最大戦速で赤軍の戦車4両に向けて突撃を始めた。

アオスブルフの砲撃は外れたが大尉の砲撃が命中し、4両のうち1両を撃破。

「ふん、大尉、残りを叩くぞ」

「了解だ。同時砲撃、頼むぞ！」

「4、3、2、1……発射しろ！」

発射された4発の砲弾の弾道は正確で、四発とも見事に命中。

戦果に満足する暇もなく、煙の向こう側から1両の砲弾が大尉の戦車を直撃した。

両方がほぼ同時に爆散する。

「……さようなら戦友。いずれヴァルハラで会おう。ミハイル。我

が兄弟」

瞑目する暇などなく、アオスブルフは指示を発した。

「准尉！ 撃たれるぞ、左25度修正急げ！！」

赤軍の戦車の砲塔がこちらに向いているのを発見し、部下に怒鳴る。

「了解、左25度修正！」

復唱の声を聞き流し、アオスブルフは敵戦車を照準機に捕捉しつつ砲撃しようとして

「チツ、准尉、コイツから降りるぞ！ 詰んだ！！」

進行方向に地面の窪みがあるのを見つけたのだ。この状況は詰んだ。手の打ちようがない。

素早く決断してアオスブルフは戦車から飛び出たが、准尉は間に合わず、窪みに落ちて敵戦車の砲撃を浴びて戦車と諸共に爆散した。

爆炎がアオスブルフの全身を舐めるが、熱くない。火傷一つ負わぬ。

アオスブルフの異能 『バイロキネシス念発火能力』の影響 普段はそれに忌々しい思いを抱くところだが、今度ばかりは感謝した。

背中に激痛。

無視し。

アオスブルフは駆けだした。

「チツ……これだから戦車は……！」

性に合わない。鈍重で、思うように動いてくれないから苛々する。誰だ、私を戦車部隊に回したのは。

胸の中でぼやきながら、アオスブルフは小銃を撃ち放ち、敵兵を射殺しながら後退する。味方と合流せねばマズイ。

「中佐　　！！」

己を呼ぶ声を聞きつけて、アオスブルフは咄嗟に駆けながら爆音に紛れながらも届いたその声の方角に顔を向ける。

「ヴィッテンブルグか！」

赤軍の戦車の傍にいる敵歩兵を撃ち殺し、戦車の脇を駆け抜けながらエレオノーレに合流した。

「ご無事ですか、中佐！」

「ああ、　　まったく、戦車部隊の指揮官としてはお前が上だよ」

「そんなことは　　」

無駄口を叩く暇はないと知っていながら、つい弱音にも似た発言をしてしまった己を戒める。アオスブルフはかぶりを振った。

「さて　　悪いが俺は戦車には乗らん。お前がこの大隊の指揮を執れ」

「なっ！？　　なぜですか？！」

「情けない話、私は限界なんだよ」

エレオノーレに背を向けて、背中を見せる。

そこには、爆散した戦車の破片が、深々と突き刺さっていた。

「

」

「見ての通り、致命傷だ。私は死ぬ。死ぬから、副官のお前が指揮を執るのは当然　ブォッ！」

肺腑より競り上がって来た血を吐き出し、アオスブルフは膝をついた。

「中佐！？」

「おっと　」

駆けよって来るエレオノーレの腕を強引に掴み、胸の中に抱き締めた。

「な、なにを　」

するのです。何故か赤面しながらそう言おうとするエレオノーレを遮るように、爆発する炎が2人を包み込んだ。アオスブルフはもろに爆炎を浴びたが、アオスブルフの護りを受けたエレオノーレは無傷　火傷一つない。

「戦車から降りるなよ馬鹿者が。　ほら、行けヴィッテンブルグ。お前が今から大隊長だ」

致命傷を負っているにも拘らず、平常時と変わらぬ語調と態度で、エレオノーレにアオスブルフは命じた。

これが火事場の馬鹿力と言う奴なのだろうか？

本来なら既に死んでいないとおかしい人間であるアオスブルフは、

笑いだしたくなるほどいつも通りなのだ。

「あ、あ……」

「行け！　？エレオノーレ？！！」

胸の中心を殴りつけて、アオスブルフは一喝した。

鉄拳のごとき重いそれがエレオノーレを？軍人？に引き戻す。

「は、ハッ　！！　エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ少

佐！　中佐の指揮権を引き継ぎ大隊長として復帰します！！」

「　　よろしい。それでこそだ」

駆けだすエレオノーレを見送って、アオスブルフは満足げに頷いた。

プロホロフカの戦い　　ドイツ第三帝国の命運を決定づけたこの
戦争で、ナチスドイツは幾人もの英雄を失った。

アオスブルフ・フォン・シュトライテンSS中佐。戦死。二階級特進で准将に昇格した。

第10話「儂きかな千年帝国」（後書き）

実は。

作者は現在第2部の中盤まで書き終わっているのですが。

第3部についてまったく考えていません。

今の内に第3部のルートを決めたいのですが、どうしたらいいと思います？

1・魔帆良学園ルート

第二部の主人公が主な視点となります。

ぬらりひょんとか正義の味方もどきを、後に現れるアオスブルフさんと一緒にボッコボコにする。ついでに原作キャラが沢山死んで、現実の厳しさを教えてあげるというルート。

2・川神学園ルート

第一部主人公、つまりアオスブルフ視点となります。

第二部主人公はあんまり出てくることは無いルート。

3・ディエスルート。

学園モノなんか知るか！ 早く練炭出して！ エレオノーレ出してえ！

第一部主人公と第二部主人公がセットで出てきます。

第三部にも、どのルートにせよ影の薄いオリ主がいますが、1, 2, 3のどれかを感想で選択し、そのルートでは誰をヒロインにしたらいいか、意見をいただきたいです。お願い、優柔不断な作者を助けて！

閑話「再燃する紅蓮」

閑話

「再燃する紅蓮」

「ハイドリヒ中将閣下

」

生き残った。

生き残ってしまった。

憧れていた人が死んで。

主と仰いだ人が死んで。

エレオノーレは恥知らずにも生き残ってしまった。

死に場所と定めていた筈の戦場で死ぬ事を赦されず、生き残ってしまったのだ。

エレオノーレは覇気を消失していた。

戦争が終わって、敗走して、兵舎に籠って。

憧れを失い、活力を失い、軍人としての己を見失った。

「シュトライトン卿……………」

憧れの人。

ユーゲント時代に最も敬愛し、いつかは並び立ちたいと願った人も、死んでしまった。

己が腑抜けていたからだ。

ラインハルト・ハイドリヒという輝きを失って自失し、切り替える事が出来ずに戦場に出て、あの人の補佐をしなければならなかったのに、自分の事だけで手いっぱい。挙句、援護する事さえできずにアオスブルフという憧れを失ってしまった。

「なぜ」

なぜ死んでしまわれたのです。

中将閣下。

シュトライトン卿。

なぜ私を置いて、みんないなくなる。

「私は」

どうすればいい？

「私は」

なぜ。こんなに苦しい？

「私は」

吐き気がする。

腹の中の何もかもを吐きだしたくて、エレオノーレは苦悶した。

「ふん。アオスブルフの言っていたとおりだったか」

「ッ
」

不意に、エレオノーレは自室に入り込んでいた人物に遅ればせながら気づいて、咄嗟に跳ね起きていた。

「貴様は……」

賊か？

そう問おうとして、エレオノーレはその人影　女に見覚えがある事に気づいた。

黒髪に黒目の伶俐な美女だった。

身につけているのは軍服ではなく、貴族の令嬢が着ているようなドレスで、その女は子供を孕んでいるのか、僅かに腹が膨らんでいた。

「ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤーSS大尉だ。貴様の一期上の先輩だぞ。私の顔を忘れたのか？　ヴィッテンブルグ」

「リーゼスクレイヤー大尉？　……私は今はもう少佐だ。そのような口の利き方を　」

「とつくに軍から除籍しているから、？元？がつく。軍属でないから敬語を使ったり使われたりする覚えはない」

あっさりと言い捨て、ヘルガローゼは久しぶりの再会を祝うふうでもなく、つかつかとエレオノーレに歩み寄って来た。

なんのつもりだ、とエレオノーレが疑問するより早く。

ガンッ！！

無造作に振り抜かれたヘルガローゼの拳が、なんの手加減もなくエレオノーレの頬を打ち抜いていた。

「ガッ?!」

「……やれやれ。現役の軍人が、妊婦の拳さえ捌けないのか。呆れたな」

強烈な衝撃だった。

訳も分からず吹き飛び、壁にぶつかってなんとか倒れるのを堪えたエレオノーレはヘルガローゼを睨みつけた。

「なんのつもりだ、リーゼスクレイヤー！」

「アオスブルフ」

「ツツツ!!!??」

「彼の遺書を私は彼の部下から渡された。それを読んだら、こんなことが書かれていた。『部下が腑抜けていたら渴を入れてくれ』と。いわば今のはアオスブルフからの修正だと思え。か弱いメス犬が」

口端から血が滲む。

だが、ヘルガローゼが口にした台詞のほうがよほど衝撃的で。

エレオノーレは愕然とした。

「そしてこう書いていた。『立ち直るまで殴り続ける。なんなら顔

の形が変わるまで整形してやるといい』とな」
「グッ、」

さらに、一撃。

反対の頬にヘルガローゼの拳が突き刺さり、エレオノーレは呻きながらよろめいた。

「情けないな、ヴィッテンブルグ」

「な、んだと……？」

「尊敬していた上司を失い、腑抜けていたせいでアオスブルフを死なせ、あまつさえ幾人かの部下も失っているにもかかわらず、おめおめと生き恥を晒している。憎いよ私は。私のアオスブルフを死なせた貴様が！」

「……………」

「私はアオスブルフの子供を孕んでいる」

「ッ！？」

その告白に、エレオノーレは驚愕して　　言い知れぬ激情が心に点った。

それは、嫉妬とでも言うべき黒い感情だった。

「悔しいか？ 羨ましいか？ アイツに抱かれた私が。アイツの子供を孕んでいる私が。だから私の方が貴様より悲しいし悔しいしアイツを死なせた全てが憎い！！　今すぐにも軍に戻って敵を殺し尽くしてやりたい　……………」

ダン！　とヘルガローゼは拳を壁に叩きつけ、憎悪の炎が宿る昏い眼差しで、エレオノーレを真っ向から見据えた。

「だが、私は死ぬわけにはいかない。殺されるわけにはいかない。

生き続けなさいといけない。アイツの子供が私の中にいるんだ、死ぬわけにはいかない死ぬわけにはいかない死ぬわけにはいかない

ああ。だから、私は、アイツに想われている貴様が殺してやりたいほど憎い」

「私が、中佐に……？」

想われていた？

それは、いつたい、どういう……

「私がアオスブルフの子供を孕んでいるのは、私が頼みこんだからだよ。抱いてくれと。お前の女にして欲しいと。もう何も責めないし文句も言わないしなんでも言う事を聞くから抱いてくれと。恥知らずにも頭を下げて。アオスブルフは私を抱いてくれた。子供を与えてくれた。代わりに、軍を抜けると。戦争に関わるなど。家の力を使ってなんとしてもベルリンを離れると言われた。そして、言っていたよ、アイツは。ヴィッテンブルグ、お前という部下を持つて幸せだと。誇らしいと。同じ人種の奴と出会えたと喜んでいた」

「あ
」

『どうも私とお前は違う人種だったらしい。勝手に期待して勝手に落胆するのは筋違いというものだ。お前にはお前の価値観があるんだろっ』

あの時の、言葉は。

あの失望は。

そういう意味だったのか。

ヘルガローゼは侮蔑も露わに吐き捨てた。

「だが、あのアオスブルフでさえ貴様という人間を見誤っていたようだな」

「なんだと……？」

「気に障ったか？ 一人前に。だが貴様に怒る権利は無い。アイツの期待を裏切り、アイツの想いを裏切り、軍人としての己さえ見失っている貴様には」

「……………」

「……アオスブルフ、こんな女のどこがよかったんだ」

失望の吐息。そして、最後はぺちりと撫でるような平手打ちがエレオノーレの頬を打って、ヘルガローゼは去って行った。

その一発は、先の2発よりもずっと、ずっと深くエレオノーレの心を打った。

「
シュトライテン卿」

なにをしているエレオノーレ。
なにをしている、好き放題言われ、殴られたまま泣き寝入りするつもりか！

ジン、とひり付くような頬の痛みが、そう叱りつけてくれている気がした。

「
」

胸の中に、炎が点る。荒れ狂う炎。

己が人生で出会った二人の偉人に対する思いを明確に自覚した紅蓮の騎士は、奮い立って自らの両脚で立ちあがった。

「リーゼスクレイヤー ツツツ！！」
「ッ！？」

部屋を出ていった女に追いつがり、エレオノーレは怒声を張り上げた。

「礼だ、受け取れ ！！」

ガン！ と気合の籠った拳を叩きつける。
不意打ち気味に炸裂したエレオノーレの報復の一撃が、ヘルガローゼの顔を捉えた。

「グウツ！？」

「よくも好き放題やってくれた。貴様は妊婦だからな、それだけで勘弁してやる」

「い、言ってくれる……！！」

忌々しそうに睨み据えて来るヘルガローゼの目が、今は少しも堪えない。

エレオノーレは、完全に立ち直っていた。

それがわかったのか、不快げな顔つきのまま、ヘルガローゼは何かを言い募るでもなく、あっさりとエレオノーレに背を向けた。

「……それでいい。ヴィッテンブルグの人間は誇りと共に死ね。ゆめその在り方を損なうな」

「心得ている。息災でな、……先輩」

ひら、と手を振って、ヘルガローゼは今度こそ去って行った。

「シュトライトン卿………私は、貴方をお慕いしておりました」

素直な思いをこぼして、エレオノーレは？ 軍人？ に戻る。
いつか戦場で死ぬその時まで、己は己の生き様を貫こう。

そう、ヘルガローゼの遠くなっていく姿を見送りながら、エレオノーレが心に決めようとした瞬間

「ヴィッテンブルグ。アオスブルフは生きているぞ。騎士団に入れば再び会える」

黄金の声がして。

紅蓮は、その甘い誘いに、惑った。

第11話「新生する炎」

第11話

「新生する炎」

死ぬには早いぞ、英雄殿。

意識が世界に融けゆく中、男はそんな言葉を聞いた気がした。

私が築くオペラの舞台。そこに立つまでに死なれたら、私が困る。獣殿も困る。

なに……？

（ここ、は………？）

目が覚めた。

靄がかかった頭で思考したのは、己の存命を疑うことだ。

（なぜ、生きている……？）

死んだ。戦車の残骸に肺腑を貫かれ、間違いなく死んだはず。
戦場に死骸を晒し、そのままヴァルハラへと旅立つはずだった。

（なのに、なぜ）

なにより、あのような場所で死ぬなど貴方にとっても無念だろう？

貴方は死にたくなかったはずだ。死を恐れてはいなかったが、それでも護りたい物があつたはずだ。

この国を。滅びゆく運命を覆したいと望んでいたはずだ。

（そうだ。私は死にたくない。死ぬにしても運命を。ドイツ第三帝国の滅びを避けて、なんとしても千年帝国の礎とならねば）

故に、ヴァルハラへと旅立たんとする貴方を引きとめさせてもらった。

生きたいのなら、私と契約して欲しい。

（契約？）

頭の中に いや、魂そのものに語りかけられている。男は誰に教えられるでもなく自然と悟って、？世界？に問うた。

（契約とはなんだ？）

貴方に人間を棄ててもらう。

己が人たらしとするを諦め、魔の域に住む魔性となれ。

さすれば私は貴方に力を与え、新たな生命を与えるだろう。

（……………）

さあ、如何に？ 答えを聞かせて欲しい。

（…………己の【人間】を棄てる。それだけなのだな？）

そのとおり。

（ならば 是非もなし。もう一度命を与えらるというのなら。貴様が神か悪魔かは知らんが、いいだろう。結ぶぞ、その契約！）

よろしい。聖槍十三騎士団黒円卓第十三位、副首領、カール・エルンスト・クラフト＝メルクリウスが貴方を祝福する。

ようこそ天秤の担い手。我がオペラの監督者。聖槍十三騎士団黒円卓第七位、大隊長、アオスブルフ・フォン・シュトライテン。

貴方に意ディリス・スパーダ悪魔の魔名を。青騎士の称号を贈ろう。

（……なるほど。力とは、）

魔術。英雄殿も実在だけは識っているだろう。

もっとも、貴方に植え付けるそれは【エイヴィヒカイト】という、私のオリジナルなのだがね。

（クラフトと名乗ったな。……あのクラフトか？）

然り然り。貴方の友、カール・クラフトだ。

（誰が友だ。……だがまあ、今度ばかりは感謝しよう。どうやらこれは、泡沫うたかたの夢というわけではなさそうだ）

まさか感謝されるとは。恐縮ものだ、骨を折って聖遺物を造り出した甲斐もあるというもの。

感謝された事に対する感謝だ。私はもう一つ、貴方に贈るモノがある。

（……………）

貴方は【信じた友に裏切られる】。

呪いを。貴方の宿業をカタチにした。

どうか、英雄殿。貴方が己の宿業を超える時が来るのを祈っておこう。

【 :アオスブルフ: 】

「ぎゃあっ!?!」

翻るは白い巨剣。

屠るはソビエト赤軍

連合を組んだ有象無象の雑魚の一端。

血飛沫と共に絶命したそれを無感動に見やり、私　アオスブルフはまた一つ数を足した。

「　　89,986。……ふん、相も変わらず数ばかり。私にとって都合はイイが、いい加減にこの作業にも飽いてきたな」

敵陣の只中で敵の魂魄を吸い、私はつまらなそうに独語した。

今のアオスブルフは公的には既に死亡している。

だが、それは？人？としての死であって、？魔？としての生を私は生きていた。

聖槍十三騎士団黒円卓第七位、大隊長、ディリス・スパードとして。

「……殺せば殺すほど強くなり、己の魂の質を磨けば磨くほど進化する、か。……それにしただって私は殺し過ぎたか」

「そうでもねえぜスパード。シュライバーの馬鹿はもう100,000以上も殺してる」

背後より湧いた異形の気配に、しかし私は動じることなく肩を竦めた。

「アレと比べられても困るがな。　　ヴィルヘルム、貴様は殺らなのか？」

振り返った私の目に入ったのは、いつぞやの白い青年　『闇の賜物』という聖遺物を得て吸血鬼と化したバケモノだった。

名をヴィルヘルム・エーレンブルグ。

聖槍十三騎士団黒円卓第四位、カスィクル・ベイ串刺し公。ワルシヤワ蜂起戦にて敵味方の区別なく殺しまくって肅清されたはずの、『白いSS』。

ヴィルヘルムは興が乗らないのか、退屈そうに欠伸をした。

「今は昼だからよお、いまいちやる気でねえんだわ。ワリイが青騎士殿に任せた」

「……構わん。が、あんまりサボり過ぎてると、どこぞの勤勉な白い餓鬼に差をつけられるぞ？」

「カハツ！ シュライバーの馬鹿が勤勉うゝ？ いやまあ確かに俺たちにとっちゃそうかもな。……ま、夜になったらやりまくる。それまでアンタはお仕事に励んでな」

そう言つて、ヴィルヘルムは姿を消した。

アオスブルフはその気配の行方を探る気にもならず、密かに嘆息した。

「……アンナに神父にブレンナー、それにエレオノーレにキルヒアイゼンまで騎士団にいるらしいが……」

聖槍十三騎士団の首領は、あのラインハルト・ハイドリヒである。生きていたことには驚いたが、同時に嬉しくもあった。

死んでいたと思った憧れの人が生きていたのだ。嬉しくないはずがない。

だが。再びかつての上官の下で剣を振っている内に、私はどうしても逃れられない疑問に捕らわれていた。

「……なぜ、ハイドリヒ卿は出陣しない」

運命の神槍。その正当後継者であるラインハルト。

あれほどの力があれば、間違いなくドイツは救われる。滅びの運命から逃れられる。

ラインハルトにはそれだけの力があつた。にも拘らずどうして？

どうしてラインハルトは動かない？

いや、ラインハルトが動かないのには何も言うまい。王が気安く動くようでは堪ったものではないからだ。

だが、ではどうしてラインハルトは私やシュライバー、エレオノーレやマキナに出陣を命じない？

そうだ、ラインハルトが動くまでもない。

私だけで、戦線を回復し、敵に大打撃を
否、一国を滅ぼして
見せるというのに。

「……なにか考えがあるのか？」

わからない。

クラフトの甘言に乗って、何かあると思いながらも騎士団に入団した。

この力は所詮もらい物だ。だが、その力を振るうために、国家のために振るうために私は騎士団に入ったのだ。

にもかかわらず、どうして力を振るう事をハイドリヒ卿は赦して下さらないのか。

どうして、裏に潜む魔物のように暗躍するのか。

どうして、力を蓄えることに専念するのか。

どうして？

どうしてだ？

「……契約では、私がヒトを棄てる事を対価にしている。……クラフトは、私が国を救う事を望んでいるのを知っているが、それを実行に移せるかどうかは言明していない……」

嵌められたか？

かつて稀代のカリスマとして、最高の政治手腕を振るった計算家としての直感がそう囁いたが、私はかぶりを振ってそれを否定した。

（馬鹿な。私を嵌めてどうする。私は軍人。ハイドリヒ卿も軍人だ。ならば軍人の取るべき道を心得ているはずなんだ）

不安を押し潰し、ただ今は与えられた命令 『力を蓄えろ』 を実行する。

白い巨剣が、再び敵兵の首を刎ねた。

第1部最終話「怒りの日」

第1部最終話

「怒りの日」

1945年、5月1日　ドイツ、ベルリン。

第二次世界大戦の終焉を刻む、ドイツ第三帝国の落日。
ソビエト赤軍に虐殺され、破壊し尽くされて陥落寸前の帝都。

「なんだ……これは……？」

それを眼に、蒼髪の男　アオスブルフは呆然と呟いた。

燃え上がり崩れ落ちる建物の崩壊。

逃げ惑い、助けてくれと叫び続ける帝国民たち。

止まる事の無い銃火と、鈍重な戦車の侵攻。

それを眼に、鳶色の瞳にその光景を収めて、青騎士スパードは疑問した。

「なんだこれは？」

意味が分らない。

アオスブルフの率直な感想だ。

本当に、意味が分らなかった。

私が護るはずだった全てが崩れ落ちてゆく。

覆るはずの運命は正当なモノとして帝国を滅ぼしていく。

あれはなんだ？

アオスブルフの目の先には、敵味方の区別なく殺し回る白騎士の姿。

あれはなぜ、救いの手を求める帝国民を殺している？

意味が分らない。

私たちの敵は連合軍、ソビエト赤軍だろう？

どうして同胞を殺しているんだ。

意味が分らない。

意味が、分らない。

アオスブルフはよろよと歩きだした。

銃撃が頭に胴体に腕に脚に当たっても意にも介さず、幽鬼のような足取りで、歩き出していた。

ホロコースト
塵だ。

アオスブルフの耳に入るのは、悲鳴、怒号、銃声。

死。死。死。死。

滅びだ。

啞然と。呆然と。愕然と。凝然と。

虚ろな表情で、アオスブルフは歩いていた。

その足が、止まる。

不意に目の前に生きている人間を見つけたのだ。

「……曹長」

斃れているその男。階級章は曹長。

帝都守護のために参じた義勇兵なのだろう。忠勇なる男の断末魔の

息吹を感じ取り、声をかけた。

「ちゅ……中……佐……殿……我……々……の……祖国……は……？」

曹長は致命傷を負っていた。

しかし、死の瀬戸際に立っているにも拘らず、男は自らよりも国の安否を尋ねてきた。

それに、アオスブルフは考えた。

そうだ。我々の祖国。我が愛しの国はどうなった？

何をいまさら。

黒田卓の魔人が聞いたなら、そうやって鼻で笑いそうな自問である。

滅んだよ。燃えて炎の中に消えていったんだ。

「……ああ、つい先刻、総統閣下が自決なさった。残念だ。我らは敗北したらしい」

渴いた笑みを口元に刷きながら、アオスブルフはかつてなく力ない笑みを浮かべていた。

こんなふうに笑ったのは、初めてだ。

上手く笑えたかどうか分からない。

ただ、愛国心の強い男は、アオスブルフに嘆きを残した。

そう、嘆きだ。

愛する国が。妻が。息子が。娘が。父が。母が。

死んで滅んで消えてゆく。

消えた後も悪名だけを背負って地獄に落ちる。

それが嫌で嫌で仕方がない。

曹長は、アオスブルフに本音を語った。

本音を受けて、アオスブルフもまた愛国者として問いを投げていた。

「勝ちたいか、曹長」

「……勝ち……た……い……？」

ゴボツ、と血の泡を噴きながら、不思議そうに、おかしそうに曹長はアオスブルフに問いかけて来る。

「そうだ。祖国と同胞、愛する者を護るために戦ってきた貴様に問う。貴様はこのまま敗北を、死を受け入れるのか？」

問いはそのまま己に返って来た。

受け入れる？

なにを？

なぜ？

人であることをやめたのは、そもそもなんのためだ？

ふざけるな。

覚醒した。

愕然と硬直していた意識が溶けて、アオスブルフの魂に火が点った。

「 曹長。貴様選ばせてやる」

戦うか、否か。

アオスブルフはただ、曹長へそれを問いかける。

バチンッ！！

燃え上がる炎の名は、【怒り】。

「曹長。貴様は、勝ちたくはないか」

勝ちたくはないか？

勝ちたい。

男は、吼えた。

血の泡を吐き出しながら吼えた。

勝ちたい！

勝ちたい！！

「……か……勝ち……たい……ッ……！！！！」

勝利を。勝利を。

ジークハイル……ジークハイル……ジークハイル！

「了解した。ではこれから貴様は我が同志だ。殺すぞ、斃すぞ、黄金を」

私たちを裏切った獣を。

劫^{ゴウ}オッ！！ とアオスブルフの体から赫怒の炎が溢れ出る。

契約はなった。

この男に、この帝都に、この魂に誓おう。

己を謀^{たば}かった報いを。

我が最愛を滅ぼした罪を。

あの、逆徒ハイドリヒを誅さん！

そうか、そうだったのか。

この段になってようやく理解する。

一騎当千のバケモノ　このベルリンは、自分たち聖槍十三騎士団に捧げられた生贄なのだ。

きつと黒円卓の魔人たちは、命じられるがままに、儀式の成就のために赤軍や、帝国民を殺し回っているのだろう。

度し難い。赦しがたい。

殺す。絶対に殺す。

この意地と誇りと魂の全てに誓って、黒円卓は破壊する！

「ハイドリヒい……」

漏れた声は怨嗟のソレ。
悪鬼羅刹の呪いのソレ。

アオスブルフが見上げる空は、血と炎と黒煙に彩られたもの。
スラスチカ
鉤十字の刻印を映し出しているところから考えても、既に儀式は八割方成功を収めていると見ていい。

『総員傾注！ 我らが主、偉大なる破壊の君の御前である。その御言葉、黙し、括目して拝聴せよ！』
ハガル

全ベルリンへと届いているであろう天使とも間違えそうな少年の声。
白騎士ウォルフガング・シュライバーの謳う声に、アオスブルフは激しい憎悪の籠った瞳を空に据えた。

赤く、赤い、燃え盛るベルリンの天。
ヒンネム
そこに君臨し、忘我となつたベルリンの住民、兵士たちを見下ろし

ているのは輝く黄金の獣。

たなびく鬘の如き髪は黄金。総てを見下す王者の瞳もやはり黄金。この世の何よりも鮮烈華麗であり、荘厳で美しくおぞましい黄金。存在してはならない、愛すべからざる光の君。

十一の騎士を率い、黒円卓を治める最強の魔人。

その傍らに在るのは、輪郭の曖昧な影絵の如き男である。

老人とも、若者とも、いかようにも取れるその外見は、隠者のように地味で頼りない。

この対照的な二人こそ、彼らを見上げる総ての存在を凌駕する魔人の中の魔人。

怪物の中の怪物。

黒円卓　聖槍十三騎士団第一位と十三位。首領と副首領。

「
卿ら」

まるで世界の総てを睥睨するように、黄金の髪 of 男の口が開く。

「己の一生が、すべて定められていたとしたら何とする」

「勝者は勝者に。敗者は敗者に。なるべくして生まれ、どのような経緯を辿ろうとその結末へと帰結する。この世界の仕組みとやらが、そのようになっていたとしたら何とする」

「ならばどのような努力も、どのような怠慢も、祈りも願いも意味は無い。神の恵みも、そして裁きも、全てそうなるように定められているだけだとしたら……卿ら悪魔の子、世界の敵として滅ぼされんとしている者たちは、一片の罪咎なしに犯され、奪われ、踏み躪られているに過ぎない。この、忌むべき法則ゲットの環の中で」

全ての者が恍惚と聞いている中、ただ一人、かつて友と呼ばれていた青い騎士は堪え切れぬ激情を黄金に射こみ続けていた。

「死すらもまた、解放ではない。永劫、そこに至れば回帰をなし、再び始まりに戻るのみ。そして卿らの始まりとは、犯され、奪われ、踏み躪られる敗北者としての始まりだ。ゆえにこの後も無限に苦しみ、無限に殺され続けるだろう。そのように生まれた以上、そのようになるしかない。それを口惜しいと　思うか否か。それを覆したいと　思うか否か」

彼は人に非ず。

黄金の獣。

黒太子。

忌むべき光。

破壊の君。

彼を飾る言葉は全て、例外も無く魔の言霊を帯びたものばかり。
黄金　ラインハルトは魔的なカリスマを放出して、命じた。

「思うならば、戦え！」

不遇の人生を変えたければ、魂を差し出せ。

「運命とやという収容所^{ゲッター}に入るのを拒むなら。共に戦え。
卿ら、何を求める？」

ジークハイル
勝利を
ジークハイル
勝利を

―勝利を我らに与えてくれ《ジークハイル・ヴィクトーリア》

「承諾した」

男の、非生物的なまでに整った麗貌に、深い亀裂が刻まれた。
ドクトル・ファウストいわく、誰がどう見ても笑いにしか見えない
が、同時に誰がどう見ても笑っているようには見えない異形の微笑
み。

メフィストフェレス
愛すべからざる光。

「ならば我が軍団^{レギオン}に加わるがいい」

言葉が紡がれたその瞬間に、異変が起きた。
銃を持つ者はそれを口に。
刃物を持つ者はそれを胸に。
何も持たぬ者は火の中に。
撃ち、刺し、飛び込み、自殺する。

百人が、千人が、万人が、異常な速度で死んでいく。
その魂が、黄金の男へと残らず吸い寄せられていく。

帝都を貪り尽くす獣の暴食。ホロコースト

アオスブルフはこの光景を、心の底から嫌悪し侮蔑し憎しみ抜いた。

「……美しい。まさに悲劇……貴方を慕い、貴方が守るべき者達が、
貴方のせいで死んでいく。貴方はそれを嘆き、喜び、自らの力へと
変えるだろう。我が友　私がこの滑稽な人生で、ただ一人畏敬の
念を抱いた獣殿……貴方はこれから何を成す？」

影絵の男が口を開いた。

「あなたはいつたい何を求める？」

「愚問だな」

影絵の男の言葉に対し、黄金の獣は眼下を睥睨していた目を傍らの
相手へと移しながら応えた。

「法則の破壊と超越……私に道を指し示したのは卿だろう。もっと
も、他に個人的興味がないでもないが」

「それはいつたい？」

「法則を創った者」

「なるほど、すなわち」

神か、悪魔か……

「私は優秀な“生徒”を得て幸せだ。エイヴィヒカイトを正しく理解出来ているのは、現状、貴方と英雄殿くらいだ。いや、素晴らしい。この瞬間だけは、何度経験しても飽きがこない。それだけに正直名残惜しくもありますが……」

「行くのか、カール」

影絵の男の言動からその真意を理解できたのだろっ、黄金の獣もまた確信を持って問いかけて、名残惜しさを垣間見させていた。

「ええ、その名も置いて行きましょう。いずれ、必ず逢えるはず。半世紀もすれば東方のシャンバラが完成する。そこに私の代理を用意しておきますゆえ、貴方の下僕達の遊び相手にすればよろしい。今回の契約で、貴方の魂は他に比類なき強度を得た。聖櫃創造の試行も果たした以上、怒りの日まで“こちら”に留まる理由はありません。クリストフのこともある。万全を期すために、幾人か“あちら”に連れて行っただけです」

カール・クラフトの言葉に心得ているようにラインハルトは頷きを返し、その視線を再び眼下へと向け直す。

ラインハルトが示す視線の先にいるのは忠実なる下僕にして、とりわけ精強の騎士でもある四人の魔人だ。

「無論、もとよりそのつもりだ。ザミエル、シュライバー、ベルリツヒンゲン、アオスブルフ……いや、アオスブルフは置いて行こう。どうやら私について来るのに不満がありそうだからな。彼ら三人を共に連れて行こう」

「結構、それは隙のない人選だ。……というより、あの三人以外では、今のあなたに随伴することも適わぬか。それにしても……ふふ、英雄殿は相当お怒りのようだ。彼の心が手に取るように分かる」

「随分と悪辣な契約を持ちかけたらしいが、カールは恨まれていないのか？」

「ええ。彼にとって私は？薄い？モノ。獣殿に並みならぬ親愛を感じていたからこそ、あなたの裏切りが赦せないのでしょうか」

エレオノーレは困惑していた。

アオスブルフが置いて行かれ、自らが連れて行かれる事に。だが主と仰いでいたラインハルトの決定に口を挟むわけにもいかず、ただ黙っていた。

第十位の大隊長、ベルリツヒンゲンは不動の佇まいで懐かしい感覚のする男　アオスブルフを見つめ、次いでクラフトに視線を転じた。

白い少年、シュライバーは拗ねていた。

これからの退屈を思っ、今の内に1人でも多く殺しておこうと考えていた。

「では、またいずれ、獣殿。再び我らがまみえる時こそ、互いの目的が成就すると祈りましょう」

「否、成就させると誓うのだ。傍観するだけでは何も掴めん。卿の悪い癖だな、カール」

「……確かに。であればここに誓いましょうか」

ジーク・ハイル
勝利を我らの手に。

この日　世界を敵に戦い続けた髑髏の帝国は壊滅した。

当時、随一の科学力を有していたこの国が、裏では常軌を逸した魔術儀式を実践していたというのもまた真偽はともかく有名な話である。

その申し子たる選ばれた超人達……彼らのために収集された数多の秘宝。

それらが何処にいったのか、そもそも本当に実在していたのか、未だもって不明である。

「……………
ジーク・ハイル
勝利万歳」

青騎士は、消えゆく黄金を地上より見送りつつ、無限の怨嗟と極大の炎怒を魂に刻みつけ、勝利を誓った。

第1部最終話「怒りの日」（後書き）

アオスブルフ「ラインハルトぶつ殺す！！」

作者「それなんて無茶ブリ？」

アオスブルフ「裏切り者に死を！」

作者「それなんて無理ゲー？」

アオスブルフ「とりあえず原作開始まで大人しくしていよう。ハイドリヒにはこっち側に帰って来てもらわないと困る。殺せないじゃないか」

作者「作者的には封印エンドが一番平和的でいいんじゃないかなあ
って思うんだけど」

アオスブルフ「この劣等があー！！」

第1部で登場した人物と用語の紹介（前書き）

知ってるだろうけど、知らない人のためのものです。

第1部で登場した人物と用語の紹介

第1部で登場した人物と用語の紹介」

用語」

・「聖遺物」……聖槍十三騎士団が使用するマジックウェポン。
一般的に言われる聖遺物とは異なり、人の想念を吸い続けたことで意思を持った器物の総称であり、必ずしも「聖なる」遺物とは限らない。「餌」として吸ったものが信仰心であろうと怨念であろうと、力のあるアイテムならば聖遺物にカテゴライズされる。

・「エイヴィヒカイト」……聖遺物を武装化し、超常の力を行使する理論体系。聖槍十三騎士団副首領が編み上げた複合魔術。駆式に人間の魂を必要とし、エイヴィヒカイトを操るには常に殺人を続けなければならない。ただ殺した人間の数に相当する霊的装甲を常時纏うようになり、殺せば殺すほど強くなっていく。また、原則としてエイヴィヒカイトを操る者には銃火器やナイフ、打撃などといった“常識的攻撃手段”は通じず、ダメージを与えることは出来ない。その他の特性として、

- 1・聖遺物とその使徒は、聖遺物によってしか倒すことが出来ない
- 2・聖遺物が破壊されればその使徒も死ぬ
- 3・聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ止められない
- 4・聖遺物が破壊されない限り、その使徒は不老不死などがある。

・「位階」……エイヴィヒカイトは経験を積むことでレベル、つまり位階を上げることが可能である。位階が上がると聖遺物の形状・効果範囲は変化拡大し、身体能力は爆発的に跳ね上がり、超感覚を得るなど、殺しの手段として見た場合、位階を上げることには凄まじいメリットがある。位階が一つ違えば、強さの次元は桁違いになる。聖槍十三騎士団の団員は、ほぼ全員が第三位階「創造」に達している。

1・「活動」 初期段階で、聖遺物に振り回されている位階。暴走・自滅の危険性が高い。生身のまま限定的に契約している聖遺物の特性を使用できる。例えば、刀剣類の聖遺物であれば手を触れずに物を斬り裂ける、といったようなもの。常人の殺傷には便利だが、戦闘に使えるレベルではない。

2・「形成」……契約している聖遺物を具現化できる。五感・靈感が超人化し、高度な破壊と戦闘行為が行えるようになる位階。また、取り込んだ魂の中に高密度な個体があれば、それを実体化させることも可能になる。

3・「創造」……いわゆる必殺であり、切り札を獲得する位階。詳細不明。この位階に達することで、ほとんどの者は聖遺物の形状が大きく変化する。

4・「流出」……創造の能力を永続的に展開する位階。霸道型の創造ならば、その創造を全世界に広げ、覆う世界の法則を書き換える力。求道型の創造ならば、己の魂を特異点に到達させる。

・「武装形態」……エイヴィヒカイトを操る者らの特性には四つの

タイプがある。これには本人の思想や性格、または契約している聖遺物の系統が影響してくるため、同じ術理で紡がれた武装であろうと見た目や使い方は一致しない。

1・「人器融合型」……肉体の一部、あるいは全身を聖遺物と融合させるタイプ。攻撃面に特化したタイプで、全タイプ中最高の身体能力を持つ。が、発動中には極度の興奮状態に陥り、理性的な判断が困難となる。好戦的かつ破壊的な者、一瞬の快楽を好む刹那主義者、享楽主義者などがなりやすい。聖遺物は、怨念を餌とした拷問器具・処刑用刑具などが大半。

2・「武装具現型」……聖遺物を武装として具現化する、スタンダードなタイプ。バランス面に優れた基本形のタイプで、特筆すべきメリットもないが、明確なデメリットもない。強いて言えば、使用者と道具という主従関係がはつきりしているために暴走・自滅の危険が少ないのがメリット。職業的戦闘訓練を受けた者、徹底した現実主義者、合理的で感情の制御に長けた者などがなりやすい。聖遺物は、戦闘で血を吸った武器・兵器などの戦闘における道具が大半である。

3・「事象展開型」……一般的な魔道・呪術に最もイメージに近いタイプ。防御・補助面に優れたトラップ&カウンタータイプで、物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中にはゼロの者もいる。しかし殺すことが難しく、人器融合型と組んで行動した場合には非常に危険な存在。理知的で聡明な者、深い探究心と神経質な拘りを持つ者、学者や芸術家タイプの者がなりやすい。聖遺物は、作者の狂的な情熱を餌とした書物・何らかの芸術品などが大半。

4・「特殊発現型」……上記三つのどれにも属さない、あるいは複数の性質を持つ特殊なタイプ。他を凌駕する強大な力を発揮するこ

ともあれば、状況によっては全く役に立たないこともあるなど、非常に不安定なタイプ。ある特定の事象や人物に心を奪われ盲目になっている者、純度の高い宗教家や復讐者などがなりやすい。聖遺物は、質の浄不浄を問わず信仰を餌とした物が大半。

人物

例：平均的な一般人

能力値

| | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 統率：1 | 武力：1 | 知力：3 | 政治：2 | 魅力：3 |
| 幸運：3 | 魔力：0 | | | |

0～3が【平凡】

4～6が【非凡】

7～9が【達人】

10～20以降は【化物】

20～は【人智を超えたナニカ】

名前：アオスブルフ・フォン・シュトライテン

性別：男

身長：187cm

体重：80kg

血液型：A

生年月日：1918年12月24日

趣味：鍛錬、読書、セックス

特技：女誑し、人物鑑定

性格：無駄嫌い、執念深い、異常なまでの向上心

好きなもの：努力型人間、綺麗系の美女、己よりも有能な者、強烈な欲望を持つ者

嫌いなもの：ラインハルト、怠惰な人間、無能な人間、誓いを守れぬ者

階級：中佐

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第七位・大隊長

称号：青騎士、青い悪魔

出演作品：オリ主のため無し

能力値

（人間だった頃）

統率：10 武力：10 知力：9 政治：10

魅力：10 幸運：10 魔力：20

（魔人錬成後）

統率：12 武力：70 知力：9 政治：9

魅力：20 幸運：9 魔力：80

（？形成？発動状態）

統率：10 武力：85 知力：9 政治：8

魅力：25 幸運：9 魔力：100

（？創造？発動状態）

統率：8 武力：100 知力：10 政治：7

魅力：30 幸運：8 魔力：120

【スキル】

・「無窮の武練：A＋」……ひとつの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあつても十全の戦闘能力を発揮できる。

・「心眼：A」……修行。鍛錬によつて培つた洞察力。窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

・「天才：A」……あらゆる分野で発揮される万能の才能。ランクAの天才は苦手なものなど何もない。

・「カリスマ：A」……軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、Aランクはおよそ人間として獲得しうる最高峰の人望と言える。

・「軍略：A」……一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直感力。ただ本人が強すぎるためあまり必要なスキルではない。

・「政治：EX」……稀代の政治手腕を誇る能力。5年以内に潰れかけていた国の財政を建て直すことさえできる。三国志の諸葛孔明を超える政治力。

・「狂人：A＋」……前世の晩年では、激務に激務が重なつて狂気を発露するようになっており、そのせいか転生後は生まれた時から狂っていたことになる。が、普段の言動は常人のそれであり、ただ勝利への渴望と、異常なまでの執念深さにのみ狂気が表れる。その狂気は狂人の巣窟である黒円卓の中でもトップクラス。

・「火神の加護：EX」……「火」属性のあらゆるものを無効化する。アオスブルフを「焼き」たければ、太陽並みの熱を用意せねば通用し無い。ただ、人肌の温もりなど、攻撃系統ではない熱や害のないものは感じられる。前世世界の神様が授けたチート能力。

・「思念炎：A+」……パイロキネシスの俗称で呼ばれるアオスブルフの異能。精神が昂揚するにつれ火力を増大させることができ、その炎は破邪の属性を帯びているため「魔」に対する効果は絶大。己の間合いにしか発動できないが、その火力は黒円卓の魔人にも通用する。前世世界の神様が授けたチート能力。

・「女誑し：EX」……チートだが、最初から持っていた天然もののスキル。女であるというだけで、人種や種族、年齢の一切を超越して問答無用でアオスブルフに好意を懷かせ、口説かれればかなりの高確率で落ちる。失敗しても好意が増大し、いずれは陥落してしまふ全人類の男の敵。ただし、既に恋人や想い人の類がいる女には何故か通用しづらい。

【人物紹介】

転生者。前世では日本人だった。

【無駄】【無意味】と認識する全てのものを徹底的に嫌う合理主義者であり、【無能】【怠け者】を嘲る差別主義者でもある。

西暦1980年生まれで、2018年に内閣総理大臣に就任。持ち前の能力と人脈、カリスマを駆使して日本の政策の【無駄】、政治家の天下りという【無駄】、その他諸々の【無意味】を徹底的に排除。いつまで経っても貯まり続ける外国に対する借金を「払う必要はない」とし、借金を踏み倒す。25年には世界で一番落ちぶれた国・日本の経済を回復し、税金の引き下げ、国民の生活水準の向上

を成功させた。日本史上最大の政治手腕を発揮し、民衆の支持は絶大だったが、自衛隊を解体し政府指揮下の軍隊を設立しようとした翌年に、日本の台頭を恐れた諸外国の総意により、事故に見せかけられて暗殺された。

享年57歳。稀代のカリスマとして、現代世界で知らぬ者のいない傑物とされた。

死後、気がつけば1918年に生まれ、アーリア人として後のドイツ第三帝国に転生したことに気づくや、今度は軍人への道を志す。政治家の仕事には完全に倦んでおり、かつ裏切られるのはこりごりだったためだ。

持ち前の向上心も手伝い、彼は瞬く間に軍人としての才能を開花。16歳で士官学校 ユーゲントを主席卒業し、少尉に任官。その2年後の36年に初陣を飾る。

異例の出世スピードで39年には大尉に昇進し、ポーランド侵攻で多大な戦功を挙げた。その年。彼は始めて尊敬できる人物と出会う。

ラインハルト・ハイドリヒ。後の黒円卓首領にして、ゲシュタポ長官。

彼とラインハルトは黒円卓の黎明に出会い、そして互いを『友』と呼び合う親友となった。

だが、人生の絶頂に居た彼は、43年に転落し始めることになる。

ラインハルト・ハイドリヒの死。

歴史を熟知していたはずのアオスブルフはしかし、25年間のアーリア人としての人生を生きているうちに史実ではラインハルトが暗殺されているということを忘れていたのだ。

前世の己もまた暗殺されて志半ばで倒れた。そして今また尊敬する人を【暗殺】で失ったという悲憤で、数日間の間は虚無感に支配されて思考を停止していた。

直属の上官が死亡したことにより、中佐に昇進しゲシュタポから武装親衛隊のダス・ライヒの大隊長に異動されたのを契機に虚無感を振り払い、戦場にもむくことになる。

だが、ラインハルトの死の報せに衝撃を受けていたのはアオスブルフだけではなかった。

エレオノーレ。ダス・ライヒにアオスブルフの副官として配属された若き少佐である。ラインハルトの死に対するショックから抜け切っていなかった彼女は、戦場での働きに精彩を欠いていたのだ。そして、本来ならありえない失態を演じる。

戦争の最中アオスブルフは戦車の破片が脇腹に深々と突き刺さり、重傷を負った。アオスブルフは表向き死亡したことになったのだ。

そして、本格的にアオスブルフの転落は始まった。

気がつけば、アオスブルフは盟友カール・クラフトの魔術により死に至ろうとしていた体を再構築され、聖遺物を操る魔人へと転生させられていたのだ。

二度目の死を乗り越えた英雄の魂は凄まじい密度と強度を発現し、他の団員たちとは一線を画する存在になっていた。後にエレオノーレとも再会するが、それを喜んでいる暇もなく事態は急展開を迎える。

聖槍十三騎士団の結成に尽力するエレオノーレを横目に、アオスブルフは生きていたラインハルトの動向に不穏なものを感じた。

彼は髑髏の帝国のために動いているのか？ そんな疑問だ。

今の自分たちが動けば、帝国が敗れることなどありえないのだが、何故かラインハルトとカール・クラフトは闇で暗躍するのみ。

そして、決別のとき。

45年の、ベルリンでの戦い。

あるうことかラインハルトはアオスブルフを始めとする団員たちに、

敵味方の区別無く殺戮するように命じたのだ。

啞然とするアオスブルフだったが、すぐにラインハルトのおこないに激怒。愛する祖国を滅ぼされた憎しみを全てラインハルトに向けて復讐を誓った。

喰らった魂の総数は敵約10万。

約18万の敵味方を殺戮したシュライバーに次ぐ魂量である。

4人の大隊長の筆頭であり、唯一現世に残った大隊長として首領代行の権限を得るが、聖餐杯ヴァレリア・トリファに指揮権を移譲。単独で世界をまわることになる。

死を超越した彼を団員たちは畏怖と共に認めており、ラインハルトやカール・クラフトをそれぞれ「ハイドリヒ」「クラフト」と呼び捨てにしているが、団員たちはそれを黙認している。

独断で聖遺物の魔人を増やす権限を持っており、とある狂科学者にロート・シュピーネという魔名と聖遺物を与えてヴァレリア・トリファの指揮下に配属した。

首領と副首領を除く黒円卓最強の存在で、彼の首に掛けられている懸賞金は国が2つ買えるほどの金額である。

聖遺物は【憤怒の巨剣】。形態は武装具現型。位階は創造。発現は求道型。階級は中佐で、青化の英雄。

彼の聖遺物はカール・クラフトが錬成した宝具で、特別製。ラインハルトの持つ【運命の神槍】と起源を同じくする白い巨剣であり、流出位階に到達しうる可能性を秘めたアオスブルフに期待をかけて贈られたものである。

ただ、不死創造は一切おこなうことができず、ただの武装としての用途でしか使用できない。

青騎士の称号を贈られているが、彼は黄金錬成 ラインハルトの

不死創造には不要の存在であり、それゆえにラインハルトに対する
従属の呪いは薄い。

カール・クラフトに『信じた友に裏切られる』という呪いを受けて
おり、その宿業がラインハルトの一件で事実であると知ると、一生
涯、友を作らないことにした。

首領を除く騎士団員はカール・クラフトを嫌っているが、アオスブ
ルフは全く恐れておらず、むしろどうでもいい奴と認識されている
のみである。

名前：ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ
性別：男

身長：192cm

体重：77kg

血液型：A型

生年月日：3月7日

階級：大将

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第一位・黒円卓首領

称号：愛すべからざる光の君、黄金の獣
メフィスト・フェレス

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：15 武力：15 知力：15 政治：15

魅力：15 幸運：15 魔力：25

（魔人錬成後）

統率：100 武力：200 知力：150 政治：150

魅力：200 幸運：100 魔力：測定不能

（？形成？発動状態）

統率：100 武力：250 知力：150 政治：150

魅力：250 幸運：150 魔力：測定不能

（？創造？発動状態）

統率：200 武力：300 知力：200 政治：200

魅力：300 幸運：200 魔力：測定不能

（？流出？発動状態）

「全て予測不能」

【スキル】

持っていないスキルなど無い！！……と思う。だって百万人以上の経験とか、団員たちのスキルとか使えるんだもん。

【人物紹介】

完全無欠のチート。マジ鬼畜。黒円卓のメンバー（副首領除く）が総出でかかってても勝てない。テンプレのチートオリ主でさえ、この人の前には霞む。公式チート最強型。

魅力や武力が能力数値100を突破している時点で、常人は彼の威光に耐えられず圧死してしまう。存在自体が凶器。むしろ広域殲滅兵器。

『ネギま！』や『真剣で私に恋しなさい』の人たちが黒円卓に加勢しても打倒は不可能。ラインハルトさんを倒したければ聖遺物を所

持し、なおかつ同じ【流出位階】に到達していないと話にならない。ナギ・スプリングフィールドやジャック・ラカン、人間最強クラスをデコピン一発でミンチ　もとい、殺せてしまふ。原作と強さは変わっていないのにこの有様である。

髑髏の帝国　ドイツ第三帝国の秘密警察長官。最終階級は大将。黄金の長髪と瞳を持ち、常に気品に溢れた振る舞いをし、「人体の黄金律」とまで評されるほどの完璧な美貌を持つ男。幾百万もの魂を喰らい、比類なき強さの魂を有し、超越者として騎士団に君臨する絶対にして最強の存在。

かつてはナチスの高官であり、人として真つ当に生きていたが、カール・クラフトと出会ったことで自らの持つ本当の力と永劫の既知感に囚われた世界の法則を知る。そして自身の持つ真の全力を発揮できる機会を求め、既知感の法則を破壊するために活動を始める。聖槍十三騎士団を盟友カール・クラフトと共に結成し、本作品最高最悪の武装組織を率いるようになる。

それを持つ者は世界を支配すると言われる運命の槍の正当後継者。第二次世界大戦の裏で配下の団員たちを暗躍させ、敵も味方も滅ぼし続け、壊し続けた。ベルリン陥落時より消息不明。彼が戻ってきたとき、世界は破滅するとされる。

その気になれば連合軍を撃破できたであろうに、それをせず髑髏の帝国を見捨てたばかりか、敵味方の区別無く殺す命令を団員に出したことで盟友アオスブルフの怒りを買った。アオスブルフの元・憧れの人。現在は憎むべき、斃すべき敵と認識されている。

名前：ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤー

性別：女

身長：173cm

体重：61kg

スリーサイズ；

B：83 W：60 H：82

血液型：A

生年月日：1918年7月7日

階級：大尉

出演作品：オリキャラのため無し

能力値

統率：7

武力：6

知力：7

政治：4

魅力：8

幸運：5

魔力：0

【人物紹介】

オリキャラ。代々有能な軍人を輩出してきた軍人貴族リーゼスクレイヤー家の長女。

幼い頃から聡明で、強いリーダーシップを発揮していたことから将来を期待されて、ヘルガローゼもまたその期待にこたえて才能を開花させていく。

彼女の運命はユーゲントでアオスブルフという青年と出会ったことから加速し始める。

36年の初陣。39年のポーランド侵攻にいたるまで、公私にわたってアオスブルフを補佐していたが、アオスブルフがゲシュタポに異動してからは一度しか会っていない。だがいつもアオスブルフのことを気につけ、一度だけ会った時にアオスブルフの子供を妊娠。軍を離れ、アオスブルフの子を産んでリーゼスクレイヤー家の子供として育てていた。

43年にアオスブルフが戦死したという報せを受けて愕然としたが、アオスブルフが死ぬかもしれないという覚悟はあったためすぐに立ち直る。

そして、ラインハルトに続きアオスブルフまでも失って完全に心が折れてしまったエレオノーレに喝を入れ、再起を促すのに一役買った。

第2部以降で彼女の子孫が登場する可能性が……？

名前：エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ
性別：女

身長：180cm

体重：65kg

血液型：A型

スリーサイズ；

B：87 W：64 H：85

生年月日：1919年12月13日

階級：少佐

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第九位・大隊長

称号：紅蓮、赤騎士^{ルベド}

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：8 武力：7 知力：7 政治：5

魅力：7 幸運：5 魔力：0

（魔人錬成後）

統率：9 武力：67 知力：7 政治：4

魅力：8 幸運：4 魔力：78

（？形成？発動状態）

統率：10 武力：83 知力：7 政治：4

魅力：8 幸運：4 魔力：100

（？創造？発動状態）

統率：10 武力：98 知力：7 政治：4

魅力：9 幸運：4 魔力：120

【スキル】

・「心眼：B」……修行、鍛錬によつて培つた洞察力。窮地において、その場に残された活路を導き出す戦闘論理。

・「火砲術：A」……銃火器の類いを十全に使いこなせるスキル。

跳弾なんて朝飯前で、（絶対にしないが）鼻歌混じりに跳弾の嵐を起こすことも可能。

・「狂人：A＋」……ある想いを狂気の域にまで押し上げた思いの力。が、強大な理性の力で狂気は普段は抑えられている。

・「カリスマ：C」……軍団を指揮する天性の才能。Cランクは軍団長として非常に優秀で一国の軍隊を司る名将クラスである。

・「洞察眼：A」……自身や指揮する部隊に掛けられた策略、謀略を看破する洞察力。Aランクの洞察眼を持つ者にはほとんどの策謀が通じない。

【人物紹介】

元武装親衛隊第二師団、ダス・ライヒの大隊副官（原作では大隊長）。

騎士団幹部であり最高実力者の1人。赤騎士。

首領、服首領を除いた騎士団中では群を抜いて強大な存在。

葉巻を好む女性軍人。軍人貴族出のエリートだったが、ラインハルトと関わり魔道に傾倒。

首領の暗殺事件後とほぼ同時期に闇にもぐり、片腕として騎士団の結成に尽力する。正統派軍人ゆえに厳格苛烈な性格で、思想と行動に【遊び】が無く、物事に妥協や容赦をすることがない。またプライドが高く、一度彼女の逆鱗に触れたものは無事ではすまない。

部下であったベアトリスからは深く敬愛されて懷かれており、彼女自身も満更ではなかった模様。反対に、ユーゲント時代からの同窓生で旧知の間柄であるリザとは昔から反りが合わずに剣呑としている。

同じくユーゲント時代の先輩であり上官でもあるアオスブルフに深い思慕の念を懷いており、ラインハルトに対しては純粹に「忠誠」

と「軍人としての憧れ」の念を持っているのみ。
原作では全身の左半分に深い火傷の痕があったが、本作品では火傷を負っていない。

カール・クラフトから「炎（恋情）は届かない」という呪いを受けており、彼を嫌悪し、一線を引いている。

ベルリン陥落時より消息不明。

名前：ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン
性別：女

身長：159cm

体重：46kg

血液型：B型

スリーサイズ；

B：78 W：56 H：77

生年月日：1923年7月30日

階級：中尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第五位
ヴァルキュリア

称号：戦乙女

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：5 武力：7 知力：5 政治：3

魅力：7 幸運：6 魔力：0

（魔人錬成後）

統率：5 武力：50 知力：5 政治：3

魅力：7 幸運：7 魔力：48

（？形成？発動状態）

統率：5 武力：65 知力：5 政治：3

魅力：8 幸運：7 魔力：66

（？創造？発動状態）

統率：5 武力：83 知力：5 政治：3

魅力：9 幸運：8 魔力：100

【スキル】

・「心眼：B」……修行、鍛錬によって培った洞察力。窮地において、その場に残された活路を導き出す戦闘論理。

・「剣術：A+」……時代が時代なら剣聖と呼ばれる域の剣士。一対一の戦闘ならば、たとえ格上が相手であろうとも互角に戦うことができる。場合によっては勝利を手繰り寄せることができる。

・「対武器戦闘：C」……敵が何らかの武器で武装している場合、スキル【心眼】による洞察力が増大する。

・「戦乙女：A+」……集団戦、個人戦に関わりなく、絶望的な戦況においてのみ発動する固有スキル。その戦場において自身に有利になりやすい展開を手繰り寄せ、不利な戦局を一気に覆すことので

きる可能性が発生する。

【人物紹介】

聖槍十三騎士団・黒円卓第五位。

戦乙女と称えられた独ソ戦争の英雄であるが、性格は陽気で飾り気のない気さくな女性。他団員とは異なる陽性な気質の持ち主で、本来騎士団に居るには不自然な人物であったが、ある目的のために敢えて騎士団に所属していた。騎士団に入る以前からの上官であったエレオノーレを深く敬愛しており、首領と副首領に魂を売っていない団員でもある。アオスブルフと同様にラインハルト打倒を目指している。

魔道に頼らず純粋な剣士としての技量を極めており、魂の総量などの根本的な力の差を別にすれば、エレオノーレと伍するほどの戦闘技術を持っている。

名前：リザ・ブレンナー

性別：女

身長：174cm

体重：57kg

スリーサイズ；

B：93 W：60 H：91

生年月日：1919年2月11日

血液型：O型

階級：無し

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十一位

称号：大淫婦^{バビロン}

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：2 武力：1 知力：7 政治：6

魅力：7 幸運：3 魔力：0

（魔人錬成後）

統率：2 武力：35 知力：7 政治：6

魅力：7 幸運：3 魔力：60

（？形成？発動状態）

統率：2 武力：37 知力：7 政治：6

魅力：7 幸運：3 魔力：72

【スキル】

・「優柔不断：D」……すぐにはなにも決断できず、うじうじと考える癖がある。偽善者の類いが所持するスキルである。が、ランクDは軽度のため、いざ決断すれば行動は早い。

・「女の底力：C」……？？？

【人物紹介】

元生命の泉教会、レーベンスボルン所属。

アーリア人の純血種を量産するために尽力し、軍籍ではないが少佐相当の地位と権限を持つ。

人格破綻者揃いの騎士団内では、比較的良識のあるまともな部類の人間で、裏では自分の大儀の為に人を殺すことに葛藤している。しかし葛藤するだけで何もできず、またしようもしない「偽善者」でもあり、自他共にそれを認め、たびたび揶揄・非難されていた。カール・エルンスト・クラフト「メルクリウスから「死者しか愛することができない」という呪いを受けており、彼を畏怖し、嫌悪している。

凶悪な存在を生み出す特性を持っており、戦闘力は高くないが、聖槍十三騎士団黒円卓第二位の「トバルカイン」を武器として使役するので単体での戦力分析はあまり意味がない。

もしも聖槍十三騎士団と戦端を開くのなら、ある意味で真っ先に潰さなければならない存在。

エレオノーレとはユーгент時代からの付き合いであり、アオスブルフともその時から面識があつたが彼とも意見が合わず仲が悪い。リザ本人はそれほど嫌いではないが、アオスブルフが一方的に嫌っている。理由は、「優柔不断な奴は嫌い」とのこと。

名前：ヴィルヘルム・エーレンブルグ
性別：男

身長：182cm

体重：73kg

血液型：AB型

生年月日：7月10日

階級：中尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第四位

称号：串刺し公
カズイクル・ベイ

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：2 武力：7 知力：3 政治：0

魅力：6 幸運：0 魔力：2

（魔人錬成後）

統率：2 武力：54 知力：3 政治：0

魅力：6 幸運：0 魔力：60

（？形成？発動状態）

統率：2 武力：68 知力：2 政治：0

魅力：6 幸運：-1 魔力：72

（？創造？発動状態）

統率：2 武力：75 } 96 知力：-1 政治：0

魅力：7 幸運：-10 魔力：95

【スキル】

・「水星の呪い：EX」……真に欲したものが手に入らない。本気を出せば出すほど幸運値がマイナスを振り切る。

・「戦争狂：A」……戦争こそ生き甲斐。戦争の相手に足る敵と戦うとき、最大のコンディションに跳ね上がる。

・「直感：B」……獣じみた直感力。超能力並みとは行かないが、かなりすごい。ただし不意打ちに弱い。

【人物紹介】

元オスカー・デイルレワンガー隊、第36SS所属武装擲弾兵師団団員。かつては凶悪犯罪者上りの軍人で、気性が荒く、殺人狂で戦闘狂。非常に好戦的で、正しい意味で「危ない」性格の持ち主。現存する団員の中では、アオスブルフを除き一、二を争う戦闘力を持つ。

父と姉との近親相姦から生まれたアルビノ。日光をはじめとした光の類いを嫌うが、夜になると全ての感覚が増幅し研ぎ澄まされるという性質を有している。本人もその吸血鬼のような属性を好み、アイデンティティとしている。

また筋金入りの人種差別主義者でもあるが、その一方で高い戦闘能力や精神力を見せる相手には人種を問わず一定の敬意を見せる側面も持つ。ワルシャワ蜂起戦にて敵味方市民の区別無く虐殺したことで肅清されたとされるが、その後も世界中の戦場に出没しているため、戦場のオカルトとして兵隊世界では【絶対に戦ってはならない】伝説の存在になっている。

同胞で歩きし団員にも遠慮なく殺意を振りまく狂人ではあるが、同時に騎士団員たちを「戦友であり、家族である」と称するなど、彼なりの仲間意識を懷いている。

カール・エルンスト・クラフト＝メルクリウスから「永遠に奪われる」という呪いを受けており、彼を畏怖し、憎悪している。

名前：ウォルフガング・シュライバー
性別：男

身長：158cm

体重：50kg

階級：少佐

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十二位・大隊長

称号：白騎士、アルペド悪名高き狼フロース・ウイトニル

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：2 武力：9 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：4

（魔人錬成後）

統率：2 武力：69 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：76

（？形成？発動状態）

統率：2 武力：83 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：99

（？創造？発動状態）

統率：2 武力：90 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：110

（？創造（真）？発動状態）

統率：2 武力：99 知力：-10 政治：0

魅力：3 幸運：-2 魔力：140

【人物紹介】

元武装親衛隊第三師団、髑髏の大隊長。兼、東部戦線遊撃部隊、アインザッツグルッペンの特務行動部隊長。階級は少佐。騎士団幹部であり最高実力者の1人。白騎士。首領、副首領を除いた騎士団中では群を抜いて強大な存在。

然団員中最も人を殺した、主義も主張も信念もない殺人狂の少年。敵味方の区別無く殺し、暴れ、肅清されかけたところを騎士団に拾われる。

人格は異常者という形容すら生ぬるいほど完全に壊れており、その行動と凶暴さは制御不可能。が、ことコロシに関しては異常なまでに優れているため、実力至上主義の騎士団内では不動の地位。

力で屈服させられた首領以外には味方にすら牙を向けかねない危険人物。

現在、ベルリン陥落時より消息不明。

名前：アンナ（ルサルカ）・マリーア・シュヴェーゲリン「ロリバー
ジョン」

性別：女

身長：146cm

体重：34kg

血液型：B型

誕生日：11月18日

スリーサイズ；

B：75 W：50 H：72

階級：准尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第八位

称号：魔女の鉄槌
マレウス・マレフイカルム

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：4 武力：？ 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：20

（魔人錬成後）

統率：4 武力：45 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：60

（？形成？発動状態）

統率：4 武力：48 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：70

（？創造？発動状態）

統率：4 武力：55 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：80

【人物紹介】

聖槍十三騎士団黒円卓第八位。
アーネンエルベ局の魔女。騎士団最年長者。

ドイツ古代遺産継承局アーネンエルベの初期メンバーで、騎士団入団以前から魔道に踏み込んでいた。

第1部では魅惑的な貴婦人然とした大人の女の容姿をしていたが、時が経つと何を思ったのか十代の少女のような外見に変身する。作者的には残念。

実年齢は副首領を除いた団員の中で最年長を誇り、気まぐれでマイペースな性格、かつふざけたような言動が目立つが、その本性は狡猾で残忍で老獪な拷問好きで、ヴィルヘルムと残忍さは同等。

他の団員同様、消息不明の幹部（アオスブルフ除く）たちを畏怖しているが、その中でも特に、魔道において自らより遥か高みの領域に居るメルクリウスに対しては、「永遠に追いつけない」という呪いを受けており、激しい劣等感と憎悪を懷いている。

ただ、幹部であるアオスブルフに対しては畏怖の感情はなく、普通の友人のように接していた。

大戦中、所属していたアーネンエルベの同僚に憧れに近い思慕の念を懷いていたが、呆気なくその人物は戦争で死亡してしまう。彼に自身の気持ちを伝えられずに終わったことが少なからず後悔として残っており、彼女が不死を追い求める無自覚かつ根源的な理由となっている。

名前：ヴァレリア・トリファ

性別：男

身長：192cm

体重：77kg（本来の体では身長：181cm 体重：66kg）

血液型：A型

誕生日：6月4日

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第三位

称号：神を運ぶ者
クリストフ・ローエングリン

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：4 武力：-10 知力：6 政治：7

魅力：4 幸運：3 魔力：10

（魔人錬成後）

統率：4 武力：70 知力：7 政治：8

魅力：7 幸運：4 魔力：100

（？創造？発動状態）

統率：4 武力：70 知力：7 政治：8

魅力：8 幸運：2 魔力：120

【人物紹介】

現世に残った唯一の幹部、アオスブルフから指揮権の移譲を受けた騎士団の暫定的最高司令官。裏で策を練り、団員たちを指揮・扇動している。

本名はヴァレリアン・トリファ。その本性は冷酷非情で、目的のた

めには手段を選ばない残忍さを持つ狂信の徒。他者の心を探り、同調して言葉巧みに誘導する人身掌握・操作術に長けている。また自分の霊質を操り、普通の人間に擬態したり、騎士団員すらも欺くほどの隠形をも可能とする。

カール・クラフトからは「自分に近い存在から死んでいく」という呪いの言葉を受け、『邪なる聖人』とも呼ばれており、彼の力を信用しているアオスブルフには一番距離を置かれている。

名前：ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン

性別：男

身長：186cm

体重：?kg

階級：大尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十位・大隊長（原作では七位）

称号：鋼鉄の腕、黒騎士
ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

不明

(? 形成? 発動状態)

統率：7 武力：85 知力：7 政治：3

魅力：6 幸運：3 魔力：110

(? 創造? 発動状態)

統率：7 武力：100 知力：7 政治：3

魅力：6 幸運：3 魔力：130

【人物紹介】

聖槍十三騎士団・黒円卓第七位。騎士団幹部、大隊長。四騎士の1人、黒騎士。銘は鋼鉄。呪われしマキナ。

元武装親衛隊第一師団、アドルフ・ヒトラー親衛連隊所属。

無精髭を生やした武人で、寡黙で殆ど言葉を発さず、無愛想。実際に一度死んだ人間で、その際に名を失っており、ベルリツヒンゲンという名も称号であり、本名ではない。彼のことを知る数人の者はマキナと呼ぶこともあるが、これも名ではない。

正体はディエスイレ原作主人公と同じく聖遺物そのものであり、その個我は第二次世界大戦に活躍した英雄であるが、本人は自分が何者であつたかを忘却している。

死は唯一無二であるという持論を持っており、自分がいつ死んだかもわからず、死者として蘇らされていたことに絶望し、真実の死を渴望している。ツアラトウストラ 原作主人公と戦い殺すことで開放される約束を双首領と結んでおり、彼との戦いを「ヴァルハラへ逝くための最後の聖戦」として待ち望んでいる。

宿敵であるツアラトウストラと、自分とほとんど似たような境遇であるアオスブルフに対してのみはやや饒舌になり、彼らを「戦友」や「兄弟」と呼ぶなど、どこか親しげな様子すらも浮かばせる。事実、生前の彼はアオスブルフと共に戦場を駆け抜けたこともある。その強さは首領を含めた騎士団員全員に一目置かれ、双首領に忠誠を誓わず独立独歩の立ち居地を取っていることにも不満の声はない。

カール・クラフトから「安息（死）を取り逃がす」という呪いを受けており、彼を嫌悪し、信用もしていない。

先述したように、体そのものが聖遺物であり、桁外れの威力を誇る両腕を持ち、無双の体術による格闘をおこなう。

奥の手の創造は、『人世界・終焉変生』。
ミスガルス・ウォルスング・サガ

「真実の死を迎えたい」という彼の渴望からの能力は、その拳に触れたモノが誕生して一秒でも時間を経ていたものならば、物質・非物質を問わず、たとえ概念であろうともその歴史に強制的に幕を引く（破壊する）、防御が絶対不可能な一撃必殺の力。創造を発動させると両腕が鋼鉄の腕に変化する。

一切揺らぎのない求道型創造の究極形であるため、上位の位階にあるラインハルトですらこの一撃を喰らえば無事では済まず、そのため万分の一程度でありながらも彼に勝利しうる可能性を持つ。

その属性ゆえか、『白騎士』と『赤騎士』でさえ打倒困難な『青騎士』の天敵である。

ベルリン陥落時より消息不明。本来は七位に据えられるはずが、本作では十位になっている。

名前：カール・エルンスト・クラフト

性別：男

身長：？

体重：？

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十三位・副首領

称号：水銀の王

メルクリウス

出演作品：Dies irae

能力値

測定不能！

【人物紹介】

老若の判別がつかず、影絵のように造形をハッキリと記憶できない曖昧な存在。

世界の真理に最も近い魔術師、ヘルメス・トリスメギストス。その他にカリオストロ、カール・エルンスト・クラフト、ファイスト、ノストラダムス、パラケルスス、クリステイアン・ローゼンクロイツ、ジェフティ等々、歴史上に数え切れないほどの多くの名を持ち、果てしなく長い時を彷徨っていた。

エイヴィヒカイトを生み出し、それを団員に授けた全団員の師にあたる存在であると同時に、一部の将校たちのお遊びでしかなかった騎士団を魔人の集団に仕立て上げた張本人。

首領と唯一同格の存在で、アオスブルフを含めた三人で親友同士でもある。だが、首領とアオスブルフ以外の古参の団員からは病的なまでに恐れられ、憎まれ、「存在をなかったことにしたい」とまでされるほど忌み嫌われている。狂人揃いの団員たちの中でもなお異常なほどの狂人かつ危険人物であったと言われる。彼と面と向かって口を聞くことができた者は、首領とアオスブルフにマキナの3人

のみで、エレオノーレとシュライバーですら一線を引いているほどであった。

また、古参の団員は彼によって皮肉交じりの魔名と決して覆すことができない『宣託（呪い）』を授けられ、その業と彼の力に対して極度のコンプレックスを懷いており、どうにかして彼と彼に自覚させられた宿業を超えようと躍起になっている。

人の一生を『未知を既知に変える作業』と定義しており、既知しか感じられない己の生と永劫回帰の法則に囚われた世界に飽き果てている。

彼のとつた全ての行動の目的も、この無限に続く既知感を超越するための布石である。

第1部で登場した人物と用語の紹介（後書き）

ラインハルト、マジチート。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9442x/>

主義主張

2011年10月29日18時28分発行